

2023年度
大阪府手話言語条例シンポジウム

手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

～ 中間報告 ～

報告書

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

はじめに ～企画にあたって～

「大阪府手話言語条例シンポジウム」は、今年度で6回目を迎えました。2021年1月に開催した3回目以降、コロナ禍により遠隔での開催をつづけてきましたが、今回は遠隔と一部対面を導入したハイブリット方式で実施しました。3年にわたり、登壇者同士も、またフロアの参加者とも直に触れ合えないことはとても残念でしたが、一方で、遠隔開催によって全国からの参加が可能となり、私たちの活動と研究に寄せていただく関心の輪が広がったことは大きな力となりました。

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」が誕生したのは、2017年6月でした。同年3月に施行された大阪府手話言語条例の施策として、日本財団からの3年間に亘る助成を受け、公益社団法人大阪聴力障害者協会と大阪府との連携・協力によって運営されました。0歳～6歳の未就学児を対象とする「こめっこ」は月2回の土曜日開催ですが、2018年に0歳～3歳を対象とする平日の「べびこめ」が始まり、2020年度より週2回活動しています。2020年2月にNPOこめっこ(特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構)が設立され、同年4月1日より、「こめっこ」「べびこめ」活動を引き継いで今日に至りました。現在の「こめっこ」「べびこめ」は、大阪府「こめっこプロジェクト」の一環として実施されています。

また、2020年度より日本財団から新たな助成を得て、NPOこめっこの自主事業として「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」を開始しました。言語脳科学、言語獲得、学習能力(理解力・思考力)、心理発達(人格形成)の4分野から、手話言語を獲得・習得する子どもたちにアプローチする研究で、その目的は、きこえない子どもたちの真の言語力を適正に評価することです。そのフィールドとして、就学後の聴覚障害児を対象に手話言語習得支援等を行う活動「もあこめ」がスタートしました。これにより、手話のあふれる支援の場「こめっこ」は、乳児期から児童期・青年期に至るまで、きこえない子どもたちの手話言語獲得・習得を一貫して支援し、参加ご家族の協力を得て、実証研究のためのデータの蓄積を進めることが可能になりました。

2024年1月から2月にかけて開催した「2023年度 大阪府手話言語条例シンポジウム」では、研究プロジェクトの中間報告を行いました。第1部(1月15日～2月10日)のオンデマンド配信は、昨年につづき、家族からのメッセージを活動映像と共に届ける「こめっこ参加ご家族の声 Part2」の配信をメインに、「こめっこの紹介」(2021年度報告)と「こめっこ研

究について」(2022 年度報告)を再配信することで、今回新たにご参加くださる方々への事前説明となるよう構成しました。

2月10日の午後に開催された第Ⅱ部パネルディスカッションは、NPO こめっこ常務理事久保沢寛氏と私とで進行役を務めました。話題提供として、研究プロジェクトの各分野の代表者とチームメンバーが、「心理発達」「言語獲得」「理解力」「思考力」「言語脳科学」に関する報告を行い、さいごに「事例報告」として7名の子どもたちの成長を紹介しました。つづいて、指定討論者にお迎えした松崎丈氏(宮城教育大学)には「コミュニケーション支援」の視点から、中島武史氏(兵庫教育大学)には「コーダ(CODA)」の視点からお話いただきました。その後、参加者からの質問への回答をとおして登壇者間の議論が深まり、過去のシンポジウムのディスカッションでキーワードとなった「手話という言語への敬意」^{リスペクト}「セーフティネットとしての手話言語獲得」「オーディズムへの挑戦」が連想される話題も多く、NPO こめっこの活動のもつ意義と研究を進めることの有益さを再確認できる時間となりました。

日本財団、大阪府、公益社団法人大阪聴力障害者協会をはじめ、開催にあたってお力添えいただきました方々に深く感謝申し上げます。情報保障のための資料提供など、ご登壇くださった先生方にはご負担をおかけし、報告書作成においてもご協力いただきました。また、第Ⅰ部配信「ご家族の声」企画に参加いただいた保護者の皆さまに、心からお礼を申し上げます。この冊子の内容はNPO こめっこのホームページにも掲載する予定ですので、ご紹介いただければ幸いです。本報告書が一人でも多くの方々の目に留まり、きこえない子どもたちとご家族の支援の一助となることを真に願います。

2024年3月

大阪府手話言語条例評価部会長
「こめっこ」スーパーバイザー
河崎佳子(神戸大学)

手話言語を獲得・習得する子どもの力 研究プロジェクト ～中間報告～

企画主旨

NPOこめっこでは、大阪で実施されている乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」を舞台に、2020年より大阪府と連携協力しながら「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」（日本財団助成事業）を進めてきました。

今年度のシンポジウム（第Ⅱ部 パネルディスカッション）では、話題提供として、心理発達、言語獲得、学習能力（理解力・思考力）、脳科学の各研究分野から中間報告を行います。そして、指定討論者として、聴覚障害特別支援教育の専門家お二人にご登壇いただき、ディスカッションを展開します。

尚、第Ⅰ部では、「こめっこ活動」「こめっこ研究」の紹介、昨年度に続く「参加ご家族の声Part2」を事前配信にてお届けします。皆さまのご参加をお待ちしています。

第Ⅰ部 事前配信

2024年1月15日(月)～2024年2月10日(土)12:00まで

事前に配信する動画視聴（オンデマンド配信）

- こめっこの紹介（2021年度報告の再配信）
- こめっこ研究について（2022年度報告の再配信）
- こめっこ参加ご家族の声 Part2

第Ⅱ部 パネルディスカッション

2024年2月10日(土) 13:00～16:30

Zoomを使ったオンライン開催

- 話題提供 詳細は内ページをご覧ください
- 指定討論
 - ・「コミュニケーション支援」の視点から 松崎 丈 氏
 - ・「コーダ（CODA：Children of Deaf Adults）」の視点から 中島 武史 氏
- ディスカッション



松崎 丈 氏

宮城教育大学
教育学部特別支援教育専攻
聴覚・言語障害教育コース
教授



中島 武史 氏

兵庫教育大学
特別支援教育専攻
障害科学コース
講師

参加無料

手話通訳・字幕あり

申込方法

下記いずれかの方法
でお申込みください



・申込フォーム：QRコード

・申込フォーム：こめっこHPより

<https://www.comekko.com>

・FAX:

06-6748-0089

参加申込書（最終頁）にご記入の上、
FAXにてお送りください

・E-mail:

symposium@comekko.org

氏名(ふりがな)、メールアドレス、
TEL(FAX)番号、所属先、職種
(あるいは立場)をご記入の上、
お送りください

申込締切

2024年2月3日(土)

「こめっこ」はNPOこめっこの登録商標です

プログラム

手話言語獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト ～ 中間報告 ～

第Ⅰ部 事前配信

-オンデマンド-

◆ 主催者挨拶 オリエンテーション 物井 明子 (NPOこめっこ 代表理事)

- こめっこの紹介 (2021年度報告の再配信)
- こめっこ研究について (2022年度報告の再配信)
- こめっこ参加ご家族の声 Part2

第Ⅱ部 パネルディスカッション

-Zoomを使ったオンライン開催-

2024年 2月10日 (土) 13:00~16:30

12:30~13:00 参加者は指定のZoomに入室してください

13:00~16:30 パネルディスカッション

*途中休憩を挟みます

コーディネーター：河崎 佳子・久保沢 寛 (NPOこめっこ 常務理事)

● 話題提供

～こめっこ研究・各分野からの報告～

- | | |
|----------------|---------------------------|
| ① 心理発達分野 | 河崎 佳子 |
| ② 言語獲得分野 | 武居 渡 氏 |
| ③ 学習能力 (理解) 分野 | 久保沢 寛 |
| ④ 学習能力 (思考) 分野 | 酒井 邦嘉 氏 |
| ⑤ 言語脳科学分野 | 酒井 邦嘉 氏 |
| ⑥ 事例報告 | 中尾 恵弥子
(NPOこめっこ 副代表理事) |



酒井 邦嘉 氏

東京大学大学院
総合文化研究科
教授



武居 渡 氏

金沢大学
人間社会研究域
学校教育系
教授



河崎 佳子

神戸大学大学院
人間発達環境学
研究科 教授
NPOこめっこ
スーパーバイザー

● 指定討論

- | | |
|---|---|
| 1. 「コミュニケーション支援」の視点から | 松崎 丈 氏
宮城教育大学 教育学部特別支援教育専攻 聴覚・言語障害教育コース 教授 |
| 2. 「コーダ (CODA: Children of Deaf Adults)」の視点から | 中島 武史 氏
兵庫教育大学 特別支援教育専攻 障害科学コース 講師 |

● ディスカッション

言語脳科学・学習能力（思考力）分野 代表 酒井 邦嘉

手話を第一言語として概念獲得する環境にある子どもを対象に、言語理解に基づく概念や自然法則を把握する力や、時間や空間の変化などを推論する力を調査することにより、手話で育つ子どもたちの評価法や教育環境の改善に繋げていきます。

就学前児や小学生を対象に、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題を作成し、言語を通してさらに複雑な概念を獲得し、そこから思考の深まりにつなげていくかについて、各個人の手話や日本語の獲得進度を指標として比較検討します。また、問題を解いている最中の脳活動をMRI装置で検出するため、大人と子ども（小学校高学年以上）を対象として、言語野を中心とした脳機能の定量的な解析を行う予定です。



学習能力（理解力）分野 代表 武居 渡・河崎 佳子

手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成しました。

質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的变化を評価します。



言語獲得分野 代表 武居 渡

こめっこに来ている子どもたちの手話言語力と日本語力を縦断的に評価し、その成長を追跡しています。

手話の文法力と語彙力を測るために「日本手話文法理解テスト」と「手話語彙流暢性検査」を、言語を使って他者と適切にやりとりする力を評価するために「質問応答関係検査」を、年に1回ずつ行っています。同時に、手話を獲得して育つ子どもたちの日本語力についても、文法力（J-COSS）や語彙力（絵画語彙発達検査）を用いて検証していきます。



心理発達（人格形成）分野 代表 河崎 佳子 (研究統括責任者)

こめっこが支援する子どもたちの心理発達を、情緒、認知、コミュニケーションなど複数のラインから捉える縦断的研究を、観察、インタビュー、検査によって行っています。

日本手話での実施を検討した上で、「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」（3歳までは半年に1回、以降は年1回）と「K式発達検査」（概ね2歳以上を対象に年1回）を行っています。また「心の理論」課題の日本手話劇版を作成し、4～5歳以上を対象に施行しています。今後さらに、小学生高学年を対象に性格検査等を織り込んでいきます。



目 次

はじめに

企画にあたって	河崎佳子	1
---------------	------	---

シンポジウム次第		3
----------------	--	---

目次		6
----------	--	---

主催者挨拶	物井明子	8
-------------	------	---

第Ⅰ部 事前配信

こめっこ参加ご家族の声 Part 2

第Ⅱ部 パネルディスカッション

【話題提供】 ～こめっこ研究・各分野からの報告～

①心理発達分野	河崎佳子	24
②言語獲得分野	武居 渡	27
③学習能力(理解)分野	久保沢 寛	31
④学習能力(思考)・言語脳科学分野	酒井邦嘉	34
⑤事例報告	中尾恵弥子	40

【指定討論】

「コミュニケーション支援」の視点から	松崎 丈	50
「コーダ(CODA:Children of Deaf Adults)」の視点から	中島武史	55

【ディスカッション】		61
------------------	--	----

【資料】

資料-1	スライド	76
資料-2	参加人数状況	91
資料-3	アンケート報告	92
あとがき	河崎佳子	117

【主催者挨拶】

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

代表理事 物井 明子

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構、NPO こめっこ代表理事の物井明子と申します。シンポジウムの主催者代表としてご挨拶申し上げます。

本日は2023年度大阪府手話言語条例シンポジウムへのご参加を誠にありがとうございます。みなさまと一緒に開催できることを大変嬉しく思います。

本シンポジウムは日本財団の助成、大阪府の連携、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力をいただき開催されております。

手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、未就学児を対象として2017年度にスタートしました。そして、この大阪府手話言語条例シンポジウムは2018年度より開催し、毎年事業について発信してまいりました。また2020年度からは、小学生を対象とする「もあこめ」活動を「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」の一環として実施しています。この研究プロジェクトは日本財団の助成事業で行っています。

今年度は、この「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」の中間報告をいたします。

シンポジウムのコーディネーターは、今年度もNPOこめっこスーパーバイザーの河崎佳子先生が中心となって、NPOこめっこ常務理事の久保沢と一緒に進めてくださいました。

それでは今年度のシンポジウムについてご案内いたします。

第Ⅰ部は事前配信です。3つあります。1つ目は2021年度に配信したこめっこの紹介、2つ目は昨年度配信したこめっこ研究プロジェクトの進捗状況についてご報告した内容を再配信いたします。特に初めて参加される方はぜひご覧ください。3つ目は昨年度の「こめっこ参加ご家族の声」を紹介しました。これに続く「こめっこ参加ご家族の声 Part2」をお届けします。

第Ⅱ部パネルディスカッションは、Zoomによるオンライン配信となります。コーディネーターは河崎先生と久保沢です。まず話題提供は、「こめっこ研究・各分野からの報告」です。6つの分野があります。

1つ目は心理発達分野より 神戸大学大学院教授の河崎佳子先生

2つ目は言語発達分野より 金沢大学教授の武居渡先生

3つ目は学習能力(理解)分野 より NPOこめっこ常務理事の久保沢寛

4つ目学習能力(思考)分野と

5つ目言語脳科学分野より 東京大学大学院教授の酒井邦嘉先生

6つ目は事例報告として NPOこめっこ副代表理事の中尾恵弥子からご報告をいただきます。

次に、指定討論として、宮城教育大学教授の松崎丈先生に「コミュニケーション支援」の視点から、兵庫教育大学講師の中島(なかしま)武史先生に「コーダ(両親ろうの聞こえる子ども)」の視点からお話いただきます。

そして、話題提供と指定討論でお話しされたみなさんでディスカッションを行います。

全国のみなさまには、このシンポジウムを通してこめっこが大切にしているきこえない子どもとそのご家族の支援についてご理解をいただけたら幸いです。

最後にこの場をお借りしてご報告させていただきます。博報堂教育財団より、2023年第54回博報賞を受賞しました。

博報賞は児童教育現場で実践活動に尽力している団体や学校に顕彰しています。私たちの活動が評価されたことは大変うれしく思います。これもみなさまの温かいご理解・ご支援と、熱意あるスタッフのおかげです。心より深くお礼申し上げます。

第 I 部

事前配信

こめっこ参加ご家族の声
～ Part 2 ～

こめっこ参加ご家族の声

～part 2～

こんにちは。ハリーです。こめっこのスタッフをしています。今からご覧いただく動画は「こめっこ参加ご家族の声 Part2」です。今回は、10家族が協力してくださいました。子どもたちの年齢は様々で、1歳の赤ちゃんから小学5年生です。

そうそう、こめっこには3つのグループがあります。「べびこめ」は、0～3歳の赤ちゃんとトドラーさんのグループ。「こめっこ」は、3～5歳の幼稚園・保育所に通う子どもたちのグループ。そして、「もあこめ」は小学生のグループです。

ここにやってくる子どもたちのお母さん、お父さん、おばあさんがおのこの思いを語ってくださいました。「べびこめ」「こめっこ」「もあこめ」それぞれの活動の様子を撮影した映像を織り込んで紹介します。45分ほどになりますが、どうぞゆっくりご覧ください。

1歳女兒 父・母

娘は現在1歳5か月で、聴力は裸耳で両側105dBスケールアウトの重度難聴です。3か月頃から補聴器を装用して、先月1歳4か月の時に両側人工内耳手術をしました。

べびこめに参加したきっかけですが、新生児スクリーニング検査を行ってから確定診断の検査の日まで不安で、ネットで妻が情報を得ようとしている中で、MOEを知りました。連絡をして家庭訪問に来ていただいたのが、きっかけとなっています。そこで、いろいろお話を聞いて、べびこめの参加に至りました。

娘は早産で2週間ほどGCUに入院していて、生後発育も順調で安定してきて、いよいよ退院という時にリファアを告げられました。まさに青天の霹靂(へきれき)で思ってもいないことでした。「うちの娘が聞こえない？そもそもリファアってなんだ？」と、よくわからないながらも、不安が押し寄せ、スマホでいろいろ検索をしては落ち込んだりしていました。わからないながらも、聞こえないということは手



話なのかなあとか、とにかくどこかに繋がりたいたいという思いでした。

べびこめに参加して、正直最初は気持ちを追いついていなかったけれども、行くたびに手話を覚えたり、手をひらひらと手話で楽しそうにコミュニケーションをしているちょっと上のお子さんたちを見て、娘もこんな風



になるのかなとか、そうやって欲しいなと思うようになりました。3か月頃からべびこめに参加して、娘は行くとじっと周りをよく見て、ああよく見ているなと思いました。

娘には、5歳の健聴の兄がいますが、家族4人でよく参加していて、上のお兄ちゃんも自然と手話を覚えて、楽しく日常に少しずつ手話のある生活を送っています。娘は1歳を過ぎてから、『おいしい』の手話や指差しをたくさんするようになりました。

べびこめに参加して、一番大きな気持ちの変化は、娘がこれから聞こえない中でどういう風に育っていくのか、どういう風に成長していくのかというところに、一番の不安を感じていたんですが、べびこめに参加することで、実際にいろんな先輩のお母さんやお父さんのお話を聞くことができ、年上のお子さんたちの行動や手話を見て、手話を使っているいろんなスタッフの方と笑顔で笑いながらいろんな行動をしていることが、やはりそこはすごく自分の気持ちの中に入ってきました。何も将来心配することはないんじゃないかと、娘にはこういう環境があるし、手話があって、ろうのお友だちやスタッフがいるから、今後、自分の中にもアイデンティティを持ってやっていくことができるのではないかと思います。べびこめに参加したことによって、そういった部分が一番僕にとっての気持ちの安心になりましたし、将来を見据えても、娘にとっていい機会を得られたなと心から感じました。

今後こめっこという活動をずっとずっと続けて行って欲しいですし、自分の娘以外にも、そういう子たちが出てきた時にも安心できる場として、ずっと継続していただきたいな、というのがこれからの私たちの願いとなります。

1歳男児・4歳男児 母

2人の息子がいて、2人とも難聴です。聴力も2人とも同じくらいで、だいたい補聴器なしで80(dB)くらいです。お兄ちゃんに関しては、口話と手話。弟はまだ2歳なので、手話をメインに会話、コミュニケーションをとっています。

私の家庭はデフファミリーなので、手話が絶対あるという環境なのですが、お兄ちゃんはべびこめに通ってなくて、弟はべびこめに通っています。同じ年齢で見て、私とお兄ちゃん2人での会話と比べると、下の子の方がすごく表情が豊かで、手話の習得も早いです。手話の語彙もいっぱいあります。

べびこめって大人も子どももみんな手話を使っている。家の中だと限界があるというか。それを考えると、外にも手話があるというのは、子どもにとってもすごくいいのだろうなというのを、今、味わっています。

🌸 3歳男児 母

2歳11か月の男の子で、6か月のころからこめっこに通わせてもらって、2年半になろうとしています。今年からは、4歳のお姉ちゃんと1歳の妹もこめっこに通って、健聴ですが徐々に手話を覚えてくれ、また家族の中で手話を使えるようにということで、じいじ、ばあば、パパも土曜日とかに来させてもらっています。

聴力は低い音が裸耳で50～60(dB)ぐらい、高い音が70～90(dB)ぐらいで、補聴器をつけたら低い音は30～40(dB)ぐらい入っていますが、高い音は50～70(dB)ぐらい入っているかどうかとされています。

初めは、手話を選択するかどうかわからなかったし、どういう風に育っていくか、0歳から通っていたのでわからなかったのですが、とにかくいろんな選択肢を与えてあげたいなと思って、通わせてもらいながら、2歳前から手話と言葉(日本語)がすごく出てきて、今は手話と言葉でやり取りしていますが、ほとんど子どもから出てくるのは言葉で会話していて、私は手話をつけながら日本語と手話でやり取りをしています。

いろいろ覚えていく中で、言葉を覚えるのに手話をつけた方が覚えやすいなと思って、最近でいうと、「もったいない」という言葉を覚えたのですが、ずっと、どういう風に「もったいない」という言葉を入れたらいいのかわからず、スタッフの方に聞いて、「水がジャーと出ている。これ、もったいないでっていったらわかるで」と教えてもらい、それをずっと子どもに使い続けたら、やっと「もったいない」と言ってくれたのが、最近覚えた言葉です。

スマートフォンを使うのに、いつまで使うかを決めるときに、「学校着いたら、おしまい、できる？約束やで」というのを必ず手話をつけて話しています。そうすると子どももわかってくれて、「わかった」とか「うん」とか言



ってくれて、ちゃんと学校ついた時に「はい」と渡してくれるので、約束など大事なことをするときには、手話を使って説明を必ずするようにしています。

最近、指文字も少しずつ覚えてきて、「か」の文字をよく覚えているのですが、お友だちの名前で「かずと」くんという子がいて、子どもは「あずと」くんと言っていたので、「かずと(指文字)くんやで」と伝えると、「かずとくん」ときれいにしゃべってくれたので、これからどんどん指文字を覚えていかないと、と思っています。

手話をつけるとわかりやすいなと思ったのは、アンパンマンの歌がすごく好きで、いつもスマホを耳にあてて聞いて歌っていますが、めちゃくちゃな歌詞で歌っていたので、「やさしい顔のジャムおじさん」と手話で言ったら、「やさしい顔のジャムおじさん」って、子どものなりの発音ですが言ってくれました。やはり手話をつけたら、内容を歌でもわかって歌えるようになるんだなと思い、最近それを使っています。歌にも手話をつけるとちゃんと歌詞の内容を理解した上で歌えるようになるんだとわかったんで、歌とか何でも手話をつけてあげると内容がわかるから、そういうことも大事だなと思いました。



3歳女児 母

娘は現在3歳で、聴力は40dBから60dBの中度難聴です。生後4か月の頃に、病院の先生からべびこめを紹介していただき、相談という形でべびこめに來させていただきました。

新生児スクリーニングでリファードだったので、その時は、本当に？という少し疑問の気持ちと、本当にそうだったらどうしようという気持ちで、不安でいっぱいだったのですが、検査結果が確定してからは、このままではいけないどうしようという気持ちと、1歩まだ踏み出せないもやもやした気持ちで、1か月ぐらい悩み、ようやくべびこめに來てから、もっと早く來ればよかったというふうに思いました。ここで教えてもらった手話を生活で使うようになって、なんでもお姉ちゃんと同じようにいろんな言葉をかけながら、同時に手話を見せていました。一番最初に自分で



やった手話が「上手」という手話だったのが、すごく嬉しかったです。

3歳になるまで、自分の気持ちを少しでも、なにでもいいから表現できる、出せるということを頭に置きながら育ててきました。今は十分過ぎるほど、たくさん自分の気持ちを伝えてくれるようになったり、感情もしっかり出してくれるようになったのが、すごく嬉しいです。



🌸 3歳男児 祖母

もうすぐ3歳になる孫と、こめっこに通わせてもらっています。スタッフの方が本当に優しく、こんな私でもすごくほめてくださって、それが励みになったし、何よりも孫とのコミュニケーションを取りたいという気持ちもあり、なんとか指文字を覚えて、それが自信になって、ゆっくりで若い人たちとは違うと思いますが、ゆっくりレベルを上げて、孫とのコミュニケーションを取れるように自分としては頑張りたいなと思っています。

私は、こめっこに出会えて本当によかったなといつも思っています。ここは、みんなのよりどころになっているし、ママも来ることによって、不安な気持ちも安心に変えてくれたり、ほっとする場で、同じような赤ちゃんや子ども、ママたちみんなの交流の場でもあるし、ママたちもほっとする場で、私もそれを見ていて安心できる場というか、自分としても心が和む場になっていて、いつも来させてもらって感謝しています。

🌸 5歳女児 母

現在5歳になる娘と、こめっこに参加しています。聴力は50dB程度で、日常の会話は音声でしています。1歳ごろに、こめっこで手話に出会いました。初めは手話を認識していなかったのですが、ろう学校に入学し、デイサービスで小学生の子の手話を見て、手話はかっこいいと思ったようで、家で小学生の手話をまねて、高速指文字をしたりしていました。

こめっこでは、ろうのスタッフとの関りがとても楽しいようで、家に帰ったら、「もっと、ろうのスタッフさんと話がしたいから、手話の勉強をしたい」といっていました。手話を通じていろんな人とコミュニケーションをして、人と関わるのが嫌にならないように、楽しめるようになってほしいです。

🌸 4歳男児 母

私の息子は、大阪のろう学校に年少まで通っていたんですが、年中から家庭の事情で他県に引っ越しして、ろう学校に通っています。べびこめは、きこえるお兄ちゃんと一緒に、週に2回ほど通っていました。土曜日のこめっこは、今は月1回通っています。

べびこめに参加し始めたころの息子の様子は、とにかく人工内耳を外して走り回って、私が何回も着けるという繰り返りで、お友だちとケンカしたり、泣かしたりして、ここに通い続けていいのかな、と思うようになりました。イライラしたり悩んだり、本当にこの子が落ち着くのかと自信のない日々でした。何度もこめっこのスタッフの方に「大丈夫。そのうち慣れて落ち着いてくる」と言い続けてもらって、ようやく最近その言葉を思い出して、言われた通り少しは落ち着いてきているなど感じるようになりました。もっとその言葉を初めの方から信じていたら、気持ちも楽だったのかなと思います。

べびこめに通うようになって、私も子どもも手話の勉強をさせてもらって、子どもと通じ合えることが増えました。ろうのスタッフの方を息子が大好きになって慣れてきて、お友だちともめた時とか、話し合う時とかに間に入ってくださって解決できたり、ちゃんと相手に伝わっているのが目で見てわかりました。自分が伝えて、相手にも伝わっているとわかると、話し合った後の顔がやはりすっきりしているなど感じました。遊んでいる様子をスタッフの方に教えてもらうのですが、手話でも理解していると聞いて嬉しかったです。(日本語での)会話ができるようになって、手話は忘れないで今後も使って行って欲しいです。あきらめずにべびこめに通い続けることができてよかったです。継続していたら変わるんだと改めて思いました。

4月に引っ越ししたんですが、土曜日のこめっこに月1回通っているのは、息子が前の学校のお友だちと一緒に遊べるというのもあるし、お兄ちゃんも手話が学べる場所があっていいなど思いました。私も子どもが小さいときからお世話になっているので、「成長したね」と言われるのが嬉しくて来ています。これからは、ここに通



っておられるお手本のような小学生の子みたいになって行って欲しいと思っています。



🌸 5歳男児 母

私の息子は5歳で、聴力は115dBくらいです。私の家族はデフファミリーです。こめっこは手話で会話ができる場所なので、子どもが安心して遊んで、参加できていると思います。また、スタッフたちも手話でコミュニケーションを取るので、確実に、わからないところなくコミュニケーションが取れているところがすごいなと思っています。

こめっこに参加して思うことは、私たち家族はデフファミリーなので普段から手話でコミュニケーションが取れる場はありますが、こめっこは親子のやりとりだけでなく、友だちやスタッフ、いろんな人とのコミュニケーションが取れる場なので、そこがいいなと思っています。

🌸 9歳男児 母

私の息子はこめっこがオープンした2017年から通っています。当時3歳だった息子は、今小学3年生になり、聴覚支援学校の小学部に通っています。小さいころから親子で手話でのコミュニケーションを重ねてきて、4歳の時に人工内耳の手術を受けました。現在は、学校でも家でも手話でのやりとりをベースにしなが、音声日本語や日本語の読み書きも上手になってきました。聴覚支援学校や放課後デイサービスでも手話の環境はありますが、息子は放課後こめっこに通うのをとても楽しみにしているようです。毎回、ろうスタッフと思いっきり遊んで、汗だくになってすっきりした笑顔で帰ってくる息子を見ると嬉しく思います。

また、息子が遊んでいる時間に、私も手話学習をしています。手話学習といっても、手話学習を担当してくれているろうスタッフと手話でおしゃべりを楽しんでいるのですが、これがいい実践練習になっています。今では、通訳なしで自然にやりとりができるようになっていて、スタッフからは手話が上達したと褒められている今日この頃です。

🌸 11歳女児 母

現在、ろう学校からインテグレーションし、地域の小学校に通う小5の母親で

す。こめっこへは、年中の時から通っております。

地域の学校へも楽しく通っていますが、今年の夏休みにこめっこの手話合宿に参加してからは、ますます生き生きした感じになりました。本人にも手話合宿の様子を尋ねてみたら、地域の小学校でも自然学舎とって合宿に行ったのですが、そこはそこでとても楽しかったけれども、やはりこめっ



この合宿では手話を使ってくれるし、わからないことがなくて、ストレスなく楽しめたと、とても喜んでいて、また来年もこのような合宿をしてもらったら行きたいな、とすごく言っています。私も手話ができる方ではないので、こういう機会があると、本人も手話を覚えてくれるし、使ってくれるようになるので嬉しいなどと思っています。

今は小学校5年ですけれども、成長過程で一時期もしかしたらこめっこから離れてしまう時期もあるかもしれないですが、細く長くずっと何か違う形でもいいので、関わってくれたらいいなと願っています。

🌸 11歳男児 母

私には3人の子どもが居て、一番下の息子が小学校5年生です。こめっこには、年中頃から通い始めて、今までずっと参加しています。

こめっこは、聴力にかかわらずろうの子どもたちが集まっていて、ろうスタッフたちと手話でかかわり、話ができる、大切な場所だと思っています。それだけでなく、保護者の心のケアも必要なので、大事な場だと感じます。やっぱり消えることなく続けてほしい、必要な大切な場所だと思えます。

息子は小5になって初めて、今年の夏に手話合宿に参加しました。参加する前に合宿があることを聞いて息子に伝えると、息子は「合宿があるの！嬉しい！どんなことするのか？手話で何するのか？」といろいろな想像して楽しみにしていました。そして、実際に参加した時には、すごく楽しかったと話していました。

でも、私は合宿があると聞いていいなと思った反面、少し不安がありました。息子には同級生のお友達が3人いて、みんな年中の頃から同じようにこ



めっこに通っています。みんな聴力はまちまちですが、家族はみんな聴者であるという環境です。その中で、普段は手話を使うことは少なく、音声で話すことが多いので、手話が必要なうちの息子はちゃんとコミュニケーションが取れるか、仲間外れにならないか、少し心配していました。でも、やっぱり手話合宿なんだから大丈夫！と、信じて、期待しながら参加しました。

その結果、どうだったか尋ねたところ、最初のうちはやはり3対1になる場面もあったようですが、合宿の終盤になると子ども同士、自分がわかる、またお互いに伝えたいと思う時にどんな方法がいいかとなると、音声日本語よりも手話だったようです。

やはり、みんなが聴力に関係なく、手話があればわかる、それがすごく大切なことだと感じました。

ハリーです。さいごまでご覧いただき、ありがとうございました。いかがでしたか。

2月10日にはパネルディスカッションがあります。是非ご参加ください。お待ちしております。



第Ⅱ部

パネルディスカッション

話題提供

指定討論

ディスカッション

司会(久保沢)／ただいまより、大阪府手話言語条例シンポジウム「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト ～中間報告～」第Ⅱ部を開催いたします。

第Ⅰ部の事前配信では、こめっこ研究の進捗報告、こめっこ参加ご家族の声 Part2 をご覧いただき、ありがとうございました。

本日、第Ⅱ部「パネルディスカッション」の司会を務めさせていただきます、NPO こめっこ常務理事の久保沢 寛(くぼさわ ゆたか)と申します。本研究プロジェクトの研究統括者、NPO こめっこのスーパーバイザーである神戸大学の河崎佳子(かわさき よしこ)先生と共に、今回のシンポジウムをコーディネートしてきました。河崎先生は、大阪府手話言語条例評価部会長でもあります。

なお、本シンポジウムは、大阪府と連携協力しながら、日本財団からの研究助成事業の一環として開催しています。また、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力を得ています。

今回のシンポジウムは、こめっこ関係者を中心に現地参加の方もおられます。会場の様子は YouTube で Live 配信で行っておりますので、こちらもぜひご覧ください。オンライン参加の皆さまには Live 配信用 URL をお送りしております。

記録、報告書作成のため、本シンポジウムは NPO こめっことして録画をしておりますが、著作権保護のため、参加者による録画、録音、保存等にご遠慮ください。よろしく願いいたします。

まずは、本シンポジウムの主催である NPO こめっこ代表理事 物井(ものい)より一言挨拶を申し上げます。

物井／ただいまご紹介にあずかりました、代表理事の物井 明子と申します。

本日は 2023 年度大阪府手話言語条例シンポジウムのご参加をいただき誠にありがとうございます。

このシンポジウムは 2018 年度から始まり、今年度で 6 回目となりました。おかげさまで北は北海道から南は沖縄まで多くの方々にお申し込みをいただきました。全国のたくさんの方々がこの活動に関心を寄せてくださることは、私たちにとって大変大きな励みとなります。改めてお礼申し上げます。

NPO こめっこが 2020 年設立すると同時に、この研究プロジェクトが立ち上がりました。昨年は事前配信にて研究の進捗状況をお伝えしましたが、本日は各研究分野から話題提供としてご報告し、指定討論の先生と共に議論を深めたいと思います。みなさまにとってさまざまな気づきや学びを得られる機会になることを願います。本日はどうぞよろしく願いいたします。

以上であいさつとします。

司会／ありがとうございました。

今回のシンポジウムでは、参加者のみなさまからのご質問を受け付けます。オンライン参加のみなさまは、Zoom ウェビナーの Q&A 機能を使ってご質問ください。ただし時間の関係で、全てに回答することはできない可能性があることをご承知おきください。また、手話による質問の時間を確保できないこと、大変申し訳ありませんが、ご理解いただきますようお願いいたします。

ご質問の受付は、指定討論の先生方のお話が終わった後の休憩 15 時 10 分～15 分を予定しています。現地に参加しておられる皆さまは、ディスカッション時に、質疑応答の時間を設けます。その際にご質問がある方は挙手をお願いいたします。質問する際は、手話か、音声かを最初に伝えていただくようお願いいたします。

話題提供に移るまえに、今回の報告について説明いたします。

聴覚に障がいのある子どもたちの真の言語力（理解し思考する力）を適正に評価することを目的として、この研究が企画されています。

今回は、研究の第 1 期 2020 年度-2025 年度の 6 年間（日本財団助成期間）の中間報告として、現在の進捗状況をお伝えするものです。

脳科学、心理発達、言語獲得、学習能力（理解と思考）、それぞれの分野から報告します。各分野の内容はホームページに全体像があります。ぜひ今回の研究の全体像をご覧ください。

各分野の代表は、スライドのとおりです。

本日の報告は、河崎先生から心理発達分野、武居先生から言語獲得分野について、学習能力(理解)は私から、脳言語科学分野・学習能力(思考分野)は、酒井先生からご報告します。6 番めは、事例報告として、NPO こめっこの中尾からご報告します。

それでは、まず、心理発達分野から、神戸大学の河崎先生、よろしく願いいたします。

今回の報告について

NPOこめっこが実施する、手話言語獲得習得支援事業「こめっこ」「もあこめ」を舞台に、脳科学、心理発達、言語獲得、学習能力の4分野から「手話言語を獲得・習得する子どもたちの力」にアプローチする研究プロジェクトが、2020年に企画されました。

その目的は、聴覚に障がいのある子どもたちの真の言語力（理解し思考する力）を適正に評価することです。

今回は、研究の第1期 2020年度-2025年度の6年間（日本財団助成期間）の中間報告として、現在の進捗状況をお伝えするものです。

研究分野

2022年10月現在



【話題提供①】

「心理発達分野」からの報告

神戸大学大学院 河崎 佳子

本研究プロジェクトの統括責任者を務めております、神戸大学の河崎佳子です。私からは、心理発達分野について報告いたします。

本分野の目的は、ネイティブサイナーに触れて、手話言語を自然習得する子どもたちが、手話を学びながら養育する保護者のもとで成長するプロセスを、複数の発達ラインで縦断的に捉えることによって、手話を獲得して成長する子どもの発達を明らかにすることです。したがって、本分野の研究は、0歳から3歳を対象とする「べびこめ」ならびに未就学児を対象とする「こめっこ」の活動と表裏一体をなす、実践的研究です。

研究方法は、スライドにありますように、観察と聞き取り、発達検査によって、まずは一人ひとりの発達のあり様を丁寧にたどり、そこに共通して見られる道筋を見出すことです。それによって手話言語を獲得して育つ子どもの心理発達モデルあるいは類型を、できれば18歳までのスパンで明らかにしたいと考えています。ですから、べびこめに参加した子どもたちが小学校高学年に至る時点からは、性格検査や対人関係に関する調査も予定しています。

ここでは、発達検査について報告します。保護者を対象として実施する質問紙検査「津守・稲毛式乳幼児精神発達診断」は、日本手話を母語として育つこえない子どもについて評価できるように、内容を検討した上で実施しています。

スライド2

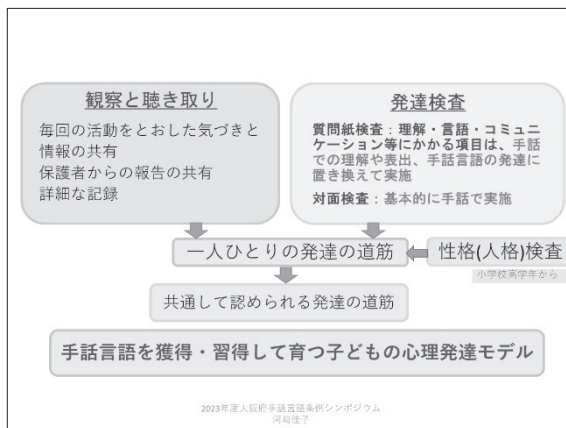
「心理発達分野」研究の目的

ネイティブサイナーに触れて手話言語を自然習得する子どもたちが、手話を習得しながらかわる親のもとで成長するプロセスを、情緒、認知、コミュニケーションなど複数の発達ラインから捉える縦断的研究を行うことで、手話を獲得・習得して成長する子どもの発達を明らかにする。

★心理発達分野の研究は、「べびこめ（0-3歳）」
「こめっこ（0-6歳）」の活動と表裏一体

2023年度人形手話言語事例シンポジウム
河崎佳子

スライド3



また、子どもを対象に対面で実施する新版K式発達検査は、日本手話での実施法を検討した上で、本人にとって最も通じやすい言語およびツールを用いて柔軟に対応できるよう、基本的にはきこえる検査者とするろうの検査者がペアで実施しています。実施方法や結果の扱いについては、現在も検討を重ね、模索中で、発達プロフィールの推移を重視し、数値はあくまで推定、参考指数として扱っています。

津守式検査実施ののべ件数と、対象児の実数を表に示しました。3歳までは半年に一度、3歳以降は年に一度の実施です。今年度は9月末までの数字になっていますが、後期になって0歳児の参加がぐっと増加しています。

次に、新版K式発達検査です。こちらは、今年2月1日までの実施人数を表にしています。

話題提供6番目の事例報告で、心理発達研究チームのメンバーである中尾先生より7名の子どもたちの発達について報告がありますが、今回この7名を選んだ理由、基準について、ここで説明しておきたいと思います。7名は、0歳～1歳台に「べびこめ」参加が始まり（ただし1名のみ例外ですが、これについては後ほど説明があります）、その後途切れることなく週1

～2回ペースで「べびこめ」に参加、また月2回の「こめっこ」にも参加していました。現在は4歳～6歳となり、ろう学校幼稚園部に在籍して、今も「こめっこ」参加が継続している子どもたちです。加えて、べびこめ活動の目玉でもある「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代です。

「手話ばんばん」については、以前のシンポジウムや事前配信で紹介したとおりですが、こめっこのネイティブサイナー・スタッフが日本手話で作り出す、手

発達検査

- 質問紙検査（保護者対象）
津守・稲毛式乳幼児精神発達診断
日本手話を母語として育つ、きこえない子どもについて評価できるよう、内容を検討して実施
- 対面検査（子ども対象）
新版K式発達検査
日本手話で実施できるよう検討した上で、被検児が得意とする言語&ツールを用いて実施
聴・ろうの検査者がペアで実施
実施方法は現在も模索中

（数値は「推定」とし、参考指数としてのみ算出）
2023年度入居新卒手話言語集約シンポジウム
河崎佳子

津守・稲毛式乳幼児精神発達診断

●検査実施件数（のべ件数）		*2023年度のみ 9月30日現在						（件）
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
2020年度	3	13	25	11	1	5	2	60
2021年度	0	6	16	16	7	2	4	51
2022年度	3	6	7	12	9	5	2	44
2023年度	0	6	1	4	5	4	2	22
計	6	31	49	43	22	16	10	177

●検査実施対象児の人数（実数）		*2023年度のみ 9月30日現在						（人）
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
2020年度	3	9	13	7	1	5	2	40
2021年度	0	6	11	11	7	2	4	41
2022年度	3	6	7	8	9	5	2	40
2023年度	0	6	1	4	5	4	2	22
計	6	27	32	30	22	16	10	143

新版K式発達検査

●K式発達検査実施人数		*2023年度のみ 2024年2月1日現在					（人）
	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	計	
2020年度	2	0	2	0	0	4	
2021年度	4	5	1	2	1	13	
2022年度	8	6	5	1	3	23	
2023年度	0	7	1	3	0	11	
計	14	12	8	3	4	51	

2023年度入居新卒手話言語集約シンポジウム
河崎佳子

話言語のプロソディがふんだんに詰まったオリジナル作品で、季節、生活、遊びなどをモチーフに、現在までに80以上の作品が生まれました。また、手話の意味とリズムにぴったりあった日本語訳を工夫し、きこえる親やきょうだいも感情豊かに表現できる支援としています。

話を戻し、あとの事例報告で紹介する7名の子どもたちの津守式発達検査の結果を示してみました。

こちら(スライド9)が2歳の誕生日前後の結果で、1名は少し時期がずれています。また、もう1名はこの時期のデータがありません。

そして、こちら(スライド10)が4歳の誕生日前後の結果です。

2歳時と4歳時のグラフを並べてみると、全体として成長している様子が見えがえます。

⑥で報告する事例(7例)について
～選抜の基準～

- ① 0歳～1歳台から「べびこめ」に参加 (1名のみ例外)
- ② 途切れることなく、週1～2回ペースで「べびこめ」に参加し、月2回の「こめっこ」にも参加していた。
- ③ 現在、4歳～6歳(ろう学校幼稚部在籍)「こめっこ」「放課後こめっこ」の参加が継続している。
- ④ 「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

2023年度大阪府手話言語条例シンポジウム
河崎佳子

⑥で報告する事例(7例)について
「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

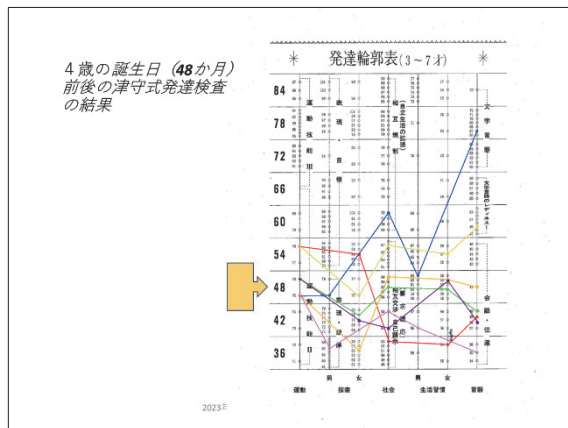
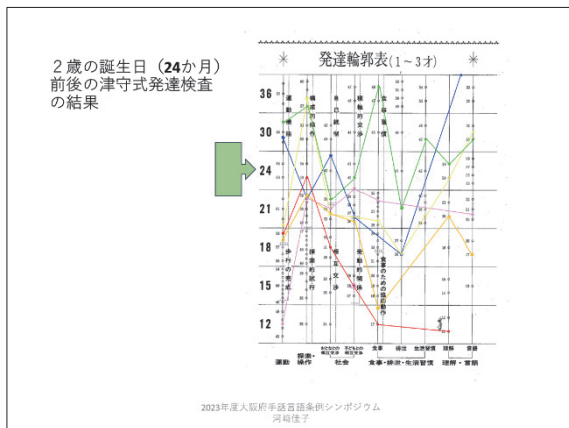
「手話ばんばん」は、ネイティブサイナーが日本手話から作り出すオリジナル作品で、その表現には、固有のリズム、間合いや流れ、動きの抑揚や強勢など、手話のプロソディが詰まっています。

さらに、きこえる保護者らが自身の母語にのせて感情豊かに表現できるよう、手話の意味とリズムを活かした日本語訳を工夫しています。

定番の「こめっこばんばん」、季節ばんばん、生活ばんばん、あそびのばんばんなど、80以上の作品が生まれています。

*「こめっこ」「手話ばんばん」は登録商標です。

2023年度大阪府手話言語条例シンポジウム
河崎佳子



あとの事例報告では、一人一人の成長のプロセスについて、きこえや聴覚活用を含む背景や、K式発達検査、言語力分野や理解力の検査結果も併せてお伝えします。

私からの報告は以上です。ありがとうございました。

【話題提供②】

「言語獲得分野」からの報告

金沢大学 武居 渡

私からは、言語獲得分野として、言語獲得のお話をします。

言語獲得状況を評価するということところです。私が担当しているところでは、大きくコミュニケーション、手話力、日本語力の3点について、評価をしたいと思っています。

コミュニケーションについては質問応答関係検査、手話力については日本手話文法理解テスト、日本語力についてはJ.COSSの結果を中心に、今日は報告します。

これから数字が書かれたグラフが出ます。最初のコミュニケーションを評価する質問応答関係検査は303点満点、日本語手話文法テストは47点が最高点、J.Coss、日本語の文法理解の検査は20項目あります。それを頭において、見てください。

まずコミュニケーションですが、コミュニケーションに関わらず、まだ「こめっこ」では縦断的にデータが蓄積されていません。あくまで中間報告ですが、このような結果です。線がつながっているのは、同じ子が次の年になっ

ています。ここからわかることは、コミュニケーションだけに限らず、長いスロープを徐々に上がるのではなく、階段を上がるように、急に成長する、化ける時期があることです。なので急速にスコアが上がる時期があります。スコアが上がる時期は、子どもによって違いま

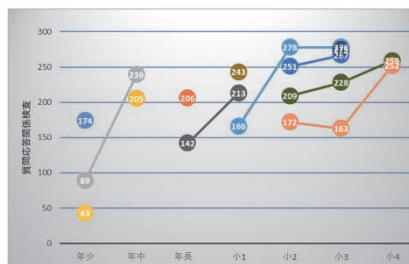
スライド2

言語獲得状況を評価する

- ① コミュニケーション 他者と言語でやり取りがどの程度できるのか
 - 質問応答関係検査 (303点満点)
- ② 手話力 言語としての手話力をどの程度身につけているのか
 - 日本手話文法理解テスト (47点満点) ……文法
 - 日本手話語彙流暢性検査 ……語彙
- ③ 日本語力 日本語をどの程度身につけているのか
 - J.Coss (20項目) ……文法
 - 絵画語彙検査 (修正得点) ……語彙

スライド3

① コミュニケーション



- こめっこに長く参加していくと化ける時期が来る(化ける時期は個人差あり)。
- 早い時期にこめっこに参加することで最終的な到達点が高くなる。

すが、「こめっこ」だけでなく療育機関に長く通って、いろんなことを学ぶと、今まで伸び悩んでいても、急に伸びることがここからわかります。

太い線を加えました。太線はきこえる子たちの標準データです。きこえる子と比べるとスコアは低いですが、徐々に生活年齢が上がるとともに、きこえる子と同じくらいの力をつけていることが、見えると思います。

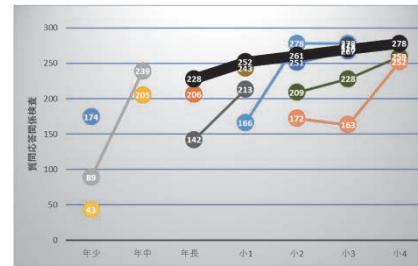
手話力については、ここでは文法理解力を知るため、日本手話文法理解テストのスコアを示しています(スライド5)。これは比較的、経年データが蓄積されているため、同じ子は線がつながっています。

目安は40点を超えると、基本的な手話の文法理解ができていると判断してください。テストそのものは、そんなに難しくなく、小学校4～5年生でほぼ天井になるテストです。学年、年齢が上がるにつれて手話力がついてきているのわかります。

この黒い線(スライド6)は、私が今から15年ほど前に、ろう学校の幼稚部、小学部の子ども100人くらいを対象にとったデータです。そのデータの中には、あわせ持つ障がいがあったり、きこえる幼稚園、保育園から転園したばかりの子もいるため、私が思っているより低く出ていますが、それに比べても「こめっこ」に通っている子どもたちの手話力が高いことがわかります。ほとんどの子が、黒い線より数値が上回っています。というところからも、「こめっこ」に来て、手話力を身につけていると、手話でのやりとりが豊富にできているということがここからわかると思います。

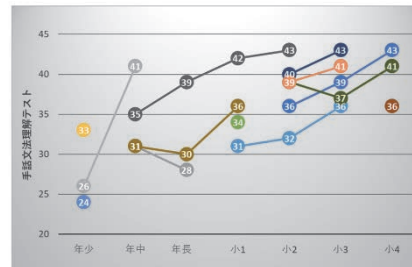
このように一定の手話力があれば、このあとで、日本語の話をしますが、日本語の習得につながられるさまざま

①コミュニケーション
聴児との比較



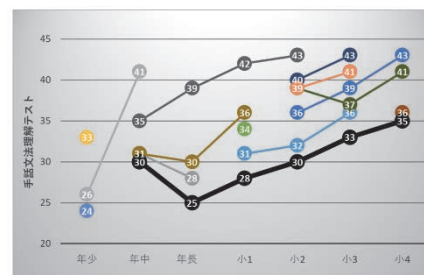
- 聴児と比較すると遅れるが、学年が上がると伸びていく
- 周りの大人の問題? 通じ合える経験の量に比例する?

②手話力



- 40点以上で文脈によらず基本的な手話で会話ができるとみなせる。
- こめっこに長くかかわることで手話力が伸びていく。
- 相対的にこめっこに参加している子どもは手話力が高い。

②手話力



- 以前私がとったデータ (15年ほど前) と比べて、すべての子どもで当時の平均値より高い。
- 一定以上の手話力があれば、手話の力を使って日本語の力につなげられる方が使用できる。

まな方法が使えることになります。手話力が一定程度あれば、その手話の力を使うことが可能なので、その部分が顕著に見られることがわかります。特に小さな時期から通っている子たち、灰色の線の子は、年中のときから、40点を超えています。これは高いデータです。ちゃんと手話環境を保障することでこれだけのスコアを取れるし、「こめっこ」の意義も感じられるデータになっています。

日本語力です。

スライド7

日本語力に関しては、経年データがないため、散布図の様にスコアが書いてある状態です。これからどのように変化していくのかを追っていく必要があると思っています。

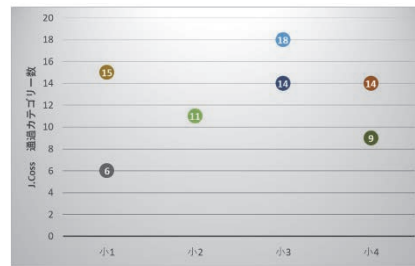
日本語なので、小学1年生以上の子だけを対象にしています。

J.COSSは80問の問題を20の文法カテゴリーに分け、1カテゴリー各4問で構成された、ろう学校などでよく使われているテストです。

このグラフ(スライド8)は、きこえる子たちのデータです。きこえる子たちは年少からの標準データがあるため、それも入れています。きこえる子たちの日本語力に比べると、きこえない子たちの日本語力は低い状況ですが、それは当たり前のことです。きこえる子たちは第一言語として日本語を学んでいるのに対して、きこえない子たちは第二言語として学んでいます。なので、この後キャッチアップしていくということを期待しています。学年が上がるに連れて比較的高いデータになっていると思います。

いま、0～2歳、幼稚部前半の子たちが、今後どのように手話力を身に着け、日本語力をどのように身につけるのか、これから何年かかけて縦断的にデータを蓄積することで、日本語習得

③日本語力

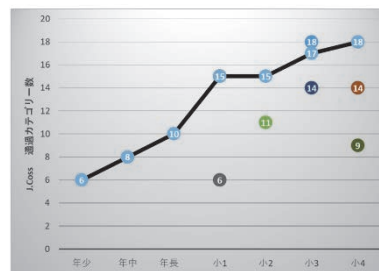


- 個人差大(データが少なく経時変化が見られない)
- 日本語を第二言語として学ぶ子どもにとっては個人差が大きいのはある意味当たり前。第一言語の獲得状況による。

スライド8

③日本語力

聴児との比較

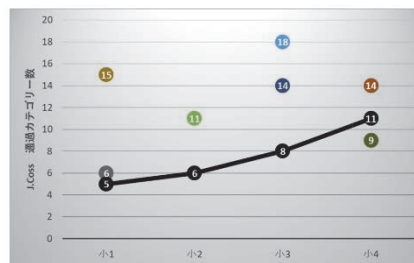


- 聞こえる子どもと比べると遅れる傾向。経時変化でどのように伸びていくかが重要。

スライド9

③日本語力

ろう児との比較



- 15年ほど前に私がとったデータと比べると、日本語もある程度身につけているといえるが、経時変化を見ていく必要がある。

における手話の役割についても、一定程度エビデンスが出せると思っています。

次のグラフ(スライド9)は、15年ほど前に、ろう学校の子どもたちの日本語力をJ.Cossでとったものと重ねています。時代も違いますし、15年ほど前なので今のように、人工内耳も普及しておらず、今と平行に比較することは難しいかもしれませんが、でも、15年前の日本語力と比べると、「こめっこ」の子どもたちの日本語力はかなり高いです。

要因は幼児期に「こめっこ」で手話に接してきたことや、その後、ろう学校、難聴学級などで日本語の学習をしてきたことで、それらを合わせて、この成績だと考えます。

まとめです。

小さなころから手話に接していた子どもたちは、コミュニケーションでは高い力を示す傾向があります。早くに、わかるコミュニケーションを保障することが、とても大切です。特に手話は、当たり前ですが、早い時期に接すると、手話力が高くなります。

一方で日本語力は、きこえる子たちに比べると遅れる傾向がありますが、それは当たり前で、今後、どの時期に、どのくらいまでにキャッチアップするのかを、追っていく必要があります。

今後、継続的にデータを蓄積することで、個人差はあるため、個々に伸びればよいと思いますので、手話の力が日本語の習得、コミュニケーションの力、全般的な発達にどう影響するのかを、継続的・縦断的に追跡したいと思います。

ここで終わります。ありがとうございました。

「学習能力(理解)分野」からの報告

NPO こめっこ 久保沢 寛

スライド2

学習能力(理解)分野の報告を始めます。

学習能力(理解)分野は、手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの手話での理解力を明らかにするために研究を行っております。手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成しました。質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的变化を評価する、これを研究の目的としています。

研究チームはご覧のとおりです。

検査内容は先ほども話したとおり、2つあります。

手話版モノログ動画による理解の検査、手話劇版「心の理論」課題動画です。心の理論課題については、東京学芸大学で発達障害の子どもたちのコミュニケーションの問題と支援の方法について研究しておられる藤野博(ふじのひろし)先生が作成されたアニメーション版の心の理論課題を参考に作成しました。

本日は、時間の関係もあり、手話版モノログ動画による理解の検査についてお話しします。

モノログ動画は、ストーリーを手話で一人語りしている動画を見て、その後、手話による質問に回答し、理解度を見ていくものです。イメージをつけてもらうために、例を作成しました。今回はみなさんに内容が理解できるよう、日本語音声もついていきます。実際の検査時には音声は付いていません。

学習能力(理解)分野の研究

- ・手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成した。
- ・質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的变化を評価する。

スライド3

研究チーム

研究責任者

- ・武居 渡 (金沢大学 教授)
- ・河崎 佳子 (神戸大学 教授)

研究員

- ・久保沢 寛
- ・岩田 真有美
- ・和田 夏実

(モノログ動画：日本語訳)

男の子が夜遅くに家の中で遊んでいました。

「今日は何して遊ぼうかな？ そうだ、“なりきり遊び”をしよう。まずはカウボーイになろう。パッカ、パッカ、バーン、バーン！ いい気分だな。次は、怪獣になって町を壊そうドシーン、ドシーン、ガガッ、ガシャーン、ガガッ、ガシャーン！ あぁ、楽しい。(少しウトウト) あっ、次は何しようかな？ レーシングカーに乗ろう。ヘルメットをかぶって、スタートランプがピカッ、ピカッ、ゴー！ ビューン、ビューン、ゴール！ 僕が一番か。次は何になろうかな？ ベッドがあるな、ウサギになって跳ぶのがいいかも。ベッドにいて跳んでみると、ピョーン、ピョーン。楽しい、楽しい」

お父さんが「上で、何か揺れているぞ。こんな時間なのに、まだ寝ていないのか」階段を上って扉を開けると「まだ起きているの？ ほら、もう遅いよ。早く寝なさい」

「あぁ、パパに怒られた。しかたがない、寝るか」ベッドで布団をかぶると、ボタンキュー。

質問① ベッドの上でなりきったのは何？

質問② お父さんに怒られたのは何時だと思う？

質問③ もし、お父さんが来なかったら、男の子はどうしてた？

このモノログについての質問内容の基準については、このように決めています。武居先生からアドバイスをいただき、3つの質問を作成しました。

1つめ、モノログ内に答えがあるもの。

スライド5

2つめが、モノログ内に答えはないが、答えとなるヒントが入っているもの。

3つめが、モノログ内に、答えはなく、内容から答えを考えるもの。

評価方法については、現在検討しておりますが、スライドにあるとおり2点、1点、0点と点数化していく予定です。

検査内容

• 手話版モノログ動画による理解

• 手話劇版「心の理論」課題動画

→ 藤野博先生（東京学芸大学）が作成されたアニメーション版「心の理論」課題を参考に作成。

手話版モノログ動画について

● 質問内容の基準

1. モノログ内に、答えがある。
2. モノログ内に、答えはないが、答えとなるヒントが入っている。
3. モノログ内に、答えはなく、内容から答えを考える。

● 評価方法の基準

- 2点、1点、0点で測っていく方向で進める。
- 2点：質問内容に合った回答をする。
- 1点：理解しているが、回答がずれている。
- 0点：質問の意味が理解できない。

2点は、質問の内容に合った回答をする。1点は、理解しているが回答がずれている。0点が、質問の意味が理解できていない。このように点数化する予定です。

今後の計画としては、モノログ動画も、手話劇版心の理論課題も、パイロットテストまで終え、子どもを対象に検査ができる段階まで来ました。1月からこめっこ・もあこめ参加の5歳児～小学5年生を対象に検査を実施しています。

最終の報告ではどのように発表していくか、検査結果を見て、武居先生、河崎先生と検討し決めていく予定です。

以上で理解分野の報告を終わります。

今後の計画

こめっこ・もあこめ参加の
年中～小学5年生を対象に検査を
実施していく。

「学習能力(思考)分野」 「言語脳科学分野」からの報告

東京大学大学院 酒井 邦嘉

私の発表では、2つの分野をまとめて話します。

当初、手話に関する誤解をいかになくしていくのかが目的として重要でしたので、スライドに書いたように、まず整理します。例えば脳機能ですと、手話は言語をつかさどる脳機能が働かない、言語力が育たないという誤解に対して、次の仮説を考えています。

手話でも言語を司る脳領域は日本語同様に働き、言語力が適正に発達します。学習分野については、手話では十分に概念を理解し、思考することができず、学習能力が育たないという懸念や、手話の使用は教育に不向きであるという誤解。先ほどの発表のようにそんな誤解はほとんど生じないとよいのですが、その意見に対してきちんと仮説と実証が必要ということで、学習分野については、発達分野に対応して、手話で理解し、思考することができ、手話を獲得すると学習能力が育つことを証拠として積み上げていく必要があります。

これに関連して、最新の研究室の成果を話します。2月3日、オンラインで、2月5日に朝日新聞の夕刊に紹介されました。

言語は何歳でも習得可能です。第3、第4言語を習得するときの脳部位は母語と全く同じということを示した最新の研究です。

実際には、日本語を母語とする参加者に対して、英語を学校で学んだ経験がある、半分はスペイン語の習得経験がある人たちが、カザフ語というカザフスタンの言葉を新たに習得すると

スライド2

分野	手話に関する誤解	不足する仮説と実証
脳機能	・手話では言語を司る脳機能が働かず、言語力は育たない	・手話でも言語を司る脳機能は日本語と同様に働き、言語力は適正に発達する
学習	・手話では十分に概念を理解し、思考することができず、学習能力は育たない ・手話の使用は教育には不向き	・発達年齢に対応して、手話で理解し、思考することができ、手話を獲得すれば学習能力は十分に育つ

スライド3



きの、最初に音声に触れてから習得するまでの研究です

新聞記事はスライドのとおりです。

「言語学の世界では、言語を自然に習得できるのは、一定の年齢(臨界期)までという仮説がある。臨界期は12~13歳ごろという説や、もっと早いという説がある。だが、今回の結果は、臨界期を過ぎているはずの大人であっても、母語と同じメカニズムで新たな言語を取得できる可能性を示している。

『臨界期仮説は正しくないことが示された。ヒトの脳には、聞いた言葉から規則性を見いだす機能が備わっており、新たな言語を学ぶ際は、文字や文法から入るのではなく、音〔や手話〕に繰り返し触れることが大切だ』と指摘する

このように実際に実験では、カザフ語の音声だけを使い、文法は教えていません。いくつか文を提示し、この文が正しいのか、文法的に間違っている可能性があるかということをしてがかりに、繰り返し聞く中で、正しいか間違っているか、複雑な文構造まで習得することを研究で示しました。

ですから、臨界期仮説によって、「手話をあとから覚えるのは大変、無理だ」という意見は正しくないわけです。このように音声と同じく手話も、どの年代でも、大人になっても習得することが可能だと皆さんにお話したいです。

この研究の具体的なデータを1つ示しています。

上の段は、脳を左右に開いた形です。

左上の図では、外側が脳の前になっています。赤いところが脳活動が変化した部分で、言語野が左脳の前後に2つあります。ブローカ野とウェルニッケ野と呼ばれる場所で、その領域が活動していることがわかります。

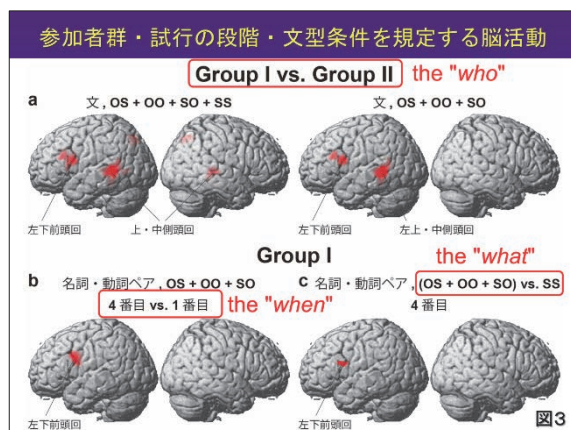
上段は、全体の半数ですが、習得できた人にのみ脳の反応が見られます。

左下のBの図は、中間段階まで習得段階を見ましたが、実験の中でいつ脳活動が生じたかを示しています。

右下のCの図は、習得できた文型に対して、他の図と同じ脳の一部のみが活動しています。これが「文法中枢」です。

このパターンは後ほど示す、手話に

言語の「臨界期仮説」は正しくない
 「言語学の世界では、言語を自然に習得できるのは、一定の年齢(臨界期)までという仮説がある。臨界期は12~13歳ごろという説や、もっと早いという説がある。だが、今回の結果は、臨界期を過ぎているはずの大人であっても、母語と同じメカニズムで新たな言語を取得できる可能性を示している。
 酒井教授は『臨界期仮説は正しくないことが示された。ヒトの脳には、聞いた言葉から規則性を見いだす機能が備わっており、新たな言語を学ぶ際は、文字や文法から入るのではなく、音〔や手話〕に繰り返し触れることが大切だ』と指摘する」
 朝日新聞(2024年2月3日)



に対する反応の伏線になっているので、イメージを覚えてください。

まとめますと、人間の脳は左脳を使っていて、言語野が左にあります。先ほどの図では、文法中枢の領域の活動が強く出ていました。後は、脳の後方言語野である「音韻」の中枢が活動しています。

これは音声だけでなく、手話に対しても、手話の韻律という形で、反応していることがわかっています。

実際にはMRI装置の中に横たわっていただき、参加者はゴーグルを通して、液晶パネルで手話画像を見ます。

今回の中間報告までにやっているサンプル動画を見ていただきます。特に訳はつけていませんが、手話を理解する人にはわかっていただけだと思いますが、その後に三択で問題が出るので、考えてみてください。

(動画)

質問動画です。

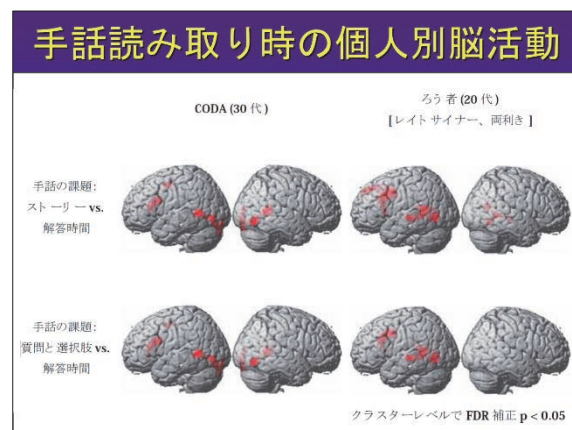
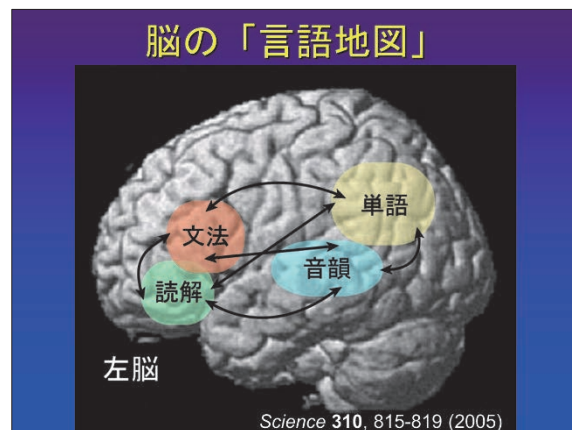
(動画)

このように問題が提示され、3つの質問の中からどれが正しいかを思い出しながら回答します。もちろん内容がわかっている必要がありますし、選択肢を見て悩むことがあるかもしれません。そのようなストーリーを理解していると回答時間と比較して、次のような脳活動が解析結果としてわかりました。先ほどと同じ形で見ていただきます。

まず、左側のデータはコーダの人で30代です。

上の段は手話の人。ストーリーで見ている場合。下は回答時間に対して、質問を聞いて選択する場合です。

どちらも同様に、文法中枢の領域、音韻中枢、視覚野も含めて脳活動がみ



えます。

ストーリーのときも理解しながら、回答のときは選択しながらという言語野の反応を見ることができます。

右は、ろう者で20代、レイトサイナーで両利きですが、確かに左脳に言語野が局在していて、右脳の反応はありません。先ほどのような視覚野の反応はかなり抑えられています。文法中枢、音韻中枢が強く活動しているのがわかります。

このように今我々がやっている研究では、手話読み取り時の個人別の脳活動を見ることができます。これまでの脳の研究では、10数人以上のデータを集団で平均して脳活動を見ていましたが、このように精度よく個人で見ることができます。

人工内耳装着者はMRIに入れませんが、それ以外の人なら、手話の発達に応じて、脳活動を見ることができますので、今後、大人に限らず子どもでも、おそらく小学校高学年以上ならば、このように個人の脳活動を見て、評価することが可能になると考えられます。

思考の部分を最後に述べます。

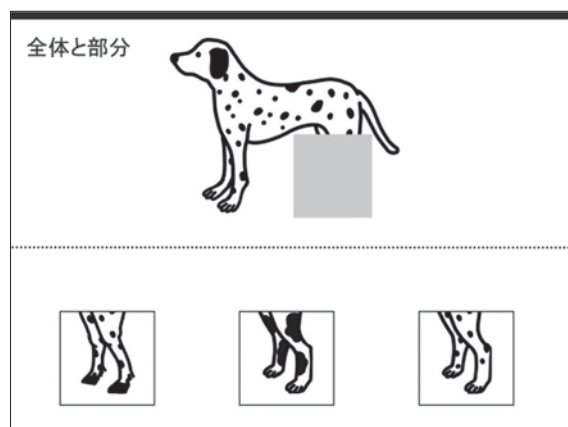
この絵は、サンプルの絵の問題です。三択で下の選択肢から1つ合うものを選ぶものです。

これは、「全体と部分」の問題です。最初にこういう問題が出ますよと説明して、あとは絵だけで考えてもらうのです。つまりお子さんが持っている使いやすい言語での思考を問うものです。

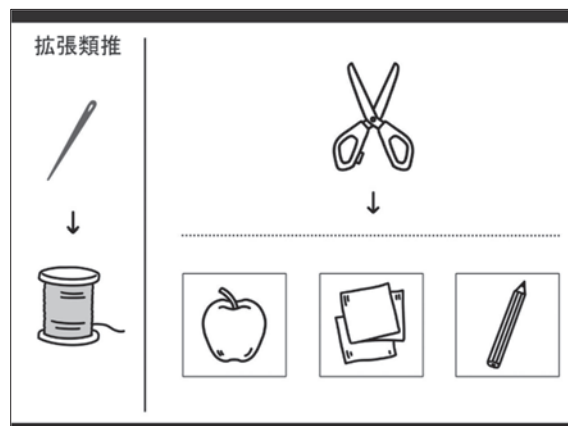
選択肢は、このようにイラストで細かく書かれています。ダルメシアンなので、模様で端の2つになりますが、左右の2つから、足の先端の形まできちんと見て、右の正答が選べるかどうかという2段階で評価できるように選択肢を作っています。

これは拡張類推の問題で、左に例があり、針に対しての糸があります。そして、右のハサミに対してどれが対応するのかを三択から選びます。真ん中

スライド9



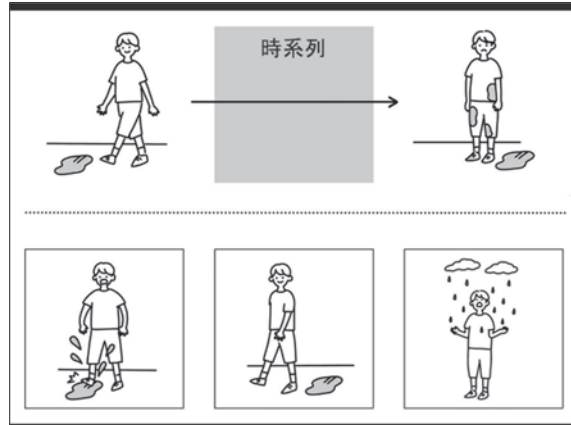
スライド10



の紙を選べばいいのですが、文房具なら鉛筆も関連性がありますし、リングを並べた理由は、鉛筆もりんごも刃物で切ることがあるため、関連性があるということで、日常的な道具を使う思考力を見ます。

次の例は、時系列を問いました。

左から右へ、原因と結果のように、時間が流れていく中で、真ん中の部分を答えるものです。服が濡れてしまっているのが、雨が降ったのかもしれませんが。結果に対しては、右の選択肢は成り立ちます。真ん中の選択肢は、左から水たまりを通過しているところなので、最初の部分には合うが、あとには合わないということで、左のように、水たまりに足を踏み込んでしまったことを頭の中で想像することが必要になります。



このようなサンプルの問題ができるかということで、実際に 20 問をやり、その結果を次に示します。

「こめっこ」に通っている生徒さん
にお願いしました。

小学校 2 年生の男児は、20 問中 18 問正解で、ほぼ問題なくできています。

年長さんの 5 歳の女児で、同じように 18 問正解。今、最終段階で、問題を直している最中で、問題をもう少しわかりやすくしたほうがいいと言っていた問題で、誤りがあったようですので、それを加味すれば全問正解と考えてよいかと思います。

- 1) 小学2年生、男児
20問中18問正解(全体と部分:4/4、視点変化:4/4、拡張類推:4/4、数量感覚:3/4、時系列:3/4)
- 2) 年長、女児
20問中18問正解(全体と部分:4/4、視点変化:3/4、拡張類推:4/4、数量感覚:4/4、時系列:3/4) 要修正問題以外、全問正解
- 3) 年中、男児
20問中10問正解(全体と部分:3/4、視点変化:1/4、拡張類推:2/4、数量感覚:1/4、時系列:3/4) 問題意図自体は把握・認識できているように思います

3 番目は年中の男児で、半分くらいできていました。視点変化、拡張類推、数量感覚などで少し課題があるようですが、問題の意図は正しく把握・認識できているという結果でした。

お子さんが授業を受けて初めてわかるようなものではなく、思考の内容に即した判断ができていることが示

分野	不足する仮説と実証	中間報告
脳機能	・手話でも言語を司る脳機能は日本語と同様に働き、言語力は適正に発達する	・手話の脳機能は音声言語と共通しており、適正に発達した言語力が個人別に実証できる(今回は大人を対象)
学習	・発達年齢に対応して、手話で理解し、思考することができ、手話を獲得すれば学習能力は充分に育つ	・手話で育った子どもは問題を適切に理解し、思考することができる ・手話の理解を基礎として、学習能力を育て、引き出すことができる

され、適切な問題になっていると考えていますので、これをもう少し多くの人数で検証したいと考えています。

先ほどあった、不足している仮説と実証については、今回の中間報告では、脳機能に対して、手話の脳機能は音声言語と共通していることが示されました。実際にはカザフ語と手話はまったく違うと思われているかもしれませんが、使われている脳の領域は完全に一致している。しかも、適正に発達した言語能力を今回大人を対象に個人別に実証できています。コーダでもろう者でも、手話を学んでいる人でも、1人ずつ検証できることが今回の新しい報告であり、今後発展させたいと考えます。

学習については、手話で育った「こめっこ」のお子さんたちが、問題を適切に理解でき、思考することができるという手応えを得ていますので、これを定量化し問題別に評価することを今後やっていきます。

つまり、手話の理解を基礎として、確かに学習能力を育てることができる、彼らの能力を適切に引き出すことができるという、勇気ある結果が得られましたので、今後の発展を楽しみにしています。

日本財団、関係者の皆さんに感謝申し上げます。以上です。

【話題提供⑥】

「事例報告(心理・言語)」

NPO こめっこ 中尾 恵弥子

スライド2

事例報告を担当いたします、中尾恵弥子です。よろしくお願ひします。

先程河崎先生からご説明いただきました、今回ご報告する7事例の選抜基準はスライド2の通りです。

スライド3は対象児7名の基本情報です。詳細は個別の報告で触れていきます。

⑥で報告する事例(7例)について ～選抜の基準～

- ① 0歳～1歳台から「べびこめ」に参加(1名のみ例外)
- ② 途切れることなく、週2回ペースで「べびこめ」に参加し、月2回の「こめっこ」にも参加していた。
- ③ 現在、4歳～6歳(ろう学校幼稚部在籍)
「こめっこ」「放課後こめっこ」の参加が継続している。
- ④ 「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

事例A児

Aは、1歳を迎えるまで、両親は不安なくAを養育し、視線や表情、指さし等でかなり意思疎通ができていました。しかし、1歳を過ぎて自分で動けるようになると、興味を惹かれる物があればすぐに見に行き触れてみるという、他児と比べるととにかくよく動き回るAの様子が気になり始めました。そして、1歳半健診で相談したところ、聞こえていない可能性を指摘され、1歳9か月で「重度難聴」と診断を受けました。

確定診断と同時に1歳9か月から、平日週2回のべびこめと、月2回の土曜こめっこに参加し始めたAは、ろうスタッフと遊びながら手話を吸収し、2歳の誕生日を迎える頃には「食べる」「飲む」などを手話で伝えるようになりました。両親も手話習得に熱心でした。2歳1か月で両耳人工内耳手術を受けています。

2歳3か月にはスタッフと手話でやりとりしながらおままごと遊びを楽しみ、手話ばんばんを自らやって見せ、他児に対して「おうちに帰るよ」と手話で話しかけるなどの様子が見られました。スタッフの手話ネームを覚えて「この人は○

スライド3

対象児について

対象児	現年齢	初参加時の年齢	聴力	人工内耳の有無	支援学校	聴覚口話の療育	保護者の聴覚障害の有無
A	6歳6か月	1歳9か月	110dB	2歳1か月	○	幼稚部入学まで	なし
B	5歳0か月	0歳5か月	55dB	なし	○	なし	父:難聴
C	4歳8か月	2歳9か月	105dB	1歳6か月	○	1歳まで	母:一側性難聴
D	4歳8か月	0歳4か月	105dB	1歳1か月	○	幼稚部入学まで	なし
E	4歳9か月	0歳10か月	75dB	なし	○	なし	なし
F	4歳0か月	1歳0ヶ月	スケールアウト	なし	○	3歳5か月まで	なし
G	3歳11か月	0歳7か月	スケールアウト	2歳1か月	○	○	なし

○)「あの人は△△」と伝えるのに加え、「わたしはA」と自分の手話ネームを示したのもこの時期でした。

2歳半からの3か月間は、コロナウイルス感染対策で対面活動が休止したため、Aと両親は自宅でこめっこの毎日配信動画を視聴していました。Aは爆発的に手話を吸収し、手話ぱんぱんをアレンジして表現したり、食卓で両親を相手に「こめっごっこ」を展開したりしました。そして、手話で意味、物の名前や文脈理解を蓄えてきたAは、聴覚口話による日本語力も急激に伸ばしていきました。

3歳8か月でろう学校幼稚部に入学しました。土曜日こめっこには継続的に参加し、日本語と手話言語を並行して習得してきました。

4歳半には、就寝前などに人工内耳を外した時は両親の手話をよみ、両親の口話で会話している内容を理解したい時には、自ら「手話して」と要求できる子に成長しました。現在6歳になったAには妹が誕生しました。今母はAの妹とともにべびこめに通い、家族4人で手話でコミュニケーションできる環境を整え始めてくれています。そんな両親にAは「お父さんとお母さんがこめっこに通ってくれてよかった。だって人工内耳外してもお話しできるもん」と伝えてくれたそうです。

次に検査の結果についてご報告いたします。実施した検査はスライド5の通りです。

津守・稲毛式乳幼児精神発達診断の結果のご報告です。*

Aがこめっこに通い始めて1年経った時に、初めてこめっこに参加した頃の様子を振り返って回答してもらった津守式の結果では、「探索・操作」以外は発達年齢が生活年齢を下回っており、特に「理解・言語」領域は1年ほどの差が見られました。

しかし、2歳9か月時点では全ての項目において年齢相応以上の水準に至っています。そして3歳半時点と4歳2か月時点を比べた時の「言語」領域の伸びは目を見張るものがあります。これまで培ってきた手話言語力をベースにして、日本語力を伸ばしてき

A児(6歳6か月)

- 1歳半健診で聴覚障害の疑い
- べびこめ参加開始・確定診断 1歳9か月
- 聴力 両耳110dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳2歳1か月
- 2歳0か月 「食べる」「飲む」等の手話を表出
- 2歳3か月 手話ネーム「私はA」
- 2歳6か月 動画視聴開始
手話表現作品をアレンジ・こめっごっこ
- 3歳8か月 聴覚支援学校幼稚部入学
土曜日こめっこ継続参加
- 4歳6か月 父母に「手話して!」と要求できる
「お父さんとお母さんがこめっこ通ってくれてよかった」

実施検査

- <心理発達分野>
 - 津守式乳幼児精神発達検査
 - 新版K式発達検査2020(推定)
- <言語獲得分野>
 - 日本手話手話文法理解テスト
 - 質問応答関係検査
 - 絵画語い発達検査
 - J.coss日本語理解テスト

ました。現在は文字や指文字習得もスムーズに進み、文章を読む力には目を見張るものがあります。

K式発達検査では、生活年齢5歳7か月時点で、推定「認知・適応6歳1か月 言語・社会6歳4か月 全領域6歳2か月」という結果が示されています。

次に手話文法検査は40点を超えています。これは、先程言語分野で武居先生からご説明いただいた、基本的な手話の文法理解ができているというラインに至っています。コミュニケーションの力を見る質問応答検査では、年中時点で年齢相応に伸びています。日本語の力をはかる絵画語い検査とJ.COSSS日本語理解テストは、7歳レベルに達しています。

事例B児

Bは、新生児聴覚スクリーニング検査でリファアとなり、平均55dBの中等度難聴と診断されました。母は健聴、父は幼い頃から難聴でしたが、手話には出会わず、補聴器を装用したのも成人してからでした。

Bは生後5か月から平日2回のべびこめ活動に参加し、家族みんなで手話でのコミュニケーションができるようになりたいと、保護者も手話を学び始めました。初語は9か月の時で、手話で「お花」と表現しました。

Bが1歳を迎えてすぐコロナで活動が休止となり、Bは毎日保護者と共に動画配信を視聴し、スタッフの名前を覚え、手話ぱんぱんを真似するようになりました。1歳を過ぎて、手話で「おいしい」「ありがとう」等の単語表出が急激に増え、順調に手話言語が発達していきました。

補聴器装用の効果が高いBは、耳から入ってくる日本語も吸収していき、特に口話訓練を受けずとも1才8か月頃には自然な発音を身につけていきました。Bは、新しい手話ぱんぱんを見た時には、まず手話に集中して意味を理解して覚え、その後での日本語訳を覚えていました。両親が手話と音声でBに話しかけるのはもちろんですが、こめっこ活動でも手話言語と日本語の両輪支援につながっていた部分があったと思います。

3歳になる頃には、日常生活では、Bが母や先生に伝える時には音声日本語だけでほとんど困ることなくコミュニケーションできるようになり、幼稚園に入学しました。一方で、他者からBに伝える時、とりわけルールや込み入った説明をする時には、手話があると見ようきこうとする態度が明らかに高まり、スムーズに理解できて

スライド6

B児(5歳0カ月)

- べびこめ参加開始 0歳5カ月
- 聴力 55dB 両耳感音性難聴
- 補聴器装用開始 0歳6か月頃

- 0歳9か月 初語の「お花」を手話で表現
- 1歳台 「おいしい」「ありがとう」
- 1歳8か月 手話言語と音声日本語
- 3歳1か月 聴覚支援学校幼稚園入学
- 4歳台 手話言語と日本語の切り替え
- 5歳 手話言語と日本語の力がともに成長中

います。4歳台では、相手によって手話言語と日本語を自分で切り替えるようになりました。5歳になり、ますます手話力がアップすると共に、こてこての関西弁でお話しするなど、音声日本語においても聴児にひけをとらない語彙力と発音の明瞭さが見られます。

Bはこれまでの7回の結果すべてにおいて言語領域発達年齢が生活年齢をかなり上回っています。これは、生後5か月から手話言語のあふれる環境に出会った成果だと考えられます。

K式発達検査では、生活年齢4歳11か月時点で、「認知・適応4歳11か月 言語・社会5歳8か月 全領域5歳4か月」という結果が示されています。

手話文法検査は33点で、武居先生が以前調査された際の年中の平均点を超えています。質問応答検査は、5歳時点で年齢相応に伸びています。絵画語い検査とJ.COSSは、5～6歳レベルに達しています。

事例C児

Cは新生児聴覚スクリーニング検査でリファーとなり、105dBの重度難聴と診断されました。父は健聴、母は一側性難聴ですが、手話に接したことはありませんでした。両親はCがきこえないことがわかってから、独自に手話を学び、赤ちゃんの頃からCと手話を交えてかかわっていました。

1歳半の時に人工内耳の手術を受け、音としては35dB前後入るようになりましたが、聴神経がとても細く、ことばとしてきき取れるほどには聴覚活用が進まなかったことから、両親は本格的に手話の必要性を感じ始めました。そして、幼稚部入学に向けて母が退職したことを機に、2歳9か月からべびこめに参加しました。

Cは初めてべびこめに参加した時から、スタッフが驚くほど手話でかかわることができました。べびこめに週2回通い始め、3歳になったCは、周りをよく観察し、「あれは誰?」「あの子何してるの?」「何のお話し?」と尋ねる好奇心旺盛で積極的な子でした。それに対して両親がしっかり受け止め、できる限りの手話や指文字ですべてCに答えてくれる様子が見られました。こめっこ活動でもCは知りたいことがあると何でもろうスタッフに質問してくれます。

幼稚部に入学し、4歳を迎えたCは、子ども向けのゆっくりはっきりした手話でなく、大人並みのスピードの

スライド7

C児(4歳8か月)

- べびこめ参加開始 2歳9か月
- 聴力 両耳105dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳1歳6か月
- 0歳～ 両親が独自に手話を学びCとかかわる
- 1歳6か月 両親は本格的に話の必要性を感じ始める
- 2歳9か月 べびこめ参加開始
- 3歳台 「あれは誰?」「何してるの?」「何のお話し?」
- 3歳10か月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 4歳2か月 手話のある児発センター利用開始
- 4歳6か月 大人並みのスピードの手話を読み取る
音声日本語よりも手話言語が優位
文字・指文字の習得

手話でも読み取れるようになってきています。人工内耳手術から4年ほど経過した現時点において、音声日本語よりも手話言語が優位です。

日本語については、幼稚園入学前後から指文字やひらがなへの興味が増しています。両親と道を歩きながら「あの字は何?」「こめっこの”こ”だ!」などとあそびを交えた自然なかかわりの中で、読み書きの力が向上してきています。また、聴覚支援学校で教わったキュードスピーチを習得し、それに合わせて発声する練習にも積極的に取り組み始めています。

津守式の結果では、こめっこに参加し始めた当初からCと家族のコミュニケーションはしっかり伝わっており、好奇心もしっかり育てていたため、探索・操作と言語領域が高いという結果が示されていました。そして、こめっこに参加し始めてからの3歳と4歳の結果では、ろうスタッフに出会ってぐんぐん手話を吸収していき、言語領域が生活年齢を大きく上回るようになりました。また、それまでは家族中心のかかわりでしたが、こめっこスタッフや他児とのやりとりが広がったことをきっかけに、社会領域が伸びています。

K式発達検査では、生活年齢4歳3か月時点で、「認知・適応5歳4か月 言語・社会3歳9か月 全領域 4歳5か月」という結果が示されています。

手話文法検査は33点で、B児同様、武居先生が以前調査された年中の平均点を超えています。質問応答検査は、4歳0か月時点では2歳後半レベルでしたが、その後ますます成長している様子が観察されており、2024年の検査実施が楽しみです。絵画語い検査とJ.COSSは、文の理解を指文字だけで実施するには限界があり、今回は点数をつけていません。ただし、手話言語で表現すればしっかり読み取り、5～6歳レベルまで理解できています。

事例D児

Dは、新生児スクリーニング検査でリファーとなり、生後4か月から活動に参加しました。5か月の確定診断で105dBの重度難聴であることがわかり、補聴器装用を開始しました。

スライド8

母は週2回のべびこめ活動に、毎回一番乗りするほど熱心に参加し、手話学習や他の保護者との交流を楽しみました。Dは参加当初からじっとろうスタッフの手話を見ていました。

6か月にはお座り、8か月には人見知りが始まる等、心身共に順調な成長を示し、「ちょうだい」や「(おむつ)交換」などの手話が出てきた1歳1か

D児(4歳8カ月)

- べびこめ参加開始 0歳4カ月
- 確定診断 0歳5カ月→補聴器装用開始
- 聴力 両耳105dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳1歳1カ月
- 0歳11カ月 「ちょうだい」「(おむつ)交換」等の手話を表出
- 2歳0ヶ月 「アンパンマン抱っこする」意思表示が増える
- 2歳4カ月 手話でのえほんよみかたり
- 2歳6カ月 聴覚活用が進む
- 3歳0カ月 母とは音声日本語と手話で会話
- 3歳10カ月 聴覚支援学校幼稚園入学
- 4歳台 手話言語と日本語の切り替え
- 4歳8カ月 手話言語と日本語が共に成長中

月で、両耳人工内耳手術を受けました。

1歳台はスタッフの手話表現遊びを真似たり、手話で動物やキャラクターの名前を表現し、2歳前に「アンパンマン、抱っこする」などの2語文を手話で伝えられるようになりました。2歳の誕生日を迎えると、やりたいことや嫌なことを手話でのやりとりの中ではっきりと意思表示し始めました。2歳4か月に、自宅で過ごすDが、お気に入りの絵本を自ら手話と表情で感情豊かによみ語る姿を、母がビデオを見せて報告してくれました。2歳半頃から聴覚活用が進んで、発声が徐々に明瞭になっていきました。3歳前には、Dの生活背景や文脈を知っている母であればかなりきき取れる発話に、手話を交えながら母といきいきおはなししていました。入浴や就寝前に人工内耳を外し、リラックスして母とその日の出来事を振り返る時間は、手話での会話を楽しみました。そして、べびこめにも週2回継続的に通いました。

聴覚支援学校の幼稚部に入学し、4歳を迎えたDは、聴者との会話は音声日本語で、ろう者との会話は手話でと相手によって自ら切り替えることができおり、どちらでのかかわりも全く困ることなくやりとりできています。音声日本語については、周囲の大人が十分きき取り、理解することができるほどクリアになっている一方で、人工内耳を外した時や、1日の予定などを順序立てて説明する時には必ず手話が必要であり、手話言語と日本語がともに育っています。

津守式の結果です。Dは生後4か月から手話言語のあふれる環境に出会ったDは、これまで実施した検査のいずれも生活年齢相応以上の水準に至っています。3歳以降の検査結果は5領域がどれもバランスよく発達しています。

K式発達検査では、生活年齢4歳8か月時点で、「認知・適応 4歳7か月 言語・社会5歳6か月 全領域 5歳1か月」という結果が示されています。

手話文法検査は22点ですが、以前から武居先生が「言語への関心が変わる5歳児から点数が伸びる」と言及されているので、継続して実施していきたいと思えます。質問応答検査では、年少時点で年齢相応に伸びています。絵画語い検査とJ.COSSは、5～6歳レベルに達しています。

ここまでご報告してきたA・B・C・D児は、聴覚障害のみのお子さんの事例でした。

次にご報告するE・F・G児は、未熟児や先天性の疾患など、出生時の課題のあったお子さんの事例です。

事例E児

Eは、29週、1100gほどで誕生し、しばらくNICUで過ごしました。生まれつき外耳道閉鎖を伴う小耳症で、耳の形がなく、骨導補聴器を装用しています。聴力は裸耳で75dB、補聴器をつけると35～40dBの混合性難聴です。

生後 10 か月でこめっこに出会い、
 当時はコロナウィルスの流行期であ
 ったため、最初はこめっこ動画配信を
 家族で視聴しました。初めて対面活動
 に参加した時に、「生こめっこだ！」
 と母が喜んでくれるほど、熱心に視聴
 していました。

べびこめの子どもたちを見ている
 と、手を動かして真似する子や、自分
 の興味のある物を見に行ってしまう子など様々
 なタイプの子がいますが、Eはまずはじっと見ている、おとなしいけれど、納得
 するまで目から吸収してやるという気迫が感じられました。

1歳半を過ぎて、母はこめっこスタッフから「よく見てるね！すごいね！」と
 言われる一方で、まだ手話が出ない、音声も出ない、大丈夫かな？と不安に思っ
 ていました。そんな矢先、2歳になったEが初めて自分から母に「お茶」と手話
 で伝えました。その次は「牛乳」が表せたり、「黄色」「緑」など色の表現を伝え
 てきたりと、今までためてきた手話がどんどん出始めました。2歳 10 か月頃、
 いつも母が出かける時に「早くしなさい」と急かす様子を「ママ、時間、ない、
 ない」と手話で表現しました。

3歳になる頃にはべびこめでも、覚えた手話ばんばんをスタッフと一緒に表
 わし、たくさん手を動かし始めました。時々スタッフよりもワンテンポ早く手話
 表現しているのを見て、他の保護者からも「Eすごい！完璧に覚えてるやん！」
 とびっくりされていました。家でも、母が普段使うことのない新しい手話を、急
 にEが覚えて伝えてくることが増え、訓練や教えようとしなくても、べびこめ活
 動の中でろうスタッフと遊びながら自然と語彙を増やしていきました。

聴覚支援学校の幼稚部に進学し、4歳になったEは、きこえてくる音を自発的
 に発音しようとするが増え、音とつながり始めている様子です。文脈がわか
 っている母であれば音声だけでもだいたいきき取って理解できるようになって
 います。母や先生がよく使う「しかたない」「やっぱ(やばい)」などを、その人
 の言い方と手話表現で上手に真似します。また、家に帰ってから、学校や放課後
 デイサービスの出来事を想起し、「今日、POE(手話言語のある児童発達支援セン
 ター)で〇〇(スタッフの名前)がライオンになって、ガオーってして怖かった」
 と母に報告します。普段は手話も音声も使うEですが、「ママのスマホ見たい」
 など、これ言ってもいいのかな？ということ伝える時には、自然と手話だけで
 伝えてくるそうで、母が一番自分の気持ちを表現しやすい言語は手話なんだな
 と感じているそうです。

E児(4歳9か月)

- 29週1100gで誕生
 - 外耳道閉鎖を伴う小耳症
 - べびこめ参加開始 0歳10か月
 - 聴力 両耳75dB 混合性難聴
 - 骨伝導補聴器装着 35~40dB
-
- 0歳10か月 こめっこ動画視聴開始
 - 2歳1か月 「お茶」と手話で伝える
 - 2歳10か月 「ママ、時間、ない、ない」
 - 3歳台 手話表現作品を完璧に覚える
 - 3歳11か月 聴覚支援学校幼稚部入学
 - 4歳3か月 自発的な発声が増える
 - 4歳7か月 一日の出来事を手話と音声日本語で報告

津守の結果では、Eのペースで成長している様子が見られます。

K式発達検査においては、手先に力が入りにくい身体特徴があり、描画や折り紙などの課題で通過とはなりません。こうしたいというイメージを持ち、理解して取り組んでいます。色の名称や重さの概念なども理解できています。検査者から質問された内容について、じっくり考え、自分からお話ししよう、答えようという意欲の高さが見られています。

F児(4歳0カ月)

- 小耳症と手指の障害
- ベビこめ参加開始 1歳0カ月
- 聴力 両耳スケールアウト 混合性難聴
- 骨導補聴器装着 75dB

- 1歳0カ月 父が育休を取得し家族3人でベビこめ参加
- 1歳4カ月 手話表現作品を次々とマスター
アニメよりもこめっこ動画を熱心に視聴
- 2歳台 手話での会話がスムーズにできる
- 2歳10カ月 「クレーン車」「ブルドーザー」の手話を自分で考案
- 3歳2カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 3歳6カ月 手話のある児発センター利用開始
- 3歳10カ月 大人並みのスピードの手話を読み取る
冗談が通じる「ずるい」の意味を理解して使用

 事例F児

Fは、小耳症で生まれました。裸耳では両耳スケールアウトです。骨導補聴器を装着すれば75dB程度の補聴効果があると医療機関では言われていますが、両親は日常生活においては75dBも聞こえているようには感じないといいます。赤ちゃんの時に、両親はいろいろな可能性を求めていくつかの病院に足を運びましたが、内耳奇形と聴神経がとても細いことから人工内耳での効果はあまり見込めないため、今のところ手術は考えていないとのこと。

また、Fは生まれつき手指にも障害があり、右手親指と、左手親指・人差し指・中指がほとんど動きません。生後5か月頃に整形外科医から、「この子の手では手話は難しいかもしれない」と言われたことで、両親は「手話を覚えさせるのはFの負担になるのではないか、でも補聴器や人工内耳での補聴効果も見込めない、どうしたらいいか」と方向性が決まらず悩んでいました。そして、1歳の誕生日を迎えてすぐに、こめっこに出会いました。初めてこめっこを訪れた時に、両親は「この子は動かしづらい指があるけれど、手話はできるのでしょうか？」と質問してくれました。そして、スタッフからの「大丈夫！きっとFなりの手話表現で伝えてくれるようになる」ということばを信じて、ベビこめに通い始めました。

ベビこめへの参加を決めたのを機に、父は育休を取得し、「子どもと手話で会話すること」を目標に、ほぼ毎週2回、家族3人で熱心に通いました。1歳4か月におなまえよびのぱんぱんを完璧に覚え、1歳半でこめっこぱんぱんをはじめとするこめっこの手話表現作品を次々とマスターしました。

また、テレビ番組やアニメにあまり興味がなかったFですが、こめっこの動画配信は毎日熱心に視聴し、2歳を過ぎた頃には日常生活における会話は手話でスムーズにやりとりできるようになりました。3歳になるとFからの発信が増

え、家の中ではFが好きな車のおもちゃの細かい特徴を捉えて、Fが自ら手話表現を考えて「クレーン車」「ブルドーザー」など伝えてくれるようになり、家族の中で伝わるコミュニケーションを楽しんでいます。

3歳2か月で聴覚支援学校の幼稚部に入学しました。キューを用いた聴覚口話法で指導する学校ですが、発音については必ずしも求められておらず、Fのことばは手話だと認められているそうです。放課後は手話言語のある児童発達支援センターを利用し、4歳になったFは、目で見えてわかる世界で学びを深めています。ろうスタッフとのやりとりでは、大人のろう者が普通のスピードで話してもしっかり手話を読み取って理解しています。また、家族の会話の中で父が冗談を言うと、Fが「なんでやねん」とツッコミを入れてくれるそうです。「ずるい」という抽象的なことばの意味を理解して自ら使えていたり、ろうスタッフからの「もし～したらどうするの!？」という問いかけを読み取って理解できたりと、ますます手話力が高まっています。Fは現在、学校以外では補聴器は装用せず、ほとんど音のない世界で生活しています。そんなFを見てみると、頭の中に日本語がなく、すべて映像的な手話言語で思考し、話しており、まさに手話言語を母語として成長しつつあることを実感します。

友達がひらがなで自分の名前を書いているのを真似して、ひらがなのような形を描こうとする様子も見られ、今後はこれまで培った手話言語の力をベースに、日本語の読み書きにもつなげていってくれるのではないかと期待しています。

津守式の結果では、Fのペースで順調に発達していることがわかります。

K式発達検査では、手指の障害があるため、回答すべきことや内容はほぼ理解していると感じられるが、通過には至らない項目が多いです。それでも、色の名称や3までの数、人物完成、じゃんけんや重さの概念なども理解できるようになっており、文脈で理解する力が高まっています。

事例G児

スライド11

Gは新生児聴覚スクリーニング検査でリファーになり、確認検査を待つ生後1か月頃に右顔面神経麻痺があることがわかり、ABRを受けて両耳スケールアウトと診断されました。MRIで内耳奇形や三半規管欠損、顔面神経欠損、聴神経の細さなども発覚し、医師からは「この子は一生話すことはありません」と言われました。ま

G児(3歳10カ月)

- 染色体の微細欠失による運動発達遅滞
- 三半規管欠損・顔面神経欠損など
- べびこめ参加開始 0歳7カ月
- 0歳7カ月～ 週2回べびこめ+動画視聴
- 1歳6カ月 手話表現作品と一緒に手を動かし楽しむ
えほんよみ 「ぞう」「ねこ」と手話
- 2歳0カ月 寝手話でこめっこばんばん
- 2歳2カ月 自力歩行
- 2歳6カ月 【母指さし】→【G指さし】→「好き」
- 親子で意思疎通ができていますと実感
- 3歳0カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 3歳台 表情豊かに意思を伝える

た、運動発達遅滞もあり、「歩行できるようになるのは3歳以降だろう」と医師から伝えられました。その他にも疾患がある可能性を指摘され、母はGとどの程度コミュニケーションが取れるようになるのかという大きな不安の中、「もしかすると、手話があればこの子とやりとりできるかもしれない」と、当時は藁にも縋る思いで、生後7か月からべびこめに通い始めました。

参加開始当初、母は「見ているのかな？わかっているのかな？」と半信半疑でしたが、熱心に平日のべびこめ活動に通ってくれました。動画配信も、こめっこやろう学校への移動時間にタブレットを使ってGに見せ、手話に触れる時間をたくさん作ってくれました。その効果が表れ始めたのが、1歳半頃でした。べびこめ活動の時にスタッフと一緒に手を動かして手話表現あそびをするようになり、絵本に出てくる動物を指さして「ぞう！ねこ！」と手話で教えてくれるようになりました。

ちょうど2歳の頃、寝言ならぬ寝手話でこめっこばんばんをするGを見て、母は「この子はちゃんと手話を獲得しているんだ！」と感動したと報告してくれました。そして、2歳6か月の時にGが寝る前に母のおなかの上に乗ってきて、母を指さし、次に自らを指さし、好きと表現し、「ママのことGちゃん大好き」と伝えてくれ、それから毎晩ママにそんな気持ちを伝えてくれているそうです。母は、こめっこに通って一番よかったのは、親子で意思疎通ができるようになったことだと話してくれています。

また、顔面神経の欠損があるので、表情が出にくいと思われていたGですが、やりとりを楽しむ中で、手話と一緒に自然と色々な表情を見せてくれるようになっていきます。加えて、さまざまなものに興味を持ち、自分から近づいていこうとする意欲が増すうちに、運動発達も進み、2歳2か月には自力歩行ができるようになり、3歳になった現在ではより活発に動きまわる姿を見せてくれます。

津守式の結果からも、Gのペースで順調に発達している様子がわかります。

K式発達検査においては、形の弁別がとても速く、目で見て判断する課題を得意としています。昨年度から今年度にかけての1年間で、手先の器用さが増し、教示の理解が進んだことで、描画や積木模倣の課題ができるようになりました。大小比較や絵の名称も通過するなど、ゆっくりながらも着実に成長しています。

以上で、私からの報告を終わります。

- * シンポジウム当日の報告では、津守・稲毛式乳幼児精神発達診断の結果をグラフにしたスライドを提示しましたが、本報告集には掲載しておりません。以降、B～G児についても同様です。

【指定討論①】

「コミュニケーション支援」の視点から

宮城教育大学 松崎 丈

司会／松崎先生は、東北大学大学院にて博士号を取得後、宮城教育大学教育学部特別支援教育専攻の教授をされています。教育心理学特別支援教育を専門に研究され、全国各地のろう学校の乳幼児相談から高等部までの幅広い学校支援や、家庭内での子どもとのコミュニケーション支援もしておられます。

本日は、「コミュニケーション支援」の視点からお話しいたします。松崎先生よろしくお願いたします。

スライド2

松崎／ご紹介いただいたとおり、各地の学校や家庭における保護者や先生へのコミュニケーション支援を行い、研究しています。本日はこれまでの研究と「こめっこ」での観察についての報告です。

これまで家庭訪問をし、親御さんへコミュニケーション支援をする中で、気づいたことがあります。

「こめっこ」に通って、子どもたちとコミュニケーションをとりたい、発達を見ていきたいという親御さんの気持ち、親としての感受性の回復を大切にしたいと考えております。

親としての感受性は、親から赤ちゃんの行動を見て、その背後の意味をとらえたり、適切に反応するように関わったりすることを意味します。

このような親の感受性の回復を手伝うことも、親子コミュニケーション

親子コミュニケーション支援

親が、わが子のことをもっとわかりたい、もっと気持ちを通い合わせたいという気持ちが大きな原動力に。

➡親子コミュニケーション支援では、「親としての感受性」を大切に回復させ、高める側面もあることに留意したい。

「親としての感受性」

赤ちゃんの行動の背後にある意味を肯定的に捉えたり、その行動に適切に反応するように係わったりすること。

スライド3

こめっこを訪問した時に 親御さんが語ってくださったこと

(一部)

「聴覚活用ができるか発音できるかばかり意識させられたが、(こめっこにきて)やっと我が子をまるごとありのままに受け止められるようになった。」
「どこに行っても我が子と私たちをありのままに受け入れてもらえない社会に傷付き、絶望を抱えていたところで、やっとこめっつとに出会えて落ち着けられた」

➡親御さんもまた「当事者」であることが大事。

➡大阪府における保護者の心理的支援を含む専門の相談窓口「ひだまり・MOE」が「我が子との情緒的な結びつき」と「家族と社会との新たな繋がり」を促している。

支援の1つだと考えています。

以前、「こめっこ」を訪問した際、親御さんがさまざまなことを語ってくれました。「こめっこ」とつながることができて、心理的な安らぎを得ているということです。その中で、親御さんが語ってくださったことの一部がスライドです。親御さんの当事者としての支援が必要、大切であると考えます。

「こめっこ」のスタッフや河崎先生にくわしく聞いたところ、「こめっこ」に来る前段階から大阪府の支援として積極的な支援、相談窓口の場所として、「ひだまり・MOE」という場所が存在している。そこで親御さんが心理的な安定を得て、家族・社会とのつながりを回復させる。そういった支援があるため、「こめっこ」にもスムーズにつながれるのではないかという話がありました。これは非常に大切な指摘だと感じました。

今から、こめっこ支援の重要点を話します。

これまでの報告の中で、乳幼児から小学生までの成長の話がありました。私からは、0歳～1歳くらいまでの子どもたちのコミュニケーション支援を中心に話します。

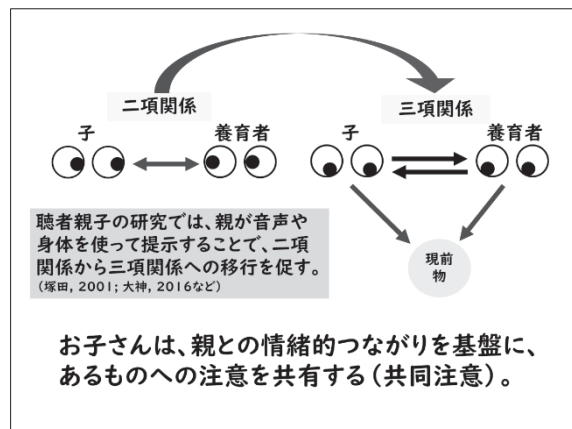
0歳～1歳だと、コミュニケーションの質がかなり変容する時期です。最初は親と子の1対1の関係、二項関係からコミュニケーションがスタートします。その後は、親と子、それにプラスして物が出てきて、三項関係が始まります。

これは自然に変容するものではありません。きこえる親御さんの場合、二項関係の段階では、音声を使って、「あれを見て」と物を見せながら子どもに話しかけます。そして三項関係につなげていくというのが、きこえる親子の関係です。

けれども、子どもがろう児の場合はどうでしょうか。これまでの研究を見ると、ろうの親子のコミュニケーション方法の研究についてさまざまな知見が得られています。

ろうの赤ちゃんはろうの親の視線の先にあるものを多く追いかけます。ろうの親と二項関係にあるとき、ろう

スライド4



スライド5

乳児期における 手話コミュニケーション研究の知見

ろう者の親を持つろう乳児たち(7～14ヶ月)は、聴者の親を持つ聴児たち(同月齢)と比べて、親の視線の先にあるものを追いかけることを多く行う。(Brooks, Singleton & Meltzoff, 2019)

生後6ヶ月齢のろうの乳児に対して、ろう成人同士で表現される手話と育児語としての手話を録画したビデオを提示して比較。その結果、育児語の手話の方がビデオを長く注視。聴こえる乳児にも同様の結果に。(Masataka, 1996; 1998)

手話でコミュニケーションを図る親子にとって大切なこと。

- ① 赤ちゃんに興味対象を共有して、
- ② 赤ちゃんの発達や理解を踏まえた手話や手指サインで、
- ③ 楽しくやりとりをして気持ちを分かち合う経験を

の親が物を見せる、まだ十分、視力が育っていないので子どもが見えやすい部分に物を提示する。赤ちゃんの視力が発達するに伴い、その物の位置も適切に置き、物の近くで手話をする、赤ちゃんは物と手話の両方を見ます。そして、三項関係に移行していくという経過があります。

この手話もとても大切です。大人の手話は速すぎて子どもにはわかりません。

子どもにわかりやすい手話があります。大きくはっきり、繰り返して表出します。これらを使ってコミュニケーションを重ねることが大切になります。

先ほど手話を大きく、はっきり、繰り返すと言いました。このようなことを、ろうの親子で行う研究から得られた知見がスライドにあります。

「こめっこ」を観察してみると、子どもに適した手話が「こめっこ」の活動に見られます。「こめっこ」の手話ばんばんについて河崎先生から話がありましたが、今からもう一度、手話ばんばんの動画を見ていただきます。(動画)

手話ばんばんをきこえる親御さんが見て、一緒に動くことで、赤ちゃんが見やすい手話を親も楽しみながら身につけられると思います。

また、「こめっこ」スタッフが三項関係の作り方を見せています。手話の際に関連するものや絵や写真を近くに持ってきて手話をしています。つまり、物を見せて、手話を見せてということ子どもが同時に見えやすい形でしています。そのようなやり方をきこえる親が見ることで、コミュニケーションのやり方を学びます。

赤ちゃんの視力の発達に合わせてろうの親がどのように物や手話を提示しているか、変遷について書かれています。本日は詳しく話せないなので、報告書で後ほどご覧ください。

三項関係について説明しました。

実際に、私が各家庭で支援をする際に親が困っている様子があります。子どもに一生懸命に手話を見せても、なかなか子どもが手話をしてくれないとか、あるいは、手話をしてもらってもそれがコミュニケーションにつながらない。コミュニケーションや遊び方がわからないという困りごとを聞きます。

ろう親子のコミュニケーション観察 に関する研究の知見から

親は、子どもが大人の手話発話を容易に知覚できるように係わっている(育児語も含まれる)。

- 大きく手を動かして動きを強調する
- 繰り返しを多くする
- 文法的に単純な構造を用いる
- 話題のものを視野内に持っていく
- 話題のものの近くで手話を表現する
- 運動する手型を保持して強調する

親も動いてみる

こめっこスタッフがやってみせる

(鳥越, 1995; 松崎, 1999他)

赤ちゃんの見え方の変化に合わせて ろうの親はどのような係わりをしている？

- 生後1か月(視力0.01)
 - ・30cm位の距離でいたい焦点が合う(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)。
 - ⇒ 乳児に話しかけたり再度見てもらうために、手足や身体を優しくてたり叩いたりする。そうして親は今後のやりとりの足場を作ってみる(Swisher, 2000)。
 - ⇒ 乳児が手を動かすと、乳児の身体の上で手話を表してみせる(Spencer, 2003)。
- 生後2か月(視力0.01~0.02)
 - ・あるものをじっと見つめ始める。人間の顔と物の形を区別し始める。動くものを目で追いはじめる。(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)
 - ⇒ 見てほしいものを乳児の顔の前で提示。
 - ⇒ 育児語の手話(ゆっくり大きな動作で繰り返して表現)で話しかける(Masataka, 1996)。
 - ⇒ 顔の動きを強調する(Meadow-Orlans, MacTurk, Preziosa, Erling & Day, 1987)。
- 生後5~6か月(視力0.04~0.08)
 - ・人の顔の動きに関心を持ち、人の表情の違い(笑顔、怒り)がわかるようになる。
 - ・左右、上下の方向に追視するようになる(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)
 - ⇒ わかりやすい顔の動きで質問の表現をする(Reilly & Bellugi, 1996)
 - ⇒ 乳児の視線の動きのペースに合わせて、物を動かす(例、ボールを転がす、頁をめくる)。
 - ⇒ 親の顔を見てもらうために、乳児の視野内に入るか、物を動かして親の顔に注意を向けさせる。
 - ⇒ 乳児が何かに関心に向け、そこから目を離すと同時にそれについて話す(Waxman & Spencer, 1997)。
 - ⇒ 手話は、子どもの身体の上だけでなく、物の近くまたは物の上でも産出(Spencer, 2003)。

私はその際には、親と子のコミュニケーションの仲介をします。わかりやすい例としては、まだ手話を出さない子どもが視線や表情、手の動きを見せるので、その様子を仔細に観察すると、何に興味を持っているかが想像できます。それを使ってやり取りをする支援方法があります。

積み木をここでは使っています。写真で時系列を表しています。赤ちゃんの表情を見ていると、考え込んでいる顔、そして積み木を手にとって触ってみて、その間赤ちゃんはずっと考えるような表情をしています。その様子を見て、赤ちゃんが何に興味を持って、どこに注目しているかがなかなか親にはわからない。そのときに、赤ちゃんは積み木を積んで、高くすると喜んで、「それをこわしたい」と思っているのです。そのようなことを親がやってみたらいいんじゃないかと考えます。しかし、この様子をくわしく観察すると、高い積み木をこわしたいのではなく、積むところに興味を持っていることがわかります。

今から動画を見てください。(動画)

赤ちゃんが注目していたのは、積み木ではなく、それを使って何をするのか。積み方に興味があるようです。それは、視線や表情、手の動きを仔細に観察するとそれがわかり、それがコミュニケーションにつながります。うまくいくと、赤ちゃんが喜び、さらにコミュニケーションが発展していきます。そして「積み木」という手話を見ると、赤ちゃんの中でつながっていきます。自分の経験と、「積み木」という手話、そして概念がつながりをもつわけです。

もう1つの例をお見せします。今回の児童は、ダウン症とろうの重複の子どもです。

他の障がいも重複しているため、親は手話でのコミュニケーションに限界を感じている状態でした。

そこで先ほどのように丁寧に子どもの様子を観察し、加えて、子どもが自然に表していることを引き取って、コミュニケーションにつなげる支援をしました。

次の動画では、画面の後ろに私がいます。私がうちわを使って、あおいであげます。子どもは2歳。うちわの風を受けて、喜んでいます。そのとき、自然に風を表すような手の動きが見られます。私は同じようにあおぎ続けるのではなく、子どもとの相互的なやりとりをしたほうがよいと考え、子どもが手を動かしたとき、子どもがゆっくり手を動かせば、私もゆっくりあおぐ、速く動かしてほしそうなら、速くあおぐ。手をとめたら、私もあおぐのをやめる。そうすると赤ちゃんは風が止まったら、「もっと動かして」と、また手を動かします。そうすれば私もあおぐというように、相互的なやりとりの場面を作りました。

動画をご覧ください。(動画)

重複の子どもはろうだけの単独の子どもと比較して、手話の習得が遅くなることが多いです。けれどもこれまでのコミュニケーションの支援から言うと、子

どもは、自分の経験や見方、わかり方を自然に表してきます。それを受けて、私たちからコミュニケーションを作り、積み上げていくことが大切です。

ろう者の手話は、さまざまなわかり方が蓄積され、言語となっています。文化を含む、文化的な言語です。

それに対して、個別から文化的なものへ変化させるには、最初に個別に合ったやりとり、コミュニケーションを積み上げることが大切です。

今、示しているのは、これまで家庭訪問をした親からの感想です。

支援を受けて、それまで子どもが手話を出さないことを不安に思っていたが、視線や表情や動きで、子どもが考えていることが、わかるようになった。

それは私が支援をした際、まるで通訳のように、子どもが考えていることを親に伝えたからです。それでやっと子どもが考えていることがわかって、嬉しかったという感想をいただきました。そこからさらに意欲的にコミュニケーションをとりたいと、コミュニケーション意欲の回復が見られました。

最後に、手話の使用によって言語を獲得するコミュニケーション支援においては、コミュニケーションの方法をどうするかだけでなく、個別の子どものわかり方、成長に合わせてその時々に必要なコミュニケーションの内容や進め方なども考案・実践していくことも重要になるといえます。そして言うまでもなくそのようなコミュニケーションを実践する親に対する支援も同時に行うことが大切です。

私からの報告は以上です。

ろう重複の子どもと手話

- 子どもは初期からその気持ち、経験や考えなどを独自のサインを作って発信。そこに子どもなりの「わかりかた」が入っている。
- ろう者の手話は、また幾重にも重なる「わかりかた」や手話を用いる人々の「文化」にあるものを備えた、「文化的な言語」として考えている。
- 最初から「文化的な言語」としてのろう者の手話を共通語として正しく身につけさせることよりも、その時々の子どもの「わかりかた」の変化に即した手話で係わる。

独自のサイン → 事象に似た手話 → 事象に似ていない手話
(自発信号/特徴弁別的信号) (特徴弁別的信号) (型弁別的信号)

↑ ↑ ↑ ↑ ↑
その時々の子どもの「わかりかた」の履歴とも関わる

家庭訪問支援を受けた親御さんのインタビューから

- ここまで詳しく言う先生はいないなって思った。深いなって。先生の助言がない限り、ここまで頑張れない。何これ？バーンって倒すから、まだまだ先かって（何がなんだかわかってないでよって）思ったけど、親のちょっとした、視点を委ねてみる感覚を知らされた。先生が気持ちや興味を代弁してくれるからこそ、そのぐらいはわかっているんだって思っ、じゃあもうちょっとやってみようとか、見せてみようかって気持ちになる。
- 先生は、視線から、ちょっと発したことばからとか、口の動き、こどもが何をしているっていうのを受け止めているから、子は今これを見ているんだ、これに興味があるんだ、じゃあこうしていけばいいかなって観察力…（略）見逃したことがいっぱいあったような気がする。このときはまだそんなの全然分かっていなかったけど。先生はよく見ているから、赤ちゃんのペースに合わせてゆっくり、丁寧にやっている。こどもの発していることをちゃんと受け止めている。だからこそ、次（の係わり）が出てくるんだと思う。
- 先生のコメントは、他の先生と違う。他の先生は「興味があるんだね、どうしよう。」程度の話で終わる。子がただ興味があるということだけでなく、心の状況を先生が代弁してくれている感じがあった。子と会話できてる気分になった。うすっぺらい会話じゃなかった。子は赤ちゃんだけど、心を持って…他の先生だと、「これは指差しだから、隣で、これは～だよと言ってあげましょう」程度。だから、「はいわかりました」って事務的になる。でも先生は愛情を感じられる助言をしてくれる。

参考：家族主体で共同で取り組むアプローチ コロラド家庭訪問支援プログラム Colorado Home Intervention Program (CHIP)

1. 話し合い(カウンセリング)
親とのカウンセリングで子どもの障害の受け入れや今後の対応に向けた方針(多領域・多方法からの選択)と、こどもへの療育で期待される効果を説明。支援の実施方法についても話し合い、親の決定過程を援助する。
2. 子どもとの係わり合いの支援
実際に子どもと係わってみせることで、なにをどうすべきか親に理解してもらおう。
3. 子どもの行動観察によるアセスメント
子どもの行動を共同で観察し、評価をおこなう。親との係わりをビデオ記録、分析、結果を報告。親による各種質問紙記入も。
4. 親自身による育児(療育)の支援
親が子どもと上手に係われるように役割を任せながら、肯定的にフィードバック。ケースに応じて各機関とも連携。
5. 発達評価と話し合いのプロセスの継続
評価結果について話し合い、さらに良い方法を考える。

【指定討論②】

「コーダ」の視点から

兵庫教育大学 中島 武史

司会／兵庫教育大学特別支援教育専攻の講師をされている中島先生です。15年間ろう学校の教員をしながら、研究をしておられました。現在は兵庫教育大学で、「コーダの言語使用・言語意識と心理」や「ろう教育の社会言語学」を中心に研究され、関西学院大学の手話言語研究センターの客員研究員も務めておられます。

今回は、「コーダ」の視点からお話しいたします。

中島／まず、コーダとは、「こめっこ」に関連するみなさま、また視聴されているみなさまは、ご存知と思います。ろうの親を持つ、きこえる子どもたちのことです。

スライド2

1. コーダとは

- CODA :
Children of Deaf Adults の頭文字を取った略称。
意味は「ろうの親をもつ 聞こえる子どもたち」。
 - * 両親だけでなく、どちらかの親がろうであればコーダ。日本に2万人以上はいる。(中津, 2023)
 - * コーダの多くは、手話に関わりながら生きている。(中島, 2019)
 - * 手話以外にも、口話、文字、など複数のコミュニケーション手段を使っている。(澁谷, 2007)

ただし、いろいろ定義を見ますと、例えば両親だけでなく、どちらかの親がろうであれば、コーダです。

ここで「ろう」という言葉を使っていますが、きこえない、きこえにくいと広い解釈で考えてください。

日本には、2万人以上のコーダがいるだろうということです。

スライド3

2. コーダの言語状況

27名の事例 (中島, 2019)

①	手話が第一言語で、日本語が第二言語	2 (7%)
②	手話も日本語も第一言語だが、手話の方が得意	2 (7%)
③	手話も日本語も第一言語だが、日本語の方が得意	13 (48%)
④	日本語が第一言語で、手話が第二言語	8 (30%)
⑤	日本語のみが第一言語	2 (7%)

コーダの多くは手話に関わりながら生きています。

手話以外のコミュニケーション方法として口話や文字などをその場にに応じて、使い分けてコミュニケーションをとっていることもわかっています。

枠の右側の数字ですが、27名のコーダに聞いたものです。

- ① 手話が第一言語で、日本語が第二言語
- ② 手話も日本語も第一言語だが、手話の方が得意
- ③ 手話も日本語も第一言語だが、日本語の方が得意
- ④ 日本語が第一言語で、手話が第二言語
- ⑤ 日本語のみが第一言語

⑤だけが手話を使わないコーダで、①～④までは何らかの形で手話に関わっています。

今日伝えたいことの1つですが、きこえない・きこえにくい子どもがコーダの親になることを見通す、その視点を今日は提示したいと思います。療育、教育の今を集中的に見ると、そこまで視点はいかないと思いますが、その後の社会生活の方が長いので、そこを見通して、「こめっこ」の活動の意義を振り返りたいと思います。

約20年先になりますが、今「こめっこ」にいる子どもたち、もちろん全員ではありませんが、きこえない、きこえにくい子どもたちは親になる可能性があります。生き方はさまざまなので、必ず親になる必要はありませんが、可能性としては親になる。きこえない、きこえにくい親から生まれる子の90%はきこえる子どもなので、コーダが生まれる可能性が高いです。

スライド4

今「こめっこ」に通っている子が将来的にはコーダの親になる可能性があるということです。約20年先のそのときに、今「こめっこ」に通っている子どもたちの家庭内でのコミュニケーションをどうするか。それが今日の視点です。手話があるとき、ないときでは、どんなことが想定できるのか。

まず手話がないことを想定した場合。

家庭では基本的に複数での会話になるシーンが多いです。子どもの数や場面によっては1対1になることもありますが、2～3人の複数で会話することが多い。

それを考えると、軽度・中等度の難聴、もしくは、人工内耳を装用して聴覚活用をしている人を含め、きこえに

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

- 約20年先、今の聞こえない・聞こえにくい子どもたちは親になる可能性がある。
- 聞こえない・聞こえにくい親から生まれる子の約90%はコーダ。

The Deaf Population of the United States (Schein J, & Deik, 1974)

- 約20年先、家庭内の共通言語とコミュニケーションはどうするか？
- 手話がある/ない場合にどんなことが想定されるか？

スライド5

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

- 家庭では、複数での会話になることも多い。
- 軽度/中等度難聴者と人工内耳装用者も含め、聞こえない・聞こえにくい人は、①②が苦手。
 - ① 静かではない場所での音声日本語会話
 - ② 複数での音声日本語会話
- 聞こえない・聞こえにくい親が音声日本語のみの使用者の場合、「ディナーテーブル症候群」を体験する。
 - (Listman & Kurz, 2020)
 - ⇒ 親だけが家族の会話についていけない。
 - ⇒ 「偶発的学習機会」や「偶発的利得」をのがす。

(Echert & Rowley, 2013)

くさがあれば、①と②は苦手になります。

①は静かではない場所での音声日本語会話。もし手話がなく、音声日本語だけの会話だと、家庭できこえるコードがいる、例えばテレビがついていたり、今だとYouTubeが流れて音声があるような静かではない状況での会話は苦手。

②複数での会話。これもコードが2人いるとか、きこえる祖父母や友だちが来ているなど、複数になることが多いです。そのときの音声日本語会話も得意なものではない。

そうなったとき、きこえない・きこえにくい親、「こめっこ」のような年代の子が、手話がなく、将来音声日本語のみでそういう家庭場面を生きたとしたら、ディナーテーブル症候群を体験します。これは、音声日本語のみの環境では食卓を囲む中できこえない・きこえにくい子どもが情報が漏れていく、結果的に自分が心理的に疲れ、ストレスが溜まるという現象です。もし手話がない状態なら、どれだけ聴覚を活用しても、静かではない、複数という条件では、親だけが会話についていけない可能性があります。

元々、ろうの子どもについて言われていることですが、偶発的学習機会が失われます。偶発的なので、きこえる子どもたちが、親が音声日本語で会話をしているとき、今だと、新型NISAなどの言葉、それを子どもがきいている。そのとき意味がわからなくても、後々、親が話していたのはこれだなと気づくという機会。

これを、音声日本語会話だけだと、ろうの親が子ども同士の会話をきき漏らすということで似たような状況になります。

偶発的利得の意味の説明は省きますが、似たような意味です。

親もコードも手話ができた場合を想定します。静かではない場所、テレビがついていても、YouTubeの音声も流れていても、会話は手話でできます。

複数でテーブルを囲むときも、家庭内で手話を使うことが決まっていれば、複数での会話にしっかり参加できます。この状態なら、親だけが家族の会話についていけない状況、ディナーテーブル症候群を避けることができます。その結果、疎外感、心理的ストレスを低減できます。

「偶発的利得」とありますが、他者が会話しているものの中に手話での会話があれば、ろうの親もコードの子どもたちが話している内容を把握できるので、コードの様子を把握できる。すると親としての意識的な言動を取

スライド6

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコードの親になることを見通す

- ・親もコードも手話ができれば、**静かではない場所、複数での会話でも参加できる。**
 - 親だけが家族の会話についていけない状況（＝ディナーテーブル症候群）を避けることができる。
➔ 疎外感・心理的ストレスが低減される。
 - 「偶発的学習機会」や「偶発的利得」を得る。
➔ コードの様子や考えを把握できるため、親としての意識的な言動が取りやすい。親の役割を担いやすい。

りやすい。

子どもが何を考えているかわかるので、教育的なことや注意、アドバイスも言えます。それで、親の役割を、きこえない・きこえにくい親がとりやすくなります。

しかし、1つ課題もあります。今、コーダの研究がたくさんありますが、手話を使う親であっても、コーダに手話を教えようとしなないケースもあることがわかっています。

「こめっこ」に関わっている子たちは、手話を身に着けながら聴覚も活用しているという報告をきいています。そのような子たちが親になってコーダが生まれたときに、手話を教えないうようなケースも過去にはあることがわかっています。

それは、親自身がコーダはきこえているから、手話を身につける必要はないと考えているからです。これを避けるように、コーダにも手話を継承する考えが必要だと思えます。

2つめです。ベトナム人、ラオス人、カンボジア人、ブラジル人、日系ではないスペイン語系の南米出身者たち、中国人の調査を見ると、親の言語を子どもが使っていない場合は、親子の意思疎通に難しさが出て、コミュニケーションが十分取れないケースが、他の言語的マイノリティの例からわかります。

コーダの場合も、親が手話をしっかり使っていれば、子どもにも、家庭内で共通の言語として手話を位置づけ、十分にコミュニケーションがとれる状態を作っていける。つまり親の言語を子どもが身につけることが重要です。

関心がある人は、「継承語」で検索すると、このあたりの重要性に関する文献が読めます。

きこえない・きこえにくい子どもが

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

・親もコーダも手話ができれば

➡ 言語的マイノリティの研究では、子は親への言語通訳について（過度でなければ）誇りに思うことがわかっている。（Orellana et al., 2003）

➡ 言語通訳者だけではなく、文化仲介者としての機能がある。（角, 2023）

*ただし、特にコーダが小さい頃から過度な通訳を求めてはいけない。親子関係に悪影響を及ぼすことがわかっている。

詳細は、中津（2023）を参照。

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

・ただし、手話を使う親であってもコーダに手話を教えようとしなないケースもある。（澁谷, 2007）（中島, 2019）

➡ 親自身が「コーダは聞こえる。手話を身につける必要はない。」と考えてしまうことが原因。

➡ ベトナム人、ラオス人、カンボジア人、ブラジル人、日系ではないスペイン語系の南米出身者たち、中国人においては、親と子との意思疎通にむずかしさがあるケースが報告されている。

（川上, 2005）（中井, 2005）（田中, 2005）（森島, 2005）（栗, 2005）

➡ 親の言語を子どもが身につけることが重要

（＝継承語）。詳しくは（安東, 2022）（中井, 2021）を参照。

4. コーダの視点から

● 聞こえない・聞こえにくい子どもたちが手話を習得していくことは、**約20年先**を見通した時にも重要。

① 手話は、親がコーダとのコミュニケーションを十分に取るために有効。

✓ 音声日本語だけでは、親子関係を深めることが難しい。

「ディナーテーブル症候群」の問題

偶発的学習機会 / 偶発的利得の喪失。

手話を習得することは、「こめっこ」が推進していることですが、それは今だけでなく、コーダの親になる、約 20 年先においても、重要だと言いたいのです。

重要だと思うことを 2 つ考えました。

1 つは、手話は、親がコーダとコミュニケーションを取るために有効。

どれだけ聴覚を活用しても、複数で

の会話や静かでないところでの会話場面は家庭の中で起きます。そこでは、音声言語だけで、しっかりコミュニケーションを取ることは難しく、結果的に親がディナーテーブル症候群になって、心理的なストレスを受けます。それを避けるべきです。コーダも手話を使えば、親は子の日常生活を偶発的に学ぶこともあり、そこで親の役割を果たせます。それが重要です。

2 つめの観点は、手話はコーダが、親とのコミュニケーションを十分にするためにも有効だと言う点です。これはコーダの遠藤さんが書いています。コーダが親と喧嘩ができることが重要とおっしゃっています。読み上げます。

「感情的になった時こそ手話が重要になります。目の前にいる「伝えたい！知りたい！」と思ひあう相手と伝え合う術がないのは悲しすぎます。それが親子であるなら猶更です」と言われています。

コーダが親と喧嘩ができるレベル、しっかりと感情を吐き出せていますし、親も子の感情をつかめる。それが音声日本語のみだと効果的にこなえませんが、手話がお互いになれば、コミュニケーションが十分にはかれ、感情的なやりとりができるという重要性を、コーダ当事者の遠藤さんの指摘からもわかります。

その意味では、これまでの報告でたくさん学びがありました。酒井先生の報告から、レイトサイナーであっても、同じような脳の部位を使って言語獲得を進められるというのを見せていただきました。もし、「こめっこ」に通えていないような、手話となかなか出会うことがなかったろう難聴の子どもたちも、大人になってコーダが生まれ、コミュニケーションをとりたいと思えば、そのときから手話を学ぶ意義はありますし、その意味では、手話を遅くても獲得できるというというのは、良いデータを出していただけたと思います。

一方、喧嘩の例のように、感情面までしっかりコミュニケーションをとろうとすると、きこえない・きこえにくい子どもで、小さい頃に手話に接することができるなら、積極的にそこをつかむ。レイトサイナー、レイトラーナーであっても獲得はできるが、幼少期から手話を第一言語として、思考できる言語を学ぶチャ

4. コーダの視点から

②手話は、コーダが親とのコミュニケーションを十分にするためにも有効。

- ✓ コーダが親とケンカができる。(遠藤, 2020 : 141)
- 感情的になった時こそ手話が重要になります。
目の前にいる「伝えたい！知りたい！」と思ひあう相手と伝え合う術がないのは悲しすぎます。
それが親子であるなら猶更です。

* [SODA : Sibling of Deaf Adults / Children] の論点も。
「聞こえない兄弟をもつ、聞こえるきょうだい」にとっても手話は大事。

ンスを逃さないようにしてもらえたら、20年後のコーダの視点からしても、家族のコミュニケーションの視点からも重要と考えます。

後は参考文献です。以上です。

【ディスカッション】

河崎／はじめに、指定討論の先生方のお話を受けて、話題提供して下さった先生方から、加えて伝えたいところがあれば、お話しただけたらと思います。特にないようでしたら、質問をいただいていますので、それに沿って議論を進めます。

最初の質問は、「日本手話文法テストというのは、どのようなものなのでしょう？それは子どものみが受けられるもので、成人聴者などの第二言語として手話を勉強する人には適用できないものなのでしょうか？」というものです。このテストについて初めて聞かれた方も多と思いますので、武居先生から説明をお願いします。

武居／日本手話文法理解テストは、元はイギリスで作られたイギリス手話のテスト「Receptive Skills Test」がありまして、それが世界中の手話で翻訳され、その中の日本手話版を私が博報児童教育振興会の助成で今から十数年前に、私が作成しました。そんなに難しくないので、小学校4年生くらいで、天井効果になるほどの簡単なものです。

詳しくは説明しきれませんが、手話動画、非常に短い文を手話にしたものを見てもらい、あてはまるものを3～4つの絵から選ぶ問題が47問あります。

ろう学校にはすべて送付されています。このテストは、売っていませんので、教育機関のろう学校や難聴学級や放課後デイなどで、ほしいという人は、子どもに関わる仕事の人には無償でお分けしますが、一般の人には配布できません。そういう意味では、お渡しできません。

ここでの質問は、手話を学んでいる成人の人も使えますか？ということですが、使えないことはないですが、簡単すぎますし、成人の場合は、いろいろな類推機能が働いてしまいます。ですから、たぶん手話の力ではなく想像力や類推力を評価するテストになってしまうので、あまり適さないと思います。

河崎／こめっこでは、「べびこめ」で手話の学習を始められる両親を対象に年に1度、このテストを受けてもらっています。武居先生が言われたように手話言語文法力のみを測れるかどうかはわかりませんが、一つの動機づけ、モチベーションを高めるために、楽しんで受けていただいています。それで、やっぱり伸びていけます。

次に酒井先生へいただいたお2人からの質問をあわせて取り上げます。

「酒井先生、貴重なデータをありがとうございました。臨界期仮説についてですが、母語に関してはどう考えたら良いでしょうか？」ご質問の意図は、「母語獲

得のために手話や音声を幼少期から曝露しているわけなのでそこをどう考えればよいのか」というものです。この質問に絡んでくると思いますが、「酒井先生の第二・第三言語獲得に関する研究発表では、手話は大人になってからでも十分獲得できる。音声言語の獲得は文字や文法からではなく、音声による自然な入力が必要だとわかったと言われました。この二つの結果は、つまり、きこえない子どもには乳幼児期にしっかり音を入れて自然に日本語の獲得を進めること、手話は大人になってから十分獲得できる、というこれまでの聴覚口話法の重要性を支持する結果のように思われるのですが、「こめっこ」が進めておられる研究とは矛盾していませんか？」という問いかけです。これについて酒井先生からお話してください。

酒井／最初の質問ですが、コーダの話にもありましたが、母語と第二言語に一線を引くことは不可能です。母語が1つしかない人から見ると、そこに大きな見えない壁があると思われがちですが、実際、脳のメカニズムからすれば、まったく同じだというのが結論で、先ほどそれが第三・第四言語でも脳では一切違いはないのです。むしろその効果が蓄積することは、共通のメカニズムがあることを支持しています。

つまり、我々が新しい言語に触れたときに、ゼロから習得を始めるのではないです。当然、母語の影響を強く受けますし、第二・第三言語で培った様々な共通性や相違点も関係するでしょう。例えば、主語・目的語・動詞という語順が日本語と日本手話だと同じでも、英語や中国語は違うわけですが、それは表面的な違いなのです。それをさらに深めて考えると、人間の言語はすべて木構造という構造で支えられていることは同じです。これは理論的な研究で進められてきました。それを裏付ける脳科学のデータを蓄積していて、実際、木構造を形成している際も、脳活動やその木構造が深くなったときに、脳の特定の文法中枢では脳活動自体が変化していくという証拠があります。

脳としては、1番め、2番め、3番めという言語をまったく区別してないので、母語の獲得であろうと、第二言語であろうと、脳の中の中枢の中の中枢では、あらかじめ我々の脳に組み込まれている言語のメカニズムによって行われます。ですので、はっきりした区別はないですし、大人になってその能力が失われることもないのです。

はっきりした理論的な基盤については、ノーム・チョムスキーというアメリカの言語学者の生成文法理論というものがあるので、興味のある方はそちらを参照してください。

ただし、勉強というのは別で、いくらでも無理して、人工的な方法で学習できます。そうやって、三人称単数や現在とか、無理やり英語の文法を覚えられるの

で、語学については、個人差つまり、勉強したかどうかで現れやすいと勘違いされています。本当の文法機能は人間が規則を作り、学習機能として昔の偉い人が定めて、みんなそれを学んで身に付けるというのではなく、本来赤ちゃんが環境から音の法則、手話の法則として構造的に習得できるものと考えていただきたい。見えない線というのは、間違っただけを勉強として課すことで作られてしまったのであり、つまり環境が原因だったという可能性です。

ですから、臨界期を議論するとき、環境が激変して、学習環境にさらされているという因子は今までまったく議論されてきていません。そういう意味では、学習環境と無縁な環境で言語の自然な音声に親しめる環境があれば、ヨーロッパやアフリカ、アジアで見られるように、多言語に対して全くバリアがないと考えていただきたい。ただ勉強となると個人差が現れたり、自分は語学に向いていないんじゃないかという無用の心配がバリアになります。

もう1つ重要な論点なので補足しますと、脳の神経回路は子どものうちから劇的に発達することは確かです。脳科学で臨界期仮説が出てきましたが、それは主に感覚野に関するものです。視覚・聴覚入力がないときに脳の神経回路がはたして正常にできていくのかという疑問に対し、縦縞だけを見せたネコの場合、横縞に反応しなくなるという動物実験があったのですが、それをもとに外挿したのにすぎないのです。しかし中枢に関してはそうした変化を裏付ける証拠はありません。

さっきの感覚遮断の実験については、完全に目を閉じた状態で幼少期を過ごした猫の実験の場合、神経回路は正常と同じように形成されることが70年代から確かめられています。それはなぜかという点、脳は自発的にノイズの形で発火を繰り返しているからです。それが神経の回路を作るときにうまく働いて、きちんと右目、左目という領域が分かれてできます。ですから、人工的な方法で、強制的に学習をすとか、もしくはそこに大きな制約があり、いつまでに言語を学習しなければいけないと考える必要はないのです。脳はそれ自体、自発的に構造を作ることができるので、そうした研究がなされないといけません。仮説だけが先立って、人間の成長を止める学説は好ましくないと思っています。

2つめの質問も、言語全体に関係しますが、例えば母語の日本語をしっかりと身に付けて、考える力を身に付けてから英語を学ぶべきだとか、そういう英語や国語の先生がいると思います。それは、先程の私の話とは矛盾しており、習得に順序は関係ないのです。

コードの方のように、完璧なバイリンガルの場合は、どちらの言語が先なのかは関係ないわけです。最初から3つ、4つの言語を身に付ける人もいます。その人が特別な才能、素質に恵まれた結果ではなく、誰でもそのような環境にいれば、複数の言語を身に付けられます。実際、日本において、複数の方言のある環境に

において、相当語彙や音声や文が違ふような場合、例えばお父さんが関西で、お母さんが東北出身、祖父母が違った地方の出身であっても、その中ですべての正確な発音を含め、子どもは身に付けることが可能です。そのように考えていただき、だから自然に習得するのは、音からであって、文字をもとにした学習によって生じるのではないと考えられます。

ただ、聴覚口話法の論点のどこが問題かという、すべてのろう児に対して一般的にあてはめてしまおうというところでは、

例えば補聴器や人工内耳によって日本語の習得可能な子どもが後から手話を覚えるのは問題なく可能でしょう。それによって、他の獲得の過程の可能性を排除してしまうことが問題です。逆に難聴で人工内耳を使っても音声は訓練になってしまい、自然に習得できない子どもが苦も無く手話から言語を十全に身に付けることができるなら、後から音を入れることも可能かもしれません。音声ありきという順番に固執して、手話を最初に獲得する母語として選択するオプションを排除してはいけません。

ですから、どの言語でも、いつから始めても良いということは、その子どもや環境にとって一番自然な選択肢を選ぶということであり、そのうえで生活スタイル、社会的要請や文化的な背景で言語を増やすことを考えればよいのです。最初が日本語でなければならぬと声高に言う必要はありません。言語はすべて等しく、我々に与えられる能力です。その子どもに何らかの制約があっても、その中から最も良い選択肢を選んでいく。そのために、保護者や周りの大人が必要なサービスを提供することが本来の姿であり、一律、うちの学校に入ったら日本語から始めなければいけないと、決めることは問題であるをご理解ください。

「こめっこ」も手話のサービスを提供することがミッションですし、コーダの子どもが入ってくれば、一緒に手話を学ぶことに何ら制約はありません。親も子どもと一緒に手話を身に付け、子どもとの対話を図ることが一番理想的な姿だと思います。

長くなりましたが、誤解を解くにはそういう議論をきちんとすることが大切です。ご理解いただければと思います。

河崎／ありがとうございます。私たち「こめっこ」の活動している姿が、酒井先生が話しておられる自然な形なんだと、お聞きして改めて思いました。この件について、他のパネリストの皆さん、何かご意見はありますか？

中島／今の話の中から、言語の基盤が広く一致している。言語を1つ、2つと区切って考えるのではなく、私のいる領域でも複言語として言語の総体として個別的に数えないことは、よく理解できます。

ろう、難聴のきこえない・きこえにくい子どもが生まれてから、情報の入力がどうなっていくか考えたとき、きこえる子どもたちと全く一緒ではない面もあると思います。1歳以上になって、人工内耳の手術が可能になります。そこまでの入力、重度難聴ならなかなか音声が入らない時期に、松崎先生の発表でもありましたが、視覚機能が強化されるので、そちらを優先的に使用し、言語資源、言語の素材をどんどん入力する面では、手話を早めに入力する有用性はあると考えています。

河崎／ありがとうございます。大切な質問をいただいたと思います。以前のシンポジウムのキーワードとして、「セーフティネット」が話題になったことを思い出しました。

新生児スクリーニング検査の結果、「きこえないかもしれない」可能性の中で確定診断を待つ期間、確定診断後に人工内耳手術を待つ間でも、「こめっこ」のような場所で手話言語に出会い触れ合って言語獲得を始めることは、たとえ、きこえるとわかったり、人工内耳で聴覚が使えるようになったとしても、何の損にもならない。むしろ、親子関係を培うことも含めて得策ではないか。セーフティネットという意味からも手話言語獲得支援の場を大切にしたいという話になったことを思い出します。

酒井先生はいつも、言語にきちんと出会い、関われる場があれば、赤ちゃんはその言語を自然習得する、その獲得環境を保証することが大切と言われています。そこは、酒井先生、同じですよ。その上で、第二・第三言語についても、今回こういうことがわかったと言ってくださったと思います。

ろうスタッフを見ていると、日本手話を獲得しているスタッフは、アメリカ手話やフランス手話に出会ったときに習得する強みを感じます。その意味で、映像言語であれ音声言語であれ、母語として確実に持てるということが、第二、第三言語の習得にも大切だと活動の中で思っています。そこを酒井先生がお伝えくださったと受け止めています。

違っていることがあれば、酒井先生、お教えてください。

酒井／河崎先生が言われたとおりで、誤解なく、伝えてほしいと思います。

大切なのは子どものときに、言語環境を整えることであり、その意義は、制限なく言葉の刺激を与えることです。プラトンの時代から「刺激の貧困」と言われるように、子どもたちは、非常に少ない刺激なのに、しかも言葉のバリエーションがありながらも、正確に個別の言語にうまくチューニングして身に付けられるのはなぜなのかという、永遠の大きな問題があります。

それは、刺激が貧困でもよいということではなく、いかに貧困にしないかがポ

イントです。周りに日本語があっても、手話を入れることで、なんら阻害するものではありません。「より貧困にしない」ということですから、さらに手話をいれても問題はありません。大人の観点からすると、「複数あれば、子どもが混乱するとか、かえって負荷が高いのでは」などと決めつけ、1つの言語の方がわかりやすいといって、オプションを削ってしまう。これが大人の発想で、それは子どもにとっては制限を与えるだけです。

できる限り言語環境を整えること。さきほど、セーフティネットの話がありました。多くて困ることはないんです。手話の環境をできる限り、自然に整えることを、全国的にも大阪府の取り組みを広げて行ってほしいです。あとから手話でよい、という発想で削ってはいけません。手話も含めて、可能な言語刺激を子どもたちに提供するという考えを認識してほしいと思います。

河崎／手話はあとからで良いと言われてきた長いろう教育におけるひとつの形を、酒井先生がそれでよいと言われたのでは決してありません。もし、誤解があれば、ここでしっかりと解いておきたいと思いました。

次の質問です。「様々な分野の発達のために、手話言語習得が有用であることがよくわかりました。このことについて、難聴児が通学する可能性のある普通学校や特別支援学級の先生たちは、理解されているのでしょうか？また普通学校、や特別支援学級の先生方との連携はどのようにされているのか、教えてください」というものです。

これには、「こめっこ」の中で連携や家族支援を中心に行っていて、ろう学校のスクールカウンセラーでもある中尾先生からお答えください。

中尾／大阪府で難聴児が通学する可能性のある地域の学校や特別支援学級の理解ですが、府内の小中学校で難聴児支援をする先生を対象とした講座を毎年開催しています。そこで「こめっこ」スタッフが講師として、わかる環境の大切さや手話の大事さも含めてお伝えしています。

実際、地域の学校からろう学校へつながるケースを支援したケースもあります。このときは、NPO「こめっこ」の中にある「ひだまり・MOE」のスタッフが、実際に地域の小中学校へ訪問し、そこで先生方と連携しながら聴覚支援学校への転校を応援しました。

もちろん、聴覚支援学校との連携も「こめっこ」では大切にしており、保護者の希望によって、必ずご承諾もいただいたうえで連携を進めています。

河崎／中尾先生の話の流れで扱いたいと思うのですが、「こめっこ」でのコーダの位置づけ、支援の仕方についての質問がありました。中島先生の指定討論の内

容に関連し、「こめっこ」としてお答えすることがあると思いますが、いかがでしょうか。中尾先生お願いします。

中尾／今回の「こめっこ」からの事例報告では、たまたまきこえる親ときこえない子というご家族の事例でしたが、中島先生のお話にあったろうの親とコーダの子というご家族も、最近「こめっこ」に来られることが増えています。もちろん、コーダさんも0歳から「こめっこ」活動に参加してもらえます。

実際に参加しているろうの親を見ると、「日本手話で育ちました」という人が少ないというか、ほとんどいらっしゃいません。子どもが生まれたことをきっかけに、一緒に「べびこめ」に通い始め、そこで、ろうの両親が手話に目覚め、親子でいきいきと手話でのコミュニケーションを楽しんでいるご家族がたくさん参加しています。

こめっこ参加者全体の中でろうの親とコーダの子というご家族が増えている中で、今日、中島先生のお話を伺い、「こめっこ」という場が、将来コーダの親になる可能性のあるろう児さんと、今コーダとして生まれてきた子どもさん、どちらも応援できる場になっていると感じました。先生の話をお伺いしてよかったです。

河崎／参加してくださっているろうの保護者は、今日のお話ですごく喜ばれていると思います。きこえない子どもを支援している場なので、きこえる自分の子を連れて行くのは違うのじゃないかと考えられる、コーダの親御さんもおられます。でも、「こめっこ」に来ることによって、コーダである我が子が日本手話を獲得する支援の場として、そこで子ども同士のやりとりが活性していくところを見られています。中島先生のお話は、「こめっこ」活動の応援にもなる貴重な話だったと思います。

次の質問は、「こめっこ」に来られている保護者からだと思います。「下の娘が重度難聴です。きこえるお兄ちゃんがあります。上のお兄ちゃんはソーダ(SODA)になりますが、ソーダになるお兄ちゃんに対してはどういったことを意識して親として取り組んでいくのが良いのでしょうか」という質問です。

各先生からご発言いただきたいのですが、まずは中島先生からお願いします。

中島／今日の私の話はコーダについてでした。質問はソーダということで、重度難聴の娘さん、そのきょうだい(siblings)はソーダ(SODA)と呼ばれています。

私は専門ではありませんが、広くはきょうだいの研究は盛んになってきています。ひとつ言えるのは、ソーダ、きょうだいという立場の方が、親からしっかり見てもらえないという感覚を得てきたということが言われています。重度難聴のお子さんがあるとき、親がそちらにたくさん目がいくという中で、大きな

った当事者の方が、もちろん愛情がない訳ではないですが、私にも家族としてのストーリーが欲しかった、より長い時間一緒に過ごしてほしいなどの思いがあったと、きょうだい研究からはいわれています。

そういう点からみても、重度難聴の娘さんが手話が使えれば家族でやりとりができますし、保護者の方がこの娘さん、重度難聴の方と手話でやりとりするときに、ソーダも偶発的学習機会として情報を得られるためには、ソーダが手話を使っていくのはコミュニケーションの面で重要だと思います。

その意味でも、「こめっこ」にコーダが来ることで、コーダも手話を学ぶことの意義があるのと同じように、ソーダもここに来てもらって、手話を学ぶことが大事だと思います。

「ソーダの会」がネットなどで調べてもらうとあります。藤木さんや丸田さんというソーダ当事者が研究もされていて、論文も読めます。そこから情報をとるのも、良いと思います。

河崎／他の先生方から、この話題について、ご発言や気づきなど、ありますか？

武居／ソーダ、きょうだいの話題が出ましたが、私の研究室に来ている学生で、きょうだいに、きこえない人がいる人がいます。手話が堪能です。「堪能」というより、表現はそれほどではないのですが、理解が非常に高い。大人が手話で話していることへの理解はできる、だけど、本人は手話に自信がない。そういう人がコーダにもソーダにも多い気がします。

表出する手話単語が少なくても、手話ができないのではなく、理解している部分はたくさんあります。機会があれば、理解しているものから表出が出てくるようになります。表出数だけで手話力を評価せず、長い目で見守ると、私たちが思っている以上に実は手話力があると出てきます。そのような視点も大切にされたら良いと思います。

たくさん手話に触れていると、その手話をいつのまにか覚え、見たことがあるという経験、それも偶発的経験かもしれませんが、それをコーダ、ソーダに提供することも大切だと思いました。

河崎／きこえる子どもたちに接している、ろうスタッフとして、久保沢さん、きこえる子どもたちと遊んで支援する中で気づいたり、思うことなどを話してください。

久保沢／基本的に小学生を対象にした「もあこめ」を担当しています。半分くらいは、コーダ、ソーダです。子どもたちは、きこえる、きこえない関係なく一緒

に活動しています。

スタッフも子どもと会話をするとき、きこえる子だから音声で話さなければというのではなく、手話で話します。子どもたちは、読み取りもできていますね。わからないときはきこえるスタッフが軽くアシストするようにしています。きこえる子どもたちにも、安心して集える場所、環境をめざしています。

小学生は、ろうの子ども、聴の子どもそれぞれ別になる時間をとって、きこえる子どもたちの中にろうのスタッフが入り、楽しく手話を学ぶ時間も作っています。

そこで手話の読み取りの力が高まっていますので、武居先生が言われたように、自信のない子どももいますが、私から見ると十分で、さらに成長していると感じています。

「もあこめ」だけでなく、0～3歳の「べびこめ」、3～6歳の「こめっこ」でもきょうだいの参加が少しずつ増えています。

みんなで手話を使って楽しめる場所になればと思います。

河崎／「べびこめ」からソーダを迎えると、これまでとは違って堂々たる手話話者になってくると伝えてもらいました。

思い出すのは、7年前に「こめっこ」が始まった当初、ソーダの子どもが意外なほど「こめっこ」が好きで楽しんでくれる様子を見ました。その子たちは手話に接したことがなく、手話はできない。にもかかわらず、イキイキしている様子を見て、なぜだろうかと思いました。それは、「こめっこ」に来たら、きこえないきょうだいを放っておいてもよい。いつもどこでも、自分がきこえないきょうだいのケアをしないといけないと思っている。おそらく親御さんも同様だったと思います。でも、「こめっこ」にくると、きこえない子どもたちが言語としての手話を使って、そこでイキイキしているので、きこえるきょうだいは自分のことに集中して思いっきり遊べる。だから楽しいんだな、と教えてもらった経験があります。

今は、気づけば、きこえない子どもたちと一緒に「手話ぱんぱん」をしているソーダがいます。そんな状況が自然になってきました。最近、どの子がきこえるのかわからないくらいの「べびこめ」「こめっこ」活動になっています。そんな環境で育つソーダたちのこれからの成長ぶりを、研究としても見ていけば、新しいことが言えるかもしれないと思います。ソーダにも手話言語力に関する調査に参加してもらうので、そういう報告もできるかなと思いました。

次は、手話の絵本よみについての質問です。「絵本のテキストにはない説明を入れながら読んだり、登場人物や内容をあらかじめ説明してから読み始めるなど、工夫をされていますか？」という質問です。これについては、今日は登壇さ

れていない物井理事に答えてもらうといいかなとも思いますが、ここでは久保沢さんから答えてもらいます。

久保沢／絵本よみの際、基本的には説明を加えたり、登場人物等の説明を最初にはしません。絵本を見せながら、すぐに話し始めます。

けれども、そのようにしているとき、子どもたちはよく見ているので、「この絵は何？」と聞いてくることもあり、それについて答えたりコミュニケーションをする中で、話が膨らむこともあります。その話が終われば、また絵本に戻ります。

絵本は日本語で書いてありますが、そのまま読むのではなく、最初に読み手がストーリーを十分に理解し、それを手話にして話をするという形で行っています。

河崎／聴覚口話法のみで手話を遠ざけていた時代は、絵本を読むときも、日本語の単語の意味を伝えたり、あらかじめ勉強した上で絵本を読まないで、内容についてこれない、そういう感覚がありました。

でも、私が「こめっこ」の活動を見ていると、きこえる人が日本語で読みきかせることを日本手話でやっている、その中で自然に生まれる子どもとの会話がある。違う方向に話が行って、さまざま展開して、また元に戻るなど、流れの中で自然体で初めてのページをめくるといった体験がそこにあると感じています。それを久保沢さんが話してくれました。

次の質問ですが、これは要望かもしれませんね。「ろう児どうしのコミュニケーションスキル、子ども同士のコミュニケーションの能力、親から見た「こめっこ」育ちの子どもたちの成長ぶり、そういうことも、調査してもらえないか」という意見です。まさしくそれをしたいと思って、今、聞き取りなどデータを積み上げていますので、いずれまたまとめてお話できればと思います。

ここで先生方、このことは伝えておこうという、お話いただくことはありますか？

松崎／今、皆さんの話を聞いて私が考えたことを話します。

河崎先生からの話がありました、以前のディスカッションで「セーフティネット」という言葉が出ていました。私も重要なことだと思います。ぜひ、いろいろなところで取り入れていただきたいです。酒井先生からのお話がありました、刺激が重要であるということについても、共感しました。手話を獲得できる環境、手話をたくさん見ることができるといった経験が本当に大切で、増やしていくと良いと思います。特に、その「刺激」とは、子ども一人ひとりにとって確かにそのような

「刺激」であることが重要になり、そのために手話を獲得できる環境からとりこぼされる子ども(例えば、ろう重複児)は、環境だけでなくその子どもに合わせた「刺激」をコミュニケーションの中で見出す視点が欠かせないと改めて思いました。この点は親御さんにとっても我が子と通じ合えた！と思えるためにも大事でしょう。

さきほど、私からの話題提供の際に、「セーフティネット」の構造的な問題と考えると、私は個別・具体的な問題として整理をしました。セーフティネットは構造的、私は個別具体的なことを話したと思います。親御さんの中には、家で子どもが何に興味を持っているかわからない、どのようにコミュニケーションを取ればよいかかわからない。さらに別の障がい重複していると、どうしてよいかかわからないと、親から子に提供すべき刺激が何かかわからず非常に悩んでいる人がいます。そのときに個別問題として、どのようなコミュニケーション・工夫が必要かをさらに考える必要があるということです。

ろう学校の幼稚部の先生を対象に話すとき、今日のような話を以前したことがあります。そのときの参加者からは、松崎先生は、子どもとコミュニケーションを取るときに、子どもの行動を仔細に見る目があるからそのようにできるのではという話でしたが、「そこまで見なくてはいけませんか？」と聞かれることがあります。それに関しては、酒井先生の話の中にある、自然獲得をしていく経過の中では、例えば家庭の中では、常に万全にコミュニケーションが取れるわけではありません。もちろん「通じた」という経験もある。また、家庭によってはうまく刺激が提供できない、何に興味を持っているのかわからない、通じあえる経験ができない、という困難を抱え、挫折を感じ、コミュニケーション不全を重く受け止めるご家庭もあります。そのような家庭にどのような支援をするのか、どのようにコミュニケーションを作れば良いのか、私の発表で話したように専門性のある観察を通して、支援することが必要だと思えます。乳幼児の先生から、そこまで仔細な観察が常に必要かと聞かれると、専門家としては必要だと思っていますが、まだその理解が進んでいないと思っています。これについては、さらに研究と実践を深めて発信していかなければと考えています。

河崎／ありがとうございました。中島先生、元ろう学校の先生として、「こめっこ」を見て感じられたこと、今日のディスカッションの中で元ろう学校の先生として、特に思春期・青年期を知っておられる立場として感じられたことをコメントいただければ。

中島／私は中学部や高等部で働いていました。「こめっこ」のように小さい頃からどんどん手話で言語入力を得ていた子どもたちが多くない時代もありまし

た。その中で、それでも子どもたちは高等部を卒業して、大学に入ったときには、手話により情報保障を得ます。音声日本語だけに頼ると自分の学習が大学レベルだとうまくいかないことに気づいて、手話での情報保障を求めたり、ときには、手話ができる隣の学生にフォローしてもらうとか、「実は私はコーダだった」という学生がたまたまいて、フォローしてもらうなど、手話を活用しながら、自分なりの情報保障をしていることがありました。

それは良いと思っていましたが、時代が進んで、言語としてしっかり手話を入力した子どもがさらに大きくなり、大学に行ったときに、「こめっこ」に通っている子たち、さらにコーダやソーダたちも、言語としてきちんと入力された手話を身に付けた子どもたちがあちこちにいるようになれば、大学生になったろうの子どもたちもさらに質の良い学習ができると思います。まだまだ年月はかかるとは思いますが、その土台を「こめっこ」でやっているんだなと思って見えています。

河崎／最近の活動の中で、小学校5年生の子が「私たち小学校を卒業したら、次はどうなるの？ こめっこに来れないの？」という発言がろうスタッフに向けてあったそうです。その言葉をききながら、「こめっこ」が大事な場所として根付いている、これをどう育てるか、親御さんとも相談しないといけないなと思いました。大事な視点をいただいたと思います。

話題提供の先生からも、ひと言ずついただけたらと思います。武居先生からお願いします。

武居／私が今日考えさせられたのは、きこえない子どもたちにとって、手話がどうして必要なのかといったときに、理由は1つではないと思います。その中で、親子のコミュニケーションのこともあるし、もしかしたら、日本語を今後学ぶときの基盤になることもあるかもしれない。でも中島先生の報告で、このあと、成人した後、我が子とコミュニケーションするときにも手話がものすごく力を発揮するというかなり長期的な視点もいただきました。

手話がきこえない子にとって、今後生きていく上で大きな武器になると痛感させられるシンポジウムになりました。

酒井／子どもの環境は危機にさらされています。スマホで SNS や動画漬けになっていたり、親もずっとスマホを見ていたりするため、音声のコミュニケーションすら刺激が貧困になろうとしています。それにトドメをさすのが生成 AI で、対話はコンピュータで代用できるということに強い危機感をもって、徹底的に反対しています。ぜひ、自然な言葉を使って、対話を第一に考えることが大事だと再認識していただきたいと思います。

中尾／個人的には事例報告にあたって、今までのデータを詳細に見つめる時間をいただいたり、改めて親と話をする時間ももらったりして、みんなの成長にびっくりし、うれしく思いました。

今日、先生方の話の中で、今の「べびこめ」「こめっこ」の活動ですごく大事な手話の獲得時期を一緒に過ごしていることが本当にありがたいと思いました。これからもご家族と一緒に続けていきたいと思いました。

久保沢／2つ話します。

私個人の話になりますが、「こめっこ」の子どもたちが成長している様子を今日の報告から確認できたことがうれしく、今までやってきたことは間違いなかったと改めて感じました。会場の皆さんも喜んでおられると思います。自分のスキルを磨いて、活動内容も充実させて、より「べびこめ」「こめっこ」が広がっていくように頑張りたいと思います。

2つめは、松崎先生からお話がありましたが、子どもの様子を仔細に観察する必要があるのか？という話、そうした視点について改めて確認できました。見るということは、とても大切です。見る力はとても大事なことだという松崎先生のお話に大きくうなずきました。「こめっこ」の活動においても、子どもとのかかわりの中でスタッフが観察したことを共有し、その意味を考える時間を確保してきました。支援する側も見る力を養う必要があります、さらに子ども1人ひとりもしっかりと見ていけるよう、私たちスタッフはさらにがんばっていききたいと思います。今日は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

河崎／今回は、研究の「中間報告」という副題がついています。これは日本財団から助成を受けて研究を進める予定の「6年間をめぐりに」という期間の中間、3年を過ぎたところの報告です。私の報告でも申し上げましたが、0歳から手話に出会って育った子どもたちが、9歳の壁といわれる年齢を越え、かつ思春期・青年期を迎える18歳までを見ていきたいという強い思いがあります。研究としては、わたしたちの気持ちの中間ではありませんが、この機会にと、各分野がんばってまとめることができよかったです。これからも、研究も活動もがんばっていききたいと思います。

本日ご参加くださった先生方、皆さま、ありがとうございました。今後もしもご支援いただき、いろいろな質問やご意見もお寄せください。

資 料

【資料－1 話題提供（こめっこ研究・各分野からの報告）】

手話言語を獲得・習得する子どもの力
研究プロジェクト

心理発達分野

河崎 佳子
(神戸大学)
こめっこスーパーバイザー・研究統括責任者

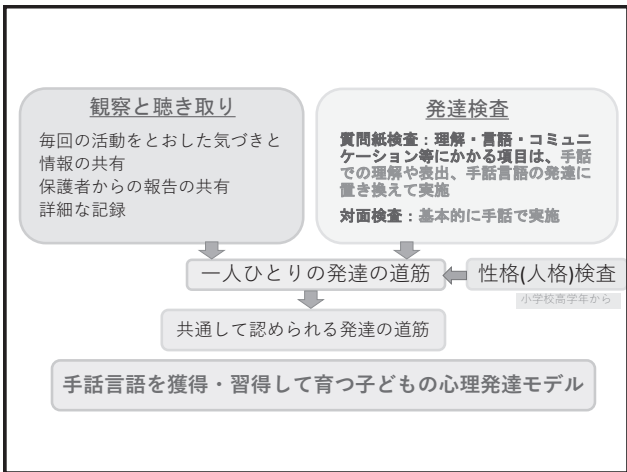
1

「心理発達分野」研究の目的

ネイティブサイナーに触れて手話言語を自然習得する子どもたちが、手話を習得しながらかわる親のもとで成長するプロセスを、情緒、認知、コミュニケーションなど複数の発達ラインから捉える縦断的研究を行うことで、手話を獲得・習得して成長する子どもの発達を明らかにする。

★心理発達分野の研究は、「べびこめ（0-3歳）」
「こめっこ（0-6歳）」の活動と表裏一体

2



3

発達検査

- 質問紙検査（保護者対象）
津守・稲毛式乳幼児精神発達診断
日本手話を母語として育つ、きこえない子どもについて評価できるよう、内容を検討して実施
- 対面検査（子ども対象）
新版K式発達検査
日本手話で実施できるように検討した上で、被検児が得意とする言語&ツールを用いて実施
聴・ろうの検査者がペアで実施
実施方法は現在も模索中
(数値は「推定」とし、参考指数としてのみ算出)

4

津守・稲毛式乳幼児精神発達診断

●検査実施件数（のべ件数） * 2023年度のみ 9月30日現在 (件)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
2020年度	3	13	25	11	1	5	2	60
2021年度	0	6	16	16	7	2	4	51
2022年度	3	6	7	12	9	5	2	44
2023年度	0	6	1	4	5	4	2	22
計	6	31	49	43	22	16	10	177

●検査実施対象児の人数(実数) * 2023年度のみ 9月30日現在 (人)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
2020年度	3	9	13	7	1	5	2	40
2021年度	0	6	11	11	7	2	4	41
2022年度	3	6	7	8	9	5	2	40
2023年度	0	6	1	4	5	4	2	22
計	6	27	32	30	22	16	10	143

5

新版K式発達検査

●K式発達検査実施人数 * 2023年度のみ 2024年2月1日現在 (人)

	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	計
2020年度	2	0	2	0	0	4
2021年度	4	5	1	2	1	13
2022年度	8	6	5	1	3	23
2023年度	0	7	1	3	0	11
計	14	12	8	3	4	51

6

⑥で報告する事例（7例）について

～選抜の基準～

- ① 0歳～1歳台から「べびこめ」に参加（1名のみ例外）
- ② 途切れることなく、週1～2回ペースで「べびこめ」に参加し、月2回の「こめっこ」にも参加していた。
- ③ 現在、4歳～6歳（ろう学校幼稚部在籍）
「こめっこ」「放課後こめっこ」の参加が継続している。
- ④ 「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

7

⑥で報告する事例（7例）について

「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

「手話ばんばん」は、ネイティブサイナーが日本手話から作り出すオリジナル作品で、その表現には、固有のリズム、間合いや流れ、動きの抑揚や強勢など、手話のプロソディーが詰まっています。

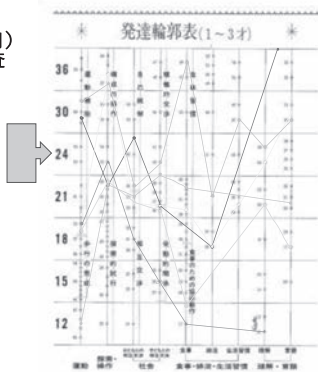
さらに、きこえる保護者らが自身の母語にのせて感情豊かに表現できるよう、手話の意味とリズムを活かした日本語訳を工夫しています。

定番の“こめっこばんばん”、季節ばんばん、生活ばんばん、あそびのばんばんなど、80以上の作品が生まれています。

*「こめっこ」「手話ばんばん」は登録商標です。

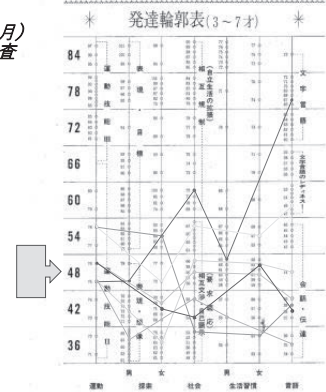
8

2歳の誕生日（24か月）
前後の津守式発達検査
の結果



9

4歳の誕生日（48か月）
前後の津守式発達検査
の結果



10

手話言語を獲得・習得する子どもの力
研究プロジェクト

言語獲得分野

武居 渡
(金沢大学 学校教育系)

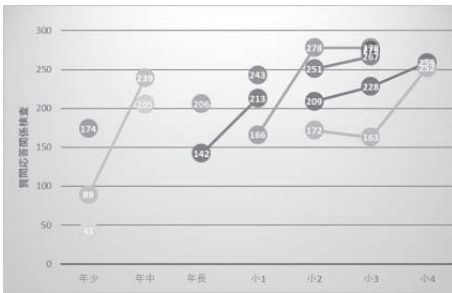
1

言語獲得状況を評価する

- ① コミュニケーション 他者と言語でやり取りがどの程度できるのか
 - 質問応答関係検査 (303点満点)
- ② 手話力 言語としての手話力をどの程度身につけているのか
 - 日本手話文法理解テスト (47点満点) ……文法
 - 日本手話語彙流暢性検査 ……語彙
- ③ 日本語力 日本語をどの程度身につけているのか
 - J.Coss (20項目) ……文法
 - 絵画語彙検査 (修正得点) ……語彙

2

① コミュニケーション

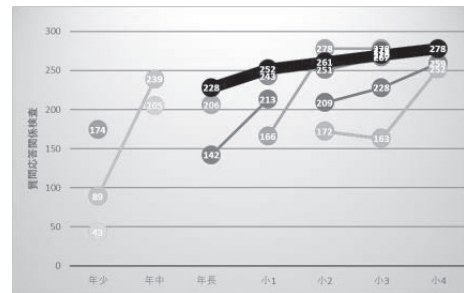


- こめっこに長く参加していくと化ける時期が来る (化ける時期は個人差あり)。
- 早い時期にこめっこに参加することで最終的な到達点が高くなる。

3

① コミュニケーション

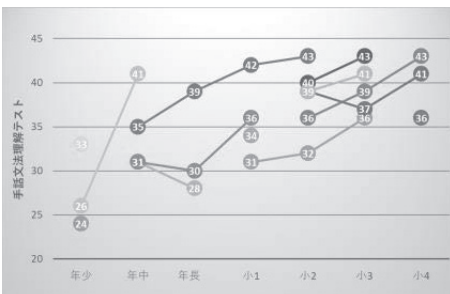
聴児との比較



- 聴児と比較すると遅れるが、学年が上がると伸びていく
- 周りの大人の問題? 通じ合える経験の量に比例する?

4

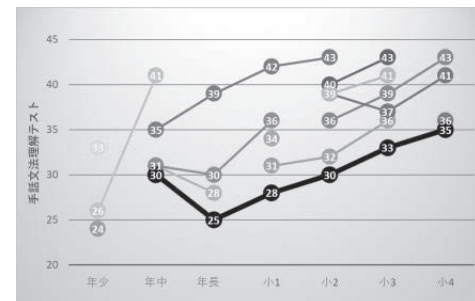
② 手話力



- 40点以上で文脈によらず基本的な手話で会話ができるとみなせる。
- こめっこに長くかかわることで手話力が伸びていく。
- 相対的にこめっこに参加している子どもは手話力が高い。

5

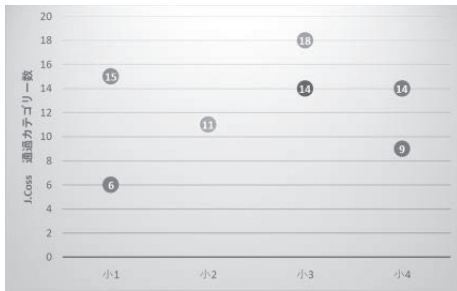
② 手話力



- 以前私とったデータ (15年ほど前) と比べて、すべての子どもで当時の平均値より高い。
- 一定以上の手話力があれば、手話の力を使って日本語の力につなげられる方が使用できる。

6

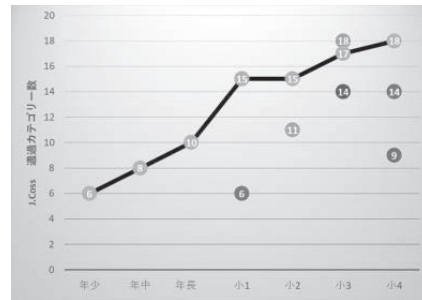
③日本語力



- 個人差大（データが少なく継時変化が見られない）
- 日本語を第二言語として学ぶ子どもにとっては個人差が大きいのはある意味当たり前。第一言語の獲得状況による。

7

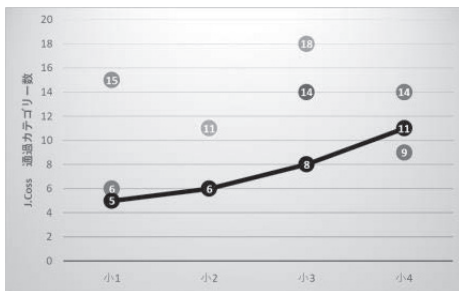
③日本語力 聴児との比較



- 聞こえる子どもと比べると遅れる傾向。継時変化でどのように伸びていくかが重要。

8

③日本語力 ろう児との比較



- 15年ほど前に私がとったデータと比べると、日本語もある程度身につけているといえるが、継時変化を見ていく必要がある。

9

まとめ

- 小さなころから手話に接していた児は、高いコミュニケーション力を示す傾向。
- こめっこに通うことで早い時期に手話の力が付く。特に早い時期から通っている子どもは、高い手話力を示す。
- 日本語力は、聴児に比べると遅れる傾向（第二言語だから当たり前？）
- 継続的にデータを取ることで、日本語力の伸長を期待。

10

学習能力（理解）分野

NPOこめっこ 久保沢 寛

1

学習能力（理解）分野の研究

- 手話言語を獲得・習得して育つ子どもたちの理解力を明らかにするために、手話劇や手話モノログを題材にしたテストバッテリーを作成した。
- 質問紙とインタビューを併用して実施し、記憶、知識、理解の発達的变化を評価する。

2

研究チーム

研究責任者

- 武居 渡 （金沢大学 教授）
- 河崎 佳子 （神戸大学 教授）

研究員

- 久保沢 寛
- 岩田 真有美
- 和田 夏実

3

検査内容

- 手話版モノログ動画による理解
- 手話劇版「心の理論」課題動画
→藤野博先生（東京学芸大学）が作成されたアニメーション版「心の理論」課題を参考に作成。

4

手話版モノログ動画について

●質問内容の基準

- 1.モノログ内に、答えがある。
- 2.モノログ内に、答えはないが、答えとなるヒントが入っている。
- 3.モノログ内に、答えはなく、内容から答えを考える。

●評価方法の基準

- 2点、1点、0点で測っていく方向で進める。
- 2点：質問内容に合った回答をする。
- 1点：理解しているが、回答がずれている。
- 0点：質問の意味が理解できない。

5

今後の計画

こめっこ・もあこめ参加の
年中～小学5年生を対象に検査を
実施していく。

6

脳科学から見た 学習・思考能力

酒井 邦 嘉

240210

1

分野	手話に関する誤解	不足する仮説と実証
脳機能	・手話では言語を司る脳機能が働かず、言語力は育たない	・手話でも言語を司る脳機能は日本語と同様に働き、言語力は適正に発達する
学習	・手話では十分に概念を理解し、思考することができず、学習能力は育たない ・手話の使用は教育には不向き	・発達年齢に対応して、手話で理解し、思考することができ、手話を獲得すれば学習能力は十分に育つ

2

朝日新聞 DIGITAL
2024年2月3日 12時00分

何歳でも習得可能？ 第3、第4言語を学ぶ脳の部位は、母語と同じ

2024年2月3日

佐々木 遼 2024年2月3日 12時00分

朝日新聞デジタル > 記事

第3、第4言語を習得する際に使われる脳の部位を特定したと、東京大などのチームが発表した。母語の習得に関わるのと同じ部位といい、チームは「これまでの常識を覆す結果、何歳になっても、子どもと同じようなやり方で新しい言語を習得することは可能だ」と説明する。

今回の結果は、大人が外国語を学ぶ上でのヒントにもなるかもしれない。

3

言語の「臨界期仮説」は正しくない

「言語学の世界では、言語を自然に習得できるのは、一定の年齢(臨界期)までという仮説がある。臨界期は12~13歳ごろという説や、もっと早いという説がある。だが、今回の結果は、臨界期を過ぎているはずの大人であっても、母語と同じメカニズムで新たな言語を取得できる可能性を示している。

酒井教授は『臨界期仮説は正しくないことが示された。ヒトの脳には、聞いた言葉から規則性を見いだす機能が備わっており、新たな言語を学ぶ際は、文字や文法から入るのではなく、音〔や手話〕に繰り返し触れることが大切だ』と指摘する」

朝日新聞(2024年2月3日)

4

参加者群・試行の段階・文型条件を規定する脳活動

Group I vs. Group II the "who"

a 文, OS + OO + SO + SS 文, OS + OO + SO

左下前頭回 上・中側頭回 左下前頭回 左上・中側頭回

Group I the "what"

b 名詞・動詞ペア, OS + OO + SO 4番目 vs. 1番目 the "when" c 名詞・動詞ペア, (OS + OO + SO) vs. SS 4番目

左下前頭回 左下前頭回 図3

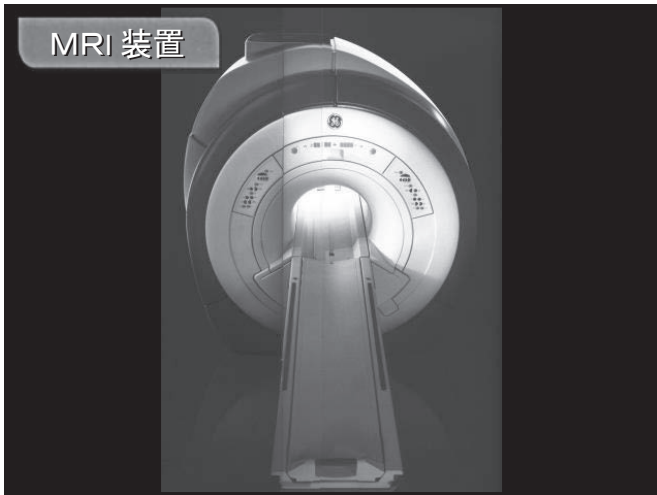
5

脳の「言語地図」

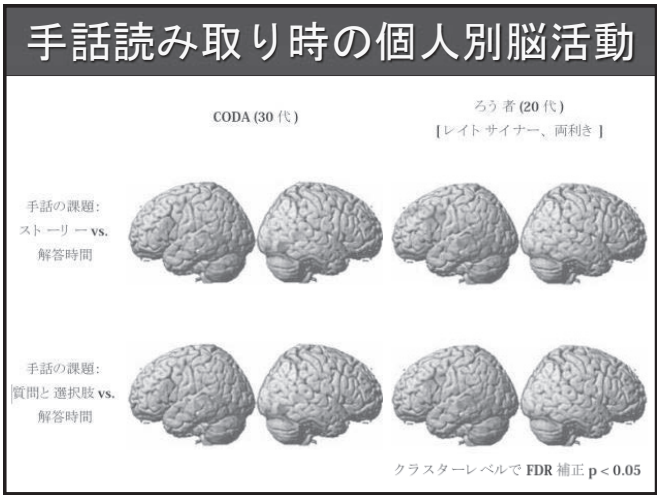
左脳

Science 310, 815-819 (2005)

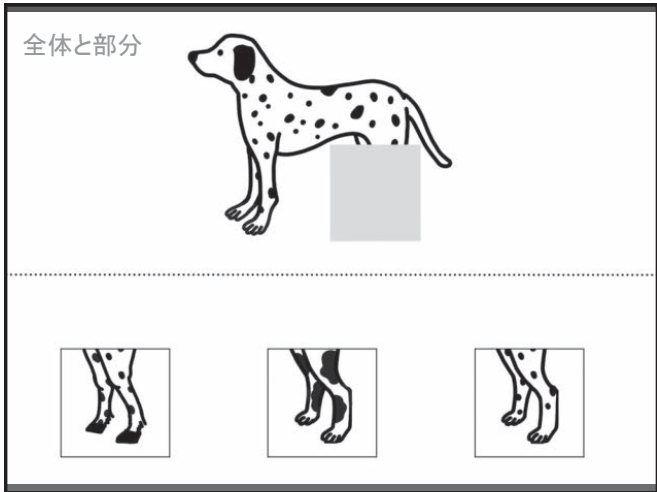
6



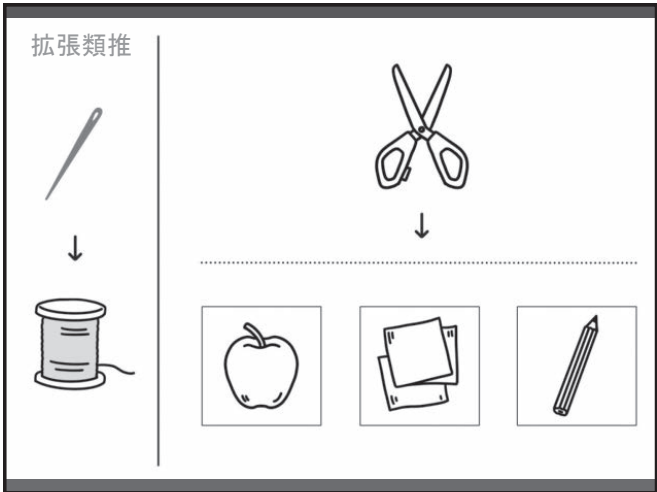
7



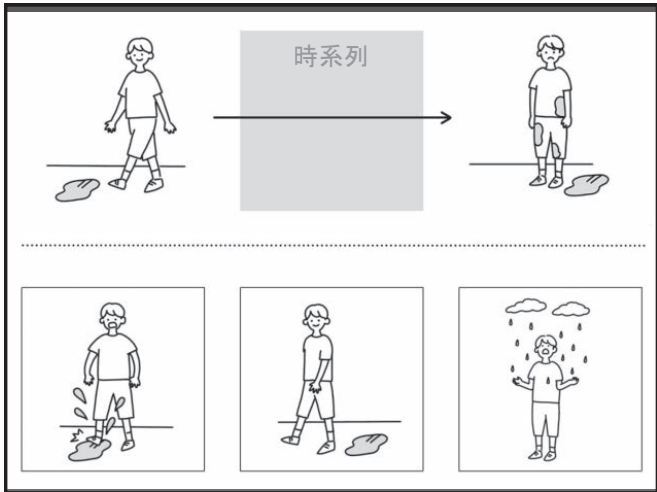
8



9



10



11

1) 小学2年生、男児
20問中18問正解(全体と部分: 4/4、視点変化: 4/4、拡張類推: 4/4、数量感覚: 3/4、時系列: 3/4)

2) 年長、女児
20問中18問正解(全体と部分: 4/4、視点変化: 3/4、拡張類推: 4/4、数量感覚: 4/4、時系列: 3/4) 要修正問題以外、全問正解

3) 年中、男児
20問中10問正解(全体と部分: 3/4、視点変化: 1/4、拡張類推: 2/4、数量感覚: 1/4、時系列: 3/4) 問題意図自体は把握・認識できているように思います

12

分野	不足する仮説と実証	中間報告
脳機能	<ul style="list-style-type: none"> ・手話でも言語を司る脳機能は日本語と同様に働き、言語力は適正に発達する 	<ul style="list-style-type: none"> ・手話の脳機能は音声言語と共通しており、適正に発達した言語力が個人別に実証できる（今回は大人を対象）
学習	<ul style="list-style-type: none"> ・発達年齢に対応して、手話で理解し、思考することができ、手話を獲得すれば学習能力は十分に育つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・手話で育った子どもは問題を適切に理解し、思考することができる ・手話の理解を基礎として、学習能力を育て、引き出すことができる

13

⑥ 事例報告

NPOこめっこ 中尾恵弥子

1

⑥で報告する事例(7例)について ～選抜の基準～

- ① 0歳～1歳台から「べびこめ」に参加(1名のみ例外)
- ② 途切れることなく、週2回ペースで「べびこめ」に参加し、月2回の「こめっこ」にも参加していた。
- ③ 現在、4歳～6歳(ろう学校幼稚部在籍)
「こめっこ」「放課後こめっこ」の参加が継続している。
- ④ 「手話ばんばん」を自然吸収して育った世代

2

対象児について

対象児	現年齢	初参加時の年齢	聴力	人工内耳の有無	支援学校	聴覚口話の療育	保護者の聴覚障害の有無
A	6歳6か月	1歳9か月	110dB	2歳1か月	○	幼稚部入学まで	なし
B	5歳0か月	0歳5か月	55dB	なし	○	なし	父:難聴
C	4歳8か月	2歳9か月	105dB	1歳6か月	○	1歳まで	母:一側性難聴
D	4歳8か月	0歳4か月	105dB	1歳1か月	○	幼稚部入学まで	なし
E	4歳9か月	0歳10か月	75dB	なし	○	なし	なし
F	4歳0か月	1歳0ヶ月	スケールアウト	なし	○	3歳5か月まで	なし
G	3歳11か月	0歳7か月	スケールアウト	2歳1か月	○	○	なし

3

A児(6歳6か月)

- 1歳半健診で聴覚障害の疑い
- べびこめ参加開始・確定診断 1歳9か月
- 聴力 両耳110dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳2歳1か月
- 2歳0か月 「食べる」「飲む」等の手話を表出
- 2歳3か月 手話ネーム「私はA」
- 2歳6か月 動画視聴開始
手話表現作品をアレンジ・こめっこごっこ
- 3歳8か月 聴覚支援学校幼稚部入学
土曜日こめっこ継続参加
- 4歳6か月 父母に「手話して!」と要求できる
「お父さんとお母さんがこめっこ通ってくれてよかった」

4

実施検査

<心理発達分野>

- 津守式乳幼児精神発達検査
- 新版K式発達検査2020(推定)

<言語獲得分野>

- 日本手話手話文法理解テスト
- 質問応答関係検査
- 絵画語い発達検査
- J.coss日本語理解テスト

5

B児(5歳0か月)

- べびこめ参加開始 0歳5か月
- 聴力 55dB 両耳感音性難聴
- 補聴器装用開始 0歳6か月頃
- 0歳9か月 初語の「お花」を手話で表現
- 1歳台 「おいしい」「ありがとう」
- 1歳8か月 手話言語と音声日本語
- 3歳1か月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 4歳台 手話言語と日本語の切り替え
- 5歳 手話言語と日本語の力がともに成長中

6

C児(4歳8カ月)

- ベビこめ参加開始 2歳9カ月
- 聴力 両耳105dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳1歳6カ月
- 0歳～ 両親が独自に手話を学びCとかかわる
- 1歳6カ月 両親は本格的に話の必要性を感じ始める
- 2歳9カ月 ベビこめ参加開始
- 3歳台 「あれは誰?」「何してるの?」「何のお話し?」
- 3歳10カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 4歳2カ月 手話のある児発センター利用開始
- 4歳6カ月 大人並みのスピードの手話を読み取る
音声日本語よりも手話言語が優位
文字・指文字の習得

7

D児(4歳8カ月)

- ベビこめ参加開始 0歳4カ月
- 確定診断 0歳5カ月→補聴器装着開始
- 聴力 両耳105dB(感音性難聴)
- 人工内耳 両耳1歳1カ月
- 0歳11カ月 「ちょうだい」「(おむつ)交換」等の手話を表出
- 2歳0ヶ月 「アンパンマン抱っこする」意思表示が増える
- 2歳4カ月 手話でのえほんよみかたり
- 2歳6カ月 聴覚活用が進む
- 3歳0カ月 母とは音声日本語と手話で会話
- 3歳10カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 4歳台 手話言語と日本語の切り替え
- 4歳8カ月 手話言語と日本語が共に成長中

8

E児(4歳9カ月)

- 29週1100gで誕生
- 外耳道閉鎖を伴う小耳症
- ベビこめ参加開始 0歳10カ月
- 聴力 両耳75dB 混合性難聴
- 骨伝導補聴器装着 35～40dB
- 0歳10カ月 こめっこ動画視聴開始
- 2歳1カ月 「お茶」と手話で伝える
- 2歳10カ月 「ママ、時間、ない、ない」
- 3歳台 手話表現作品を完璧に覚える
- 3歳11カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 4歳3カ月 自発的な発声が増える
- 4歳7カ月 一日の出来事を手話と音声日本語で報告

9

F児(4歳0カ月)

- 小耳症と手指の障害
- ベビこめ参加開始 1歳0カ月
- 聴力 両耳スケールアウト 混合性難聴
- 骨導補聴器装着 75dB
- 1歳0カ月 父が育休を取得し家族3人でベビこめ参加
- 1歳4カ月 手話表現作品を次々とマスター
アニメよりもこめっこ動画を熱心に視聴
- 2歳台 手話での会話がスムーズにできる
- 2歳10カ月 「クレーン車」「ブルドーザー」の手話を自分で考案
- 3歳2カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 3歳6カ月 手話のある児発センター利用開始
- 3歳10カ月 大人並みのスピードの手話を読み取る
冗談が通じる「ずるい」の意味を理解して使用

10

G児(3歳10カ月)

- 染色体の微細欠失による運動発達遅滞
- 三半規管欠損・顔面神経欠損など
- ベビこめ参加開始 0歳7カ月
- 0歳7カ月～ 週2回ベビこめ+動画視聴
- 1歳6カ月 手話表現作品と一緒に手を動かし楽しむ
えほんよみ 「ぞう」「ねこ」と手話
- 2歳0カ月 寝手話でこめっこばんばん
- 2歳2カ月 自力歩行
- 2歳6カ月 【母指さし】→【G指さし】→「好き」
- 親子で意思疎通ができていると実感
- 3歳0カ月 聴覚支援学校幼稚部入学
- 3歳台 表情豊かに意思を伝える

11

2024年2月10日(土) 13:00~16:00
2023年度大阪府手話言語条例シンポジウム
指定討論
「コミュニケーション支援」
の視点から

松崎 丈
(宮城教育大学 教授)

1

親子コミュニケーション支援

親が、わが子のことをもっとわかりたい、もっと気持ちを通い合わせたいという気持ちが大きな原動力に。

➡親子コミュニケーション支援では、「親としての感受性」を大切に回復させ、高める側面もあることに留意したい。

「親としての感受性」
赤ちゃんの行動の背後にある意味を肯定的に捉えたり、その行動に適切に反応するように係わったりすること。

2

こめっこを訪問した時に親御さんが語ってくださったこと

(一部)
「聴覚活用ができるか発音できるかばかり意識させられたが、(こめっこにきて) やっと我が子をまるごとありのままに受け止められるようになった。」
「どこに行っても我が子と私たちがありのままに受け入れてもらえない社会に傷付き、絶望を抱えていたところで、やっとこめっとに出会えて落ち着けられた」

➡親御さんもまた「当事者」であることが大事。
➡大阪府における保護者の心理的支援を含む専門の相談窓口「ひだまり・MOE」が「我が子との情緒的な結びつき」と「家族と社会との新たな繋がり」を促している。

3

聴者親子の研究では、親が音声や身体を使って提示することで、二項関係から三項関係への移行を促す。(塚田, 2001; 大神, 2016など)

お子さんは、親との情緒的つながりを基盤に、あるものへの注意を共有する(共同注意)。

4

乳児期における手話コミュニケーション研究の知見

ろう者の親を持つろう乳児たち(7~14ヶ月)は、聴者の親を持つ聴児たち(同月齢)と比べて、親の視線の先にあるものを追いかけることを多く行う。(Brooks, Singleton & Meltzoff, 2019)

生後6ヶ月齢のろうの乳児に対して、ろう成人同士で表現される手話と育児語としての手話を録画したビデオを提示して比較。その結果、育児語の手話の方がビデオを長く注視。聴こえる乳児にも同様の結果に。(Masataka, 1996; 1998)

手話でコミュニケーションを図る親子にとって大切なこと。

- ①赤ちゃんと興味対象を共有して、
- ②赤ちゃんの発達や理解を踏まえた手話や手指サインで、
- ③楽しくやりとりをして気持ちを分かち合う経験を

5

ろう親子のコミュニケーション観察に関する研究の知見から

親は、子どもが大人の手話発話を容易に知覚できるように係わっている(育児語も含まれる)。

- 大きく手を動かして動きを強調する
- 繰り返しを多くする
- 文法的に単純な構造を用いる
- 話題のものを視野内に持っていき
- 話題のもの近くで手話を表現する
- 運動する手型を保持して強調する

親も動いてみる
こめっこスタッフがやってみせる

(鳥越, 1995; 松崎, 1999他)

6

赤ちゃんの見え方の変化に合わせて ろうの親はどのような係わりをしている？

- 生後1カ月(視力0.01)
 - ・30cm位の距離でいたい焦点が合う(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)。
 - ⇒ 乳児に話しかけたり再度見てもうらうために、手足や身体を優しくなでたり叩いたりする。そうして親は今後のやりとりの足場を作っている(Swisher, 2000)。
 - ⇒ 乳児が手を動かすと、乳児の身体の上で手話を表してみせる(Spencer, 2003)。
- 生後2カ月(視力0.01~0.02)
 - ・あるものをじっと見つめ始める、人間の顔と物の形を区別し始める、動くものを目で追いはじめる。(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)
 - ⇒ 見てほしいものを乳児の顔の前で提示。
 - ⇒ 育児話の手話(ゆっくり大きな動作で繰り返して表現)で話しかける(Masataka, 1996)。
 - ⇒ 顔の動きを強調する(Meadow-Orlans, MacTurk, Prezioso, Erting & Day, 1987)。
- 生後5~6カ月(視力0.04~0.08)
 - ・人の顔の動きに関心をもち、人の表情の違い(笑顔、怒り)がわかるようになる。
 - ・左右、上下の方向に追視するようになる(小枝, 1998; 市川, 2013; 山口, 2013)
 - ⇒ わかりやすい顔の動きで質問の表現をする(Reilly & Bellugi, 1996)
 - ⇒ 乳児の視線の動きのペースに合わせて、物を動かす(例、ボールを転がす、頁をめくる)。
 - ⇒ 親の顔を見てもうらうために、乳児の視野内に入るか、物を動かして親の顔に注意を向けさせる。
 - ⇒ 乳児が何かに関心を向け、そこから目を離すのと同時にそれについて話す(Waxman & Spencer, 1997)。
 - ⇒ 手話は、子どもの身体の上だけでなく、物の近くまたは物の上でも産出(Spencer, 2003)。

7

ろう重複の子どもと手話

- 子どもは初期からその気持ち、経験や考えなどを独自のサインを作って発信。そこに子どもなりの「わかりかた」が入っている。
- ろう者の手話は、また幾重にも重なる「わかりかた」や手話を用いる人々の「文化」にあるものを備えた、「文化的な言語」として考えている。
- 最初から「文化的な言語」としてのろう者の手話を共通語として正しく身につけさせることよりも、その時々の子どもの「わかりかた」の変化に即した手話で係わる。

独自のサイン ⇒ 事象に似た手話 ⇒ 事象に似ていない手話
(自成信号/特徴弁別的信号) (特徴弁別的信号) (型弁別的信号)

↑ ↑ ↑ ↑ ↑
その時々の子どもの「わかりかた」の履歴とも関わる

8

家庭訪問支援を受けた親御さんの インタビューから

- ここまで詳しく言う先生はいないなって思った。深いなって。先生の助言がない限り、ここまで頑張れない。何これ? パーンって倒すから、まだまだ先かって(何がなんだかわかってないでしょって)思ったけど、親のちょっとした、視点を変えてみる感覚を知らされた。先生が気持ちや興味を代弁してくれるからこそ、そのぐらいはわかっているんだって思って、じゃあもうちょっとやってみようとか、見せてみようかなって気持ちになる。
- 先生は、視線から、ちょっと発したことばからとか、口の動き、こどもが何をしているっていうのを受け止めているから、子は今これを見ているんだ、これに興味があるんだ、じゃあこうしていけばいいかなっていう観察力…(略) 見逃したことがいっぱいあったような気がする。このときはまだそんなの全然分かっていなかったけど。先生はよく見ているから、赤ちゃんのペースに合わせてゆっくり、丁寧にやっている。こどもの発していることをちゃんと受け止めている。だからこそ、次(の係わり)が出てくるんだと思う。
- 先生のコメントは、他の先生と違う。他の先生は「興味があるんだね、どうしましょう。」程度の話で終わる。子がただ興味があるということだけでなく、心の状況を先生が代弁してくれている感じがあった。子と会話できてる気分になった。うすっぺらい会話じゃなかった。子は赤ちゃんだけど、心を持って…。他の先生だと、「これは指差しだから、隣で、これは～だよと言ってあげましょう」程度。だから、「はいわかりました」って事務的になる。でも先生は愛情を感じられる助言をしてくれる。

9

参考: 家族主体で共同で取り組むアプローチ

コロラド家庭訪問支援プログラム
Colorado Home Intervention Program (CHIP)

1. 話し合い(カウンセリング)
親とのカウンセリングで子どもの障害の受け入れや今後の対応に向けた方針(多領域・多方法からの選択)と、こどもへの療育で期待される効果を説明。支援の実施方法についても話し合い、親の決定過程を援助する。
2. 子どもとの係わり合いの支援
実際に子どもと係わってみせることで、なにをどうすべきか親に理解してもらう。
3. 子どもの行動観察によるアセスメント
子どもの行動を共同で観察し、評価をおこなう。親との係わりをビデオ記録、分析、結果を報告。親による各種質問紙記入も。
4. 親自身による育児(療育)の支援
親が子どもと上手に係われるように役割を任せながら、肯定的にフィードバック。ケースに応じて各機関とも連携。
5. 発達評価と話し合いのプロセスの継続
評価結果について話し合い、さらに良い方法を考える。

10

【資料－1 指定討論（中島）】

2024/2/10
2023年度 大阪府手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

コーダの視点から

兵庫教育大学 中島武史

1

1. コーダとは

- CODA :
Children of Deaf Adults の頭文字を取った略称。
意味は「ろうの親をもつ聞こえる子どもたち」。
* 両親だけでなく、どちらかの親がろうであればコーダ。日本に2万人以上はいる。(中津, 2023)
* コーダの多くは、手話に関わりながら生きている。(中島, 2019)
* 手話以外にも、口話、文字、など複数のコミュニケーション手段を使っている。(澁谷, 2007)

2

2. コーダの言語状況

27名の事例 (中島, 2019)

①	手話が第一言語で、日本語が第二言語	2 (7%)
②	手話も日本語も第一言語だが、手話の方が得意	2 (7%)
③	手話も日本語も第一言語だが、日本語の方が得意	13 (48%)
④	日本語が第一言語で、手話が第二言語	8 (30%)
⑤	日本語のみが第一言語	2 (7%)

3

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

- 約20年先、今の聞こえない・聞こえにくい子どもたちは親になる可能性がある。
- 聞こえない・聞こえにくい親から生まれる子の約90%はコーダ。
The Deaf Population of the United States (Schein J, & Delk, 1974)
- 約20年先、**家庭内の共通言語とコミュニケーション**はどうするか？
- 手話が ある / ない 場合にどんなことが想定されるか？

4

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

- 家庭では、**複数での会話**になることも多い。
- 軽度/中等度難聴者と人工内耳装用者も含め、聞こえない・聞こえにくい人は、①②が苦手。
① 静かではない場所での音声日本語会話
② 複数での音声日本語会話
- 聞こえない・聞こえにくい親が音声日本語のみの使用者の場合、「**ディナーテーブル症候群**」を体験する。
(Listman & Kurz, 2020)
➔ 親だけが家族の会話についていけない。
➔ 「偶発的学習機会」や「偶発的利得」をのがす。
(Eckert & Rowley, 2013)

5

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもがコーダの親になることを見通す

- 親もコーダも手話ができれば、**静かではない場所、複数での会話でも参加**できる。
➢ 親だけが家族の会話についていけない状況(=ディナーテーブル症候群)を避けることができる。
➔ 疎外感・心理的ストレスが低減される。
- 「偶発的学習機会」や「偶発的利得」を得る。
➔ コーダの様子や考えを把握できるため、親としての意識的な言動が取りやすい。親の役割を担いやすい。

6

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもが コーダの親になることを見通す

・親もコーダも手話ができれば

➡ 言語的マイノリティの研究では、子は親への言語通訳について（過度でなければ）誇りに思うことがわかっている。（Orellana et al., 2003）

➡ 言語通訳者だけではなく、文化仲介者としての機能がある。（角, 2023）

*ただし、特にコーダが小さい頃から過度な通訳を求めてはいけない。親子関係に悪影響を及ぼすことがわかっている。

詳細は、中津（2023）を参照。

7

3. 聞こえない・聞こえにくい子どもが コーダの親になることを見通す

・ただし、手話を使う親であってもコーダに手話を教えようとしにくいケースもある。（澁谷, 2007）（中島, 2019）

➡ 親自身が「コーダは聞こえる。手話を身につける必要はない。」と考えてしまうことが原因。

➡ ベトナム人、ラオス人、カンボジア人、ブラジル人、日系ではないスペイン語系の南米出身者たち、中国人においては、親と子との意思疎通にむずかしさがあるケースが報告されている。

（川上, 2005）（小内, 2005）（田辺, 2005）（吉高, 2005）（藤, 2005）

➡ 親の言語を子どもが身につけることが重要

（＝継承語）。詳しくは（安東, 2022）（中井, 2021）を参照。

8

4. コーダの視点から

● 聞こえない・聞こえにくい子どもたちが手話を習得していくことは、**約20年先を見通した時にも重要**。

① 手話は、親がコーダとのコミュニケーションを十分に取るために有効。

✓ 音声日本語だけでは、親子関係を深めることが難しい。

「ディナーテーブル症候群」の問題

偶発的学習機会 / 偶発的利得の喪失。

9

4. コーダの視点から

② 手話は、コーダが親とのコミュニケーションを十分に取るためにも有効。

✓ コーダが親とケンカができる。（遠藤, 2020 : 141）
感情的になった時こそ手話が重要になります。
目の前にいる「伝えたい！ 知りたい！」と思っ
合う相手と伝え合う術がないのは悲しすぎます。
それが親子であるなら猶更です。

* 「SODA : Sibling of Deaf Adults / Children」の論点も。

「聞こえない兄弟をもつ、聞こえるきょうだい」にとっても手話は大事。

10

参考文献

安東明珠花（2022）「コーダの手話継承 - コーダ同士の語りからの分析・考察」『言語文化教育研究』20 : 59-73

遠藤しおり（2020）「耳の聞こえない両親と聞こえる私」澁谷智子（編）『ヤングケアラー わたしの語り』: 123-147

押元麻美（2023）「高音急墜型難聴者による聴能主義体験の当事者研究 - 私にはなぜ補聴器をしていないのか？」『障害学研究』19 : 116-142

川上郁雄（2005）「ベトナム人」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 195-198

小内遥（2005）「ブラジル人児童・生徒」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 106-109

澁谷智子（2007）「聞こえない親をもつ聞こえる人々の手話学習 - フィールドワークによるコーダの語りから - 」『社会言語学』VII : 43-55

角知行（2023）「移民のよみかき戦略 - 新識字研究をレビューする - 」『社会言語学』23 : 103-122

宋英子（2005）「外国人民族教育」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 131-134

陳於華（2005）「在日中国人の言語使用」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 218-221

11

参考文献

田辺寿夫（2005）「ラオス人・カンボジア人」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 198-200

宋英子（2005）「外国人民族教育」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 131-134

田辺寿夫（2005）「ラオス人・カンボジア人」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 198-200

陳於華（2005）「在日中国人の言語使用」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 218-221

中井好男（2021）「私はコーダとして手話を継承すべきだったのか - 中国出身のコーダとの対話的自己エスのグラフィック - 」『言語文化教育研究』19 : 52-73

中島武史（2019）「コーダイメージと言語意識 - 移民の子どもとの類似・相違」『社会言語学』19 : 85-99

中津真美（2023）『コーダ - きこえない親の通訳を担う子どもたち - 』金子書房

吉富志津代（2005）「在日スペイン語系南米出身者の言語使用」真田信治・庄司博史（編）『事典 日本の多言語社会』岩波書店 : 224-226

12

参考文献

- Eckert, Richard C. & Rowley, Amy June. 2013 Audism: Theory and Practice of Audiocentric Privilege. *Humanity & Society*, 37(2): 101-130
- Listman, Jason D. & Kurz, Kim B. 2020 Lived Experiences: Deaf Professionals' Stories of Resilience and Risks. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 25(2): 239-249
- Orellana, Marjorie Faulstich, Lisa Dorner, & Lucila Pulido. 2003 Accessing Assets: Immigrant Youth's Work as Family Translators or "Para-Phrasers". *Social Problems*, 50(4) : 505-524
- Preston, Paul. 1994 *Mother Father Deaf: Living between Sound and Silence*. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press.
- Schein J., & Delk M. 1974 *The deaf population of the United States*. Washington DC, Gallaudet University Press.

【資料-2 参加状況】

大阪府手話言語条例シンポジウム 参加者

参加申込者数	550人（他関係者・スタッフ70人）
第Ⅱ部 参加数	337人（途中入退出者含む）

■参加者所属内訳

行政機関（福祉部局）	16人	手話通訳関連団体 （全通研・手話サークルなど）	153人
行政機関（教育部局）	1人	大学や研究所	29人
行政機関（その他）	9人	当事者（保護者含む）	45人
学校関係	146人	マスコミ機関	3人
医療関係	19人	一般企業	10人
福祉関係	21人	その他	28人
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	28人	特になし	15人
当事者団体 （ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	27人		

【資料-3 アンケート報告】

○回答状況

申込者数	550 人
回答数	244 人

(回収率 約44%)

○アンケート結果

1. お住いの都道府県					
北海道	3	石川県	1	岡山県	1
青森県	4	福井県	3	広島県	12
岩手県	4	山梨県	0	山口県	4
宮城県	3	長野県	0	徳島県	0
秋田県	2	岐阜県	3	香川県	1
山形県	1	静岡県	5	愛媛県	2
福島県	1	愛知県	6	高知県	0
茨城県	3	三重県	2	福岡県	5
栃木県	3	滋賀県	4	佐賀県	1
群馬県	2	京都府	7	長崎県	3
埼玉県	5	大阪府	74	熊本県	9
千葉県	3	兵庫県	9	大分県	3
東京都	29	奈良県	6	宮崎県	1
神奈川県	4	和歌山県	3	鹿児島県	5
新潟県	1	鳥取県	3	沖縄県	1
富山県	0	島根県	1	海外	1

2. こめっこの紹介（2021 年度報告の再配信）について	
よくわかった	140
ある程度わかった	58
あまりわからなかった	1
みていない	19
2021 年度にみた	26

3. こめっこ研究について（2022 年度報告の再配信）	
よくわかった	129
ある程度わかった	73
あまりわからなかった	1
みていない	11
2022 年度にみた	30

4. 【事前配信】こめっこ参加ご家族の声 Part2 をきくことができてよかった	
非常にそう思う	161
そう思う	62
あまりそう思わない	0
みていない	21

5. こめっこ研究の各分野からの報告について	
大変有意義であった	181
ある程度有意義であった	60
普通だった	2
あまり有意義ではなかった	1

6. ご所属、職種等について、教えてください（複数回答可）	
行政関係	21
教育関係（聴覚支援学校、難聴学級）	59
教育関係（上記以外）	12
医療関係	10
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	15
福祉関係（上記以外）	32
当事者団体（ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	9
手話通訳関連団体（全通研・手話サークル等）	103
大学や研究所	20
保護者やご家族	17
その他	16

7. 年齢を教えてください	
20代	6
30代	23
40代	43
50代	78
60代	81
70代	13

8. シンポジウム開催をどこでお知りになりましたか（複数回答可）	
チラシ	62
メール（NPO こめっこから）	118
メール（NPO こめっこ以外）	4
ホームページ（NPO こめっこ）	12
ホームページ（NPO こめっこ以外）	1
新聞・広報など	9
SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど)	11
その他	28

9. 8の質問に、「メール（NPO こめっこ以外）」「ホームページ（NPO こめっこ以外）」「新聞・広報など」「SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど）」「その他」と回答された方は、よろしければ具体的に教えてください（他の回答をされた方は次にお進みください）	
<p>[メール（NPO こめっこ以外）]</p> <p>主な回答：手話研究所、市町村の設置通訳者</p>	
<p>[ホームページ（NPO こめっこ以外）]</p> <p>主な回答：言語聴覚士協会</p>	
<p>[新聞・広報など]</p> <p>主な回答：手話通訳士協会機関誌「翼」、会報「ろう教育の明日」、大聴協新聞など</p>	
<p>[SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど）]</p> <p>主な回答：フェイスブック、X（旧ツイッター）、インスタグラム</p>	

[その他]

主な回答：知人からの紹介、医師からの紹介、市福祉課からの紹介
など

10. 大阪府手話言語条例シンポジウムに参加されるのは何回目ですか
(2018年から継続して行っています)

初めて	78
2回目	61
3回目	61
4回目	23
5回目	11
6回目	10

11. 今回のシンポジウムをご視聴くださった感想など、自由にお書きください。

自由記述部分については、今回もたくさんのご意見・ご感想をお寄せいただきました。紙面の都合上、遠隔実施に関する感想、企画運営や情報保障に関するご意見、開催に対する感謝のお言葉等については割愛させていただいております。貴重なご意見やアドバイスを、今後の開催に反映してまいります。心強い励ましをいただき、誠にありがとうございました。

- 早期の手話の習得の大切さを改めて感じました。
- 今、接している子どもたちの成長を感じるとともに、20年後先を見据えた支援をやっていききたいと、改めて感じました。
- 今回も色んな議論を聞いて、良かったです。今回の議論で今後どう生かしていくのか考えて行きたいと思います。これからもずっと応援します。
- 各分野からの報告が生き生きと伝わりとても有意義でした。
- コーダの視点からの将来コーダの親になるという話が今後はそういう視点ももっていきたいと思った
- どの先生のお話も良かったです。あらかじめ寄せられた質問への回答、解説の時間がたっぷりあったのが良かったです。
- 手話がいかに大切か、データからも納得のいく内容でした。今後も現場と研究者のコラボによって子ども達の言語発達が上がっていくことを願います。
- 研究内容が横断的で、ろう教育の今までとこれからを科学していくものであり、他ではなかなか全ての研究内容をまとめては聞けないので、良かったです。
- これまでの研究結果は聴覚口話法の重要性を裏付けるものではないかという質問に対しての酒井先生の回答がとても腑に落ちました。改めて、自分の中でも整理してアウトプットしていきたいと思いました。松崎先生のコミュニケーション支援に関して、支援者が子どもの姿をとらえるにはどうすべきかお聞きしたいと思いつつ、どれだけ子どもたちの言葉にならないメッセージ捉え、関わり合えるかが私たち教員の専門性ではないかと強く感じました。

○子どもさん達の経過が、数値化されて、活動されている内容の優位性をとても感じました。私も、刺激を受け、自分のやっている支援を、より良い形へ整えていきたいと感じました。

○活動を長期間にわたり継続することは大変なことだと思いますが、着実に前進されている様子がよくわかり、関係者の御尽力に敬意を表します。

○ろう学校で勤務をされており、乳幼児からの言語獲得に課題を感じていました。貴重なお話を聞いて良かったです。手話が大事ということもそうですが、すべての子どもにとって親や兄弟と通じ合える(喧嘩のできる)言語の獲得を乳幼児期からシャワーのように与えていくことが本質にあるように感じました。

○今後の研究や、子どもたちの成長が楽しみになりました。全国にも広がっていくといいと思います。

○酒井先生の言語獲得の臨界期はないというお話し、非常に刺激を受けました。

○レイトラーナーの言葉、いつでも言語は学ぶことができるに、自分の手話力の向上への意欲が持てました。また、乳幼児期からの通じ合うコミュニケーションが大切、手話が日本語習得、音声言語を妨げないだけでなく、習得に大いに必要であることも。今日からまた頑張ります！

○ろう児が早期に手話言語を獲得することで生き生きと情緒豊かに成長していく様子がよく分かりました。

○脳科学の視点を知る事ができました。手話は第二言語だから上手になれないと思ってきましたが、それは先入観だと感じました。

○研究の中間報告として、この後の研究結果が気になるような内容でした。あと3年で助成が終わってしまうとのことでしたが、ぜひ何らかの形で継続調査をしていただいて、こめっこさんの活動に還元されるといいなと思いました。と同時に、「最終報告」でどのような結果が見えてくるか、大変楽しみにしています。事前視聴のコンテンツでは、親御さんからの声、こめっこ活動の様子の映像がとても良かったです。これからも応援しています。

○言語の獲得に必要な環境整備の重要性、個々に合った選択と提供の大切さを

知ることができました

○コーダの視点は参考になりました。身近で問題を抱えている方を思い出しながら考えさせられました。又言語に対する大人になっても脳は多言語に反応できるメカニズムを持っていることは今後の希望になりました。読み取りの少しズレてるところは、本当に難しい内容だったと思います。お疲れ様でした。

○初めての参加でまだ理解が不十分ですが、今日のシンポで少しずつ日本手話の重要性、置かれた環境がわかってきました。

○こういう活動の場があって、ろう子供の成長が楽しみで、応援したい。頑張ってください

○こめっこへの理解が深まりました。特に児童 7 名とそのご家族についての報告が印象的でした。

○ろう者のご家族を取り巻く環境と、こめっこの活動内情がよくわかりました。さらなる成果を期待しております。

○改めて手話言語の重要性を感じました。家庭でももっともっと手話が使えるように頑張っていきたいと思いました。

○具体的なお話が聞けて良かった。言語習得、いくつでも同時でも何歳でも、習得できる。支障はないとの説明に、そうなのか～と思いました。

○難聴の児童にとって手話が母語、日本語が第二言語であるとき、日本語を習得することは外国の児童が日本語を習得することと同じぐらい難しいことなのかなと思いました。

○今回も良い勉強ができました。こめっこが、コーダや、ソーダの子ども達が手話を獲得できる場にもなっているということも良いと思いました。

○手話の大切さ、こめっこ の大切さを改めて思いました。さらなる発展と広がりをお手伝いしたいです。普通学校の子供たちも手話をきちんと学ぶ時間があれば良いですね。聾学校でも、聞こえる子供たちの学校でも、普通に手話を学び、手話と日本語のバイリンガルに育てられたらと思いました。聾学校と聞こえる

子たちの学校の交流をたくさんしてほしいです。

○こめっこの活動が研究としてまとめられていくのは、今後の聴覚障害児の手話言語獲得、ろう教育に大きな影響を与えたいと思います。どの聴覚特別支援学校の乳幼児教育相談が充実していくといいなと思いました。

○言語の獲得について脳科学的には自然と触れる環境があれば、年齢など関係ないこと、またいくつでも獲得する能力があることを知れて良かったです。それを踏まえできるだけ早く言語の刺激を言語に触れる環境を作る大切さを知りました。

○手話を勉強している中で臨床心理士の研修会で河崎先生の話聞き今回の報告もとても興味深いものでした。現在、手話を使う子どもと接することはありませんが、手話を使わない難聴児との関わりの中で、手話の重要性を改めて考えていきたいです。

○事前配信もわかりやすく、今日のこめっこの研究内容もとても整理された内容で、わかりやすくてよかったです。中間報告とはいえ、手話の早期獲得、親御さんの習得の意義を十分に裏付ける結果が出ていたように思いました。各先生方のお話は全て良かったです。長期的に子どもたちの成長を追いながら成果を見ていくことがとても楽しみだと思いました。

酒井先生のお話では、言語獲得の臨界期がないというご報告があり、早期に手話に出会えなかった子どもたちがこれまでもいましたが、成人してからも十分な日本手話を獲得していった姿と重なり、なるほどと思いました。しかし、家族はやはり後からでは遅いと思いますので、やはり早期からの手話習得を親御さんには是非保障し、聞こえない我が子に大切な言語であることを親子で実感しながら育つことが大事だと思いました。だからこそ、こめっこのこれからの活躍に対して応援したい思いでいっぱいです。酒井先生の明瞭な質問への回答を通して新しい学びを得られたことは収穫でした。

○乳幼児教育相談を担当しています。保護者支援にとっても参考になり、手話について、保護者に伝えていくための根拠となることが多くありました。その反面、手話言語を母語として獲得していった子供たちが、学習言語として必要な日本語をどのようにして獲得していけばいいのか、難しさを感じています。そのあたりも、知りたいです。

○貴重な学びをいただきました。子どもたちに少しでもよい言語環境が提供できるようにしていきたいと感じました。また今回酒井先生のお話から「言語環境」について改めて考えさせられました。学びを深め、保護者や周囲とも共有していきたいと感じました。

○沢山の学識・経験者の協力を得て、大変有意義な実践に加えて、真摯な姿勢で研究に取り組んでおられることに対して、敬意と共に私たちも頑張らねばという気持ち改めてなりました。パネルディスカッションでは、参加者に誤解が生じることを危惧して、敢えてひねくれた質問をしましたが、それにもきちんとご回答いただき、安心しました。

○酒井ドクターの発表が、大人になってからも言語獲得は可能とのことで、じゃあ手話言語も後からで良いのではということにつながるなど思っていたら、質疑応答でその話が出たので、すっきりしました。
人工内耳をつける1歳までの期間、発語がなくても赤ちゃんの脳はコトバを身に付けている、その大切な期間に、聴覚障がいのある赤ちゃんには周りの大人が言語を奪っている、という事実が、早く当たり前の世の中になって欲しいと願います。

○本当に興味深いお話ばかりでした。子供が聞こえない、聞こえない自分たちに聞こえる子供が生まれた、ソーダ、本当にいろいろな立場の人たちがこめっこに出会える、その数が更に更に増えていくといいなと思います。仕事をやめてこめっこにかようようになったと言う話もありましたが本当に余裕のない社会にますますなっていくような気がします。そんな中で通えない人たちもいますね。音声コミが貧困になってきている今の世の中心なことがいっぱい。でもこのこめっこの活動が持つ可能性を期待します。手話を勉強しながらこめっこの活動をいつも応援しています。がんばってください。今日のお話をちょっとでも周りの人に伝えていきたいと思います。

○社会の手話への認知とともに、このシンポジウムのように様々な視点や実践から手話を学術的に深めていくことに、とても意味深さを感じます。今後も一緒に考えていきたいと思っています。

○研究が進んでいることを嬉しく思いながら聞きました。手話に懐疑的な医療関係者が多い地域ですので、経験値からの反論では壁が厚い中で、データを基にした研究成果が待たれるところです。言語の臨界期がないという酒井先生のお話はビックリでした。また、指定討論のお二人の方のお話も、ためになる、また

は新しい視点もいただき、学びになりました。特に、聞こえない子どもたちが親になり、その子とのコミが発生する…当たり前ですが、その発想はなかったですね。現在を見る視点とともに繋がっていく先を見通す視点も学びました。自分のこととしては、地道な活動が必要だとひしひしと感じているところです。また、機会があれば、こめっこの見学にもまた行かせてほしいです。

○聴覚に障害を持った子ども達について、知りたいと思ったのが、きっかけで参加しました。子どもたちの言語獲得に手話の必要性がよくわかりました。子どもたちの言語獲得や理解力向上の為にどうすればよいか？と常に考えています。今後も報告を期待しています。

○過去のろう教育について、腹立たしさを感じています。姉は母子家庭の長女で、きちんと教育が受けられませんでした。これからの聞こえない子どもたちがきちんと教育が受けられる世の中になるのではと、こめっこの活動を見て、少し明るい将来を期待できるのではと思っています。

○以前の活動を事前に動画配信で見られるのは、とても良いと思います。ある程度理解をした上で臨めるので、参加者としての心の準備というか、頭の準備もできます。こめっこの活動は知っていましたが、今回のシンポジウムや、事前動画を見て、ちゃんと裏付けのある内容だと言うことがよくわかりました。私の理解が不足してただけだと思いますが、「なんかいいことをやっている」というイメージがあったのですが、それぞれの専門家が知見を持ち寄って、根拠のある活動をチームで進めておられることがよくわかりました。また、事例の発表は具体的でわかりやすかったです。保護者の中には発表となると個人情報など懸念を持たれる方もおられるのではないかと想像しますが、スタッフの方との信頼関係があってのことなのだろうと感じました。子供の成長は、数年～数十年単位での経過観察が必要だと思います。今後の活動や発表なども引き続き期待しています。

○長時間のシンポジウムでしたが、丁寧な進行と話題提供なので、やむを得ないとは思いますが、正直疲れました。「こめっこ」の取り組みについて、大阪府以外の都道府県、市町村等への情報提供はされているのでしょうか？日本財団からの支援を受けているということで、制約があるのでしょうか？例えば当事者団体を通じての提供はされているのでしょうか？中間報告レベルとはいえ、様々な発表データを見ても有効な支援方法だということごとがわかるので、是非積極的に発信していただきたいと強く思いました。

○酒井先生の臨界期についての話や中島先生の将来コーダの親になることを見据えた支援という話が新鮮で勉強になった。

○ソーダであり、福祉関係の仕事をしています。手話を獲得することにより、多面的に得られる効果について学びを深めることができました。私自身、聞こえない兄のいる家庭で育ち、これまでソーダならではの生きづらさもあり、随分とこじらせてきました。ここ数年、きょうだいの生きづらさが少しずつ語られるようになり、それによって自分の心も癒され、遅ればせながら今は手話を学んでいます。いつか兄と手話でケンカもできるようになりたいと兄に伝えたら、仲直りも手話でね、と。思いを伝えるツールが多いほど、将来に渡って、お互いの安心につながると感じています。聞こえても聞こえなくても、自分のことを語れる子に、大人に。その一つのツールとして、手話を獲得する機会が幼い頃から必要なのだと思いました。

○良い質問が出され、それに解答してくださる事によって、それぞれの先生方の発表の理解が深まりました。

○乳幼児教育相談担当として、今回のシンポジウムで得た学びを活かしたいと思います。酒井先生の、言語環境を制限なく整えるという言葉がとても心に残りました。手話という言語を求めている子供に制約をかけず、自然に獲得していくことで、伝えられる喜び、通じる楽しさを感じた時、保護者は間違っていなかったと感じられます。そこに踏み出すための一歩を後押しする私たちの仕事の大切さを改めて感じました。そして、それをこれからも諦めずにしっかり伝えていきたいです。また、松崎先生のお話にあった、個別具体的なコミュニケーション支援についても大変興味をもちました。子供たちの未来を見据えた教育や教育相談を行う身として、大変有意義な時間をいただきました。

○こめっこが大事にされていることが、よく分かりました。具体的な事例の紹介もあり分かりやすかったです。こめっこにたどり着くまでが大変な家族もあるように思いました。そこをつなぐのもわたしたちの役なのかもしれません。

○事前動画で予習ができ学びが深まりました。

○まず、事前配信を観て、集団って本当に大切だと思いました。それは、子どもにとっても保護者にとっても必要な場所であり、安心できる場所でもあります。仲間がいると実感し、その中で、同じだけど違うことを学ぶのです。保護者も同じ

悩みを抱え、1人では解決できないことをみんなで考える、子育ての先輩たちに学ぶ…という場になっていることがよくわかりました。ろう学校もその役割を担っているのですが、子どもの数が減ってきている現在の状況を重く受け止めて、考えていかねばならないと思いました。

私はコーダでもあります。中島先生の話をしていろいろな思いで聞きました。一つ言えることは、きっと今、こめっこに通ってきている子どもたちが大人になってコーダであるわが子を育てる時には、手話で語りかけるだろうと想像していました。それは、親や兄弟が手話で語りかけてくれるからです。自分に近づいてくれる、自分にできることはないかなって思うことができるようになるのではと思うのです。みんなが共通の言葉で話せる環境が家庭にあれば、人間関係を形成する力が身につく、相手の気持ちを汲みとる力もつくのではないかと思います。人間関係形成能力は、1番最初に出会う母子コミュニケーションから始まり、家族、それから地域と広がっていく中で身についていくのだと思っています。

松崎先生のお話の中で、そんなにも細かく様子を見る必要があるんですかと聞かれると言われていました。一人ひとりの課題を考えるうえで、できるだけ多い情報を読み取る力が必要なんだということを勉強させられました。

幼少期の大切な時期にこめっこと出会い、さまざまな経験を通して成長していく親子の様子や報告を聞くことができ、本当に勉強になりました。そして、自分にできることは何か？考えながら私なりに教育活動して参りたいと思います。今後ともさまざまな情報をいただきたいと思います。

○事前配信について、再配信はとてもよいと思いました。忘れていたこともありますので。ご家族の声もよいです。といいながら残念ながら見逃してしまいましたが、。第II部は時間配分が良く、見やすかったです。話題提供もすべて難し過ぎず、普段の活動や子育てに結びつけやすく、ストーンと納得出来ました。指定討論のお話も、松崎先生の観察力の鋭さや、ろう重複幼児への支援の様子もわかって良かったです。中島先生のコーダが将来ろう児の親になるかもしれないというお話は目から鱗でした！質疑応答の時に兄弟(ソーダ)へのフォローの話をきけたのは良かったです。何よりも酒井先生のお話が良かったです！世の中の誤解を解いていきたいです。勝手に壁を作ったり、せっかくのよい刺激を除いてしまっはいけないですね。改めてこめっこの活動の素晴らしさが分かりました。有難うございました。

○大阪の素敵な取り組みを見せていただき、羨ましく思いました。特に、乳幼時期に行政からこめっこさんへ繋がる点が素晴らしいと思いました。

○ぐんぐんPOEの子どもも発達研究していただければ幸いです。

○コーダもコメッコに行ける事が解って良かったです。

○コーダの視点から、今こめっこに通っている聞こえない子供たちの20年後、コーダの親になる可能性があるとしてのお話が興味深かったです。自分の母語に自信を持って子供とコミュニケーションをとってもらいたいと思いました。

○聞こえない子供たちがいずれコーダの親になった時、という視点での議論はこれまでになく、とても興味深く学ばせていただきました。学力や、社会人として力を発揮するという事よりももっと広い視野で、改めて手話獲得の重要性を感じました。

○理論と実践(事例報告等)の両面から理解を深めることができました。よかったですだけで終わるのではなく、地元でどのような活動・取組を展開できるかが大切です。…が、なかなか困難な状況もあります。微力ですが、できることからやっいていこうと思います。

○大変勉強になりました。今回のアーカイブ配信がありましたら、是非もう一度拝見したいと思います。

○言語獲得臨界期説の否定、そして、将来孫世代にコーダが生まれた場合のためにも手話獲得を、という2点がとても強く印象に残っています。次回の開催も楽しみにしています。

○研究が進み、データが蓄積される段階になってきたことを頼もしく思う。ぜひこの結果をろう教育改善に活かして欲しい。

○聞こえる子供が自然に音声言語を獲得するのと同じように聞こえない子供が自然に手話を獲得できる場があることがいいと思います。高校からや大学から手話を覚え始めたろう者と会いますが、覚えるのが大変だったと言われる方もあります。覚えていて悪い事はないので、赤ちゃんから手話に触れるのは大事な事だと思いました。

○脳、心理、言語の分野の研究の状況を知ることができ改めて手話を通して言語を身につけることの大切さがわかりました。私が、学んだのは次のようなことで

した。手話環境が整うと、いつかのタイミングで「化ける」時がくる。(突如爆発的に言語発達が進む時がある)。脳においては、手話言語と音声言語は同じ場所が反応している。脳は、手話言語と音声言語の区別がない。よって、どちらから先に覚えたほうがいいということもない。日本語も手話を身につけていると順当に成長する。4歳ごろ手話と日本語を同時に使えるようになる、子がいる。2歳ごろ二語文がで始める、子がいる。以上のことを受け取ってみて、まず手話を身につける、で良いという確信と、自分がさらに手話を身につけたいという意欲、環境(聾学校など)を整えれば日本語も身につけられるという先行きが見えた安心感を持ちました。

疑問としては、音声言語としての、発話はどうしたらできるようになるのだろうか?というか、妻はどうやって話せるようになったんだろう?ということでした。

これからも、より一層手話でコミュニケーションを行っていき、2語文が出てくるのを楽しみに、言語教育環境を整え、日本語も身につけるようにしていければと思います。これからもお世話になります。大変貴重な研究を教えていただきありがとうございます。

○シンポジウム、御準備大変だったと想像いたします。大変有意義な内容で感謝しております。今後の活動がより活発になることを願っております。

○大阪府と連携が取れている、また専門家がきちんと関わっている様子に、とても良い取り組みだと感じた。ろう児の将来的な話しなども、長期的な視点も大事だと分かった。この取り組みを全国的に広げて欲しい。特に現在問題になっている札幌ろう学校や教育委員会など関係各所に届いて欲しいと思う

○手話言語環境を保障する事がいかに大切かがよくわかる貴重な機会でした。また、言語を習得するには、努力や方法よりも環境や子どもに応じた必然性(自然な流れ)が重要であるとわかりました。

○多面的な見方、考え方に触れられて良いと思います。

○久保沢さんのこめっこでのご活躍の様子、素晴らしかったです!手話パンパン、楽しくて、子供たちが喜ぶますね! 今回、初めてこめっこの子供たちの様子についてお話を伺いましたが、コーダやソーダの子供も含めて、子供たちが手話を獲得されて、知的にもぐんぐん伸びて行く様子が頼もしく、感動しました。長い年月での成長も是非追っていただきたいと思いました。専門家の皆様のお

話を聞いたのもとても勉強になりました。ろうの子供たちが大人になった後のことまで考えての中島先生のお話や、松崎先生の重複障害の生徒の表出の緻密な読み取り、酒井先生の脳科学に基づく言語獲得のお話など、自分にとって目からウロコのお話がたくさんありました。ろう学校の現場は異動が激しく、やっと新しくいらした先生が少し専門性を身につけてくれた、と思うと他校種に異動になってしまいます。こめっこのように長くしっかりした活動を継承していきたいものだと思います。

○貴重な会をありがとうございました。0歳からお子さんの縦断調査ができること、本当に貴重な研究だと思います。検査の数値を追うだけでなく、エピソードを交えたあたたかい報告で、子ども達が豊かに成長していく様子がイメージできました。発達心理や脳言語学、社会学などの多方面からの議論によって、手話言語に取り巻く誤解が解かれていく過程が興味深かったです。乳幼児期、とくに聾学校幼稚部以前のコミュニケーション環境の確保の重要性を改めて痛感しました。地方でもそれをどう実現していくか……取り組んでいきたいと考えています。お力添えいただけますと幸いです。

○報告のひとつひとつが、もっと伺いたいと思うものであった。

○コーダ、ソーダや聞こえる家族も含めて手話に親しむことの重要性を感じました。手話で自分の意思表示ができることで、言語以外の面でも良い影響がたくさんあるということを実感できる内容であったと思います。スクリーニングから確定診断までの間にいかに専門機関と関わるができるかで大きく人生が変わるのでということもよく理解できました。

○シンポジウムは、zoomで全国から参加出来るので、コメッコを知る良い機会でした。又甥の成長を楽しみにしています。

○どの研究発表も非常に興味深いもので、1つ1つもっとゆっくり聞きたいくらいでした。報告書のようなものは発行予定はないでしょうか・・・？

○酒井先生の講義について、第一言語を持つ子供・成人が第二言語を「獲得(という用語を使用されていました)」するケースでは、第二言語の獲得はある程度時期的遅れても問題はないかもしれませんが、日本では、母語(L1)自体の獲得が就学年齢以降にまで遅れるリスクを抱えているろう児が多いという現状があります。そんな中、「手話の獲得は何歳でもよい」というメッセージは大変誤解

を招く、危険な議論だったと感じました。第一言語の獲得についても、成人になつてからでもよい、という研究結果はあるのでしょうか？ 今回ご発表になつたご研究の成果自体は、脳科学分野では重要なものと考えますが、パネルディスカッションの質問にもありましたが、戦前の口話法教育を促す発言ともとりかねないので、このようなシンポジウムでは、Audience の状況を踏まえるべきではないかと感じました。

○手話の意義について、大変心強く思いました。

○初めて参加させて頂きました。4年前より手話を始めこめっこのことをお伺いし、いつの日かお手伝いしたい！と思っており、とても興味がありましたので色々なお話を聞かせて頂き活動等を見せて頂き有意義な時間でした。今後も参加させて頂いて勉強させて頂きたいです。

○同様の活動が他の地域にも広がるようにと思いました。

○こめっこの取り組みが早く全国に広がってほしい。

○今の難聴児が20年後にディナーテーブル症候群になるかもしれないという話に驚きました。いつかは自立するとは思って子育てしていましたが、子どもが自分の家庭を持った時に健聴の夫、子どもだったらその可能性もあるのかと…。またいろんなことを考えるきっかけになりました。新しい発見がたくさんありました。

○酒井邦嘉先生の、言語を学ぶ脳の仕組みを学び、本当に良かったです。他の、講演会で「高齢者は手話を学ばないで」と言われてました。私は高齢者で、悩み迷いましたが、昨日の酒井先生のお話で、勇気を貰いました。

○言語を学ぶ上で臨界期はないこと、興味を持てるように学ぶ環境があればいくつになっても言語は身につくのだろうと感じました。パネラーの先生方の貴重な意見交換が聞けて勉強になりました。

○それぞれの研究者や取り組みのお話はとても興味深く、参考になります。シンポジウムの方向性「手話は大切な言語、手話があればこれだけ伸びる、手話で親子が救われる」その通りだと思います。このシンポジウムに参加するような人は（私も含め）、手話の価値や必要性は認識できています。でも、手話も音声言語

もどちらも習得が厳しいケースがあることや、手話を必要と思ってもらえないケースに対して、この内容を理解してもらい難しさがあることも感じています。

○手話を勉強中です。大変有意義でした。次回も是非参加したいと思っていますので、宜しくお願い致します。

○昨年度は子どもそれぞれのコミュニケーションモードの選択肢を持たせておくことの大切さを再確認し、実際の学校現場で子どもどおしの「共通言語」をどうしていくかの課題に気づかせていただきました。今年は、今の子どもたちが親になったら、という中島先生の視点に新しい課題をいただきました。また、これまで大変難しかった酒井先生が示される言語習得の理論について、チョムスキー理論からかけ離れたものではないという自分なりの理解で、やはり、手話も音声日本語も、いつの段階でも、どの子どもにも選択できるようにしておくことが大切と思いました。そのうえで、自然習得のできる環境を整えるためには聴者がまだまだマジョリティになっている学校や社会は意識して映像言語を提供することが必要なのかなと思いました。毎回、大きな刺激をいただいています。

○YouTube 当時配信もあり、よかったですと思います。

○皆さん同じ方向で活動されている様子がうかがえ心強いです。

○ろう教育等についてのいろんな考えや意見を聞くことができ 大変参考になった

○こめっこの活動内容やご家族が満足して通われていることがよくわかりました。

○事前配信を見損ねていたもので、延長されて、とてもありがたいです。

○とても勉強になりました。大阪の取り組みが全国に広がればいいなど切に思っています。

○今後の活動や報告が楽しみです。保護者に手話の必要性を伝える大事な根拠になるのもありがたいです。

○これからも研究と活動を発展させてください

○それぞれの立場からの意見を伺うことができ、今回も良かったです。

○中島さんの発言で目の前にいる「伝えたい！知りたい！」と思いがち相手と伝え合う術がないのは悲し過ぎます。に強く共感しました。過去のろう教育の弊害もあり、ろう親が聞こえる子供に手話で話しかけず、口話で話しかけている現実を何とかしたい。

○コーダやソーダの話が聞けてよかった。支援をする上でも、さらに話を聞きたいと思った。

○東京大学の酒井先生のお話は難しかったです。

○非常に興味深く拝聴しました。今後も研究の成果を教えてくださいたいと思えずし、機会がえられるならば見学に伺いたいと思いました。

○とても興味深い内容でした。

○今後のお子さんの成長、こめっこの教育・事業に期待できる報告でした。コーダ、ソーダも参加するこめっこのが、まさしく共生社会のモデルだと思います。東京でも同様の動きが本格化してほしい。

○研究者の先生方の生の声と、聞こえない聞こえにくいこどもたちと、親御さんの様子が映像で見られ、今後、手話通訳者としてのかかわり方の勉強になりました。

○大阪府がこんな素晴らしい活動を援助していると知って、誇りに思った。小学校中学校にも、このような考えで教育がなされたらと願う。こめっこの活動をこらからも応援します。

○今年度のこめっこ研究の報告も事前配信していただけると、質問等、準備がしやすいと感じました。シンポジウムの内容は大変勉強になりました。

○当日は、他の学習会と重なり参加できませんでした。事前配信はゆっくりみれて良かったです。子ども達の笑顔が素敵です。保護者・赤ちゃんから小学校の子ども達への支援・繋がり広がり輪が広がり嬉しく思います。

○中島先生の「コーダの視点から」のお話にとっても心惹かれました。私自身はSODAで、難聴です。母を看取る際に、母とろう者である姉の「言語」が異なっていることが本当に悲しかったです。二人の間に手話があればまた違っていただろうに、と感じました。CODAにも手話はやはり必要ですね・・・。

○今後とも多くの方が参加（視聴）できる機会を与えてくださると幸いです。

○ご家族の声と各分野からの報告が、特に参考になりました。

○こめっこの取組はすごいと思いました。地元にもこういう活動をする場があると良いなぁと思いました。各分野の研究も素晴らしいと思いました。今後の研究成果の報告もまた楽しみにしています。

○第二部も配信して欲しい。

○皆さんがいい感じで報告をされてる、実践さて立証されていることへの自信と未来への挑戦と見えてくるものへの継続した体制など素晴らしいと思いました。

○ご家族の声が聞けたのが良かった

○研究が深まることにより、科学的にも人間の発達と手話やコミュニケーションと教育効果が出ていることがわかりました。また、手話で楽しく家族とコミュニケーションを取っている様子も知れて安堵しました。

○手話通訳、文字通訳がわかりやすかったです。今回のシンポは専門家の報告が中心でしたが、次回は現場で動いておられるスタッフの方のお話もお聞きしたいです。

○改めて手話言語の大切さを感じた。難聴の程度にかかわらず保護者に必要性を伝えたい。

○色々な機関と連携して実施しているので、様々な立場や観点でこめっこたちの成長を見守ることができる環境、うらやましく思う。

○聴覚障がい当事者が「CODAの親になる」という視点で、コミュニケーション

ンを取るための「言語」が大切…という捉え方をしていたのが新鮮だった。言語の発達臨界期や母語とその他の言語の違いについても興味深く聞かせてもらった。

○研究報告が中間といってもだいぶん形になっていました。これまでのろう教育を見直すきっかけになりました。酒井先生の報告は斬新でした。これをたくさんの人たちに広まって欲しいです。手話で育つことも意味があることだと改めて思いました。中島先生がコーダの立場で話しておられて、コーダを持つ親として手話でコミュニケーションをとるのは間違いないだと思えるようになりました。ありがとうございました。いろいろな立場から見るのは多角的であり、それらがつながっていることなのでとても有意義な学びでした。

○それぞれの報告をもっと詳しく知りたかったです。

○各分野専門家の方々のお話を聞くことができ、とても勉強になりました。手話言語の大切さを改めて実感しました。こめっこの存在が、多くの方々の拠り所となっており、これからも続いていってほしいと思いました。

○言語獲得を学問的に解説されていた先生方のお話は、少し難しく感じる部分もありましたが、それぞれお話しの要点は理解できたと思います。貴重な機会をいただき、大変勉強になりました。普段お会いするろう者の方々から「大人になってから手話に出会い、一気に言葉への理解や知識が深まった」とお聞きしてきたので、乳幼児やその保護者などが手話を獲得する場を作ることは大変重要だと感じていますが、地方都市レベルでは単発の講座は実施できても、継続した場の設定は財政面や人材面でなかなか難しいのが現状です。こめっこの活動が今後ますます発展し、研究データが蓄積されていくことで、国が制度整備や財政支援を決断してくれると良いなと感じました。大阪府の事業とのことですが、将来的に厚労省への働きかけも期待しております。

○聞こえない聞こえにくい子どもたちの育ちや学びを支援するだけでなく、CODA、SODA も含めた家族の課題等にも配慮しながら関わっていかなくてはと、改めて感じさせられました。

○中間報告なので、まだデータの蓄積不足かと思いました。そこからの推察ととらえ報告を伺いました。今後期待します。

○乳幼児期からの支援、そして家族への支援がいかに大事か、あらためて確認することができました。私は児発・放デイの事業所の職員ですが、重複障害児（特に知的や発達）への支援・コミュニケーション、教育や障害児福祉の制度の中でどう関係機関（行政・ろう協・他事業所など）と連携を図り運営していくのかも知りたいところです。職場に正職員のろう者がいないので（登録スタッフとして数名のろう者には来ていただいています）、大阪は人材が豊富で羨ましいかぎりです。

○こめっこの活動についてよく分かりました。これからも活動を応援しています。

○聴覚障害乳幼児が自分のことを伝えるための第一言語として手話を身に付けること、聴の親と心の繋がりが持てることがとても大切だと思います。それが無理なく自然に身に付くこめっこの活動は素晴らしいです。東広島市でも、「ろう乳幼児手話獲得手話獲得支援事業」を始めています。

○実践に基づく研究報告を興味深く拝聴いたしました。

○小さいときから手話を学ぶ重要性や保護者も集う場の必要性が分かった。また学術研究を行っていて今後につながると思う。今後も参加したいと思う。

○所用のため、ほとんど参加できませんでした。なので質問5は回答できませんが、普通を選びました。最後の質疑応答は聞きましたが、酒井先生の明確な回答がとても良かったと思います。より多くの教育関係者に聞いていただきたいです。

○対面で参加させていただきました。以前から親子が分かり合えるということが大事だと思っていますが、それをさまざまな視点から研究されていて、その功績は非常に有意義だと感じています。今回、ろう児はコーダを育てる立場にもなりうる、という中島先生の発表は大事な視点だと思います。本当に多くのろう者がここの問題で苦しんでいます。その時にその親（祖父母）がどう声掛けするか？大きな問題です。ただ気になったのは、親子の会話がどれくらいできるようになっているのか？というところです。具体的な動画などがなかったので、本当に保護者が手話を習得できているのか？保護者の動画ではデフファミリーの方だけが手話をされていたので、もしよかったらその辺りの様子も見られるとありがたいかったです。私の感覚では、日本手話は音声通訳がある中では習得しにく

いと思っています。保護者向けにも手話習得の時間がある、とのことでしたがその効果検証などもあると説得力が増すのでは？と思いました。

○手話の必要性について、当事者でないがゆえに、いろいろな考え方を見聞きすることで、確信がぼやけてしまうところを、こめっことつながっていることで軌道修正してもらってます。本当に有意義なことをされていると思います。今年は事前配信のみの視聴となってしまったため、5の設問については、大変有意義だったに違いないと思って、入力しました。そちらの報告についても動画配信されたら嬉しいです。

○恥ずかしながら、今回が初めての参加でした。こめっこの実践の重要性を目の当たりにしております。特に、聴親や家族の不安を取り除くための活動は、本当に重要だと思いました。

○当方聴覚特別支援学校に勤務する教師カウンセラー（CP・CCP）なのですが、今後の教育活動に良い刺激を与えてくださっているように思います。今後とも、可能な限り、参加させていただければと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○毎回報告を聞いて、聞こえない赤ちゃんが育っていくうえで「手話」が非常に有効であるということを痛感しています。ろう教育分野にも広がってほしい。

○検査バッテリーの中身を具体的に知りたかったので、教育医療者向けにお話してくれる機会があるといいなと思った。手話者の言語野の賦活についても興味深かった。SODAについてもお話が聞けたのが良かった。

○興味深く拝見させて頂きました。来年も楽しみにしております。

○コーダの子どもも手話の獲得の重要性。20年ほど前の話になりますが、私の周りのコーダの子ども（4才ぐらい）はお母さんに対しては手話を使い、聴者の私たちには手話は使いません。小さなお子さんたちがどうやってこの環境を理解したのだろう…と思っていました。今日のシンポジウムでも手話でのコミュニケーションの大切さのお話をお聞きして納得しました。また兄弟間でも同様だと感じました。こめっこにもコーダの子どもさんも通われている事をお聞きでき、またソーダの子どもさんにとっても手話が習得できたほうが良いしこめっこに参加することによってスタッフさんのフォローがあることを知るこ

とができました。こめっこの活動が全国で広がることを願っています。

○大阪府の取り組みが、近畿や全国へと広がることを期待しています。日本手話に幼少期から日常的に触れる場があることが大事であることは分かっているのですが、一定のエビデンスに基づいて報告があったので、より説得力があり良く理解できました。京都北部在住ですが、どのようにネットワーク作りをしていくか。教育機関ともより連携しながら、未来を生きるための今を作りたいと思います。今後の活動も応援しています。

○自県の遅れを感じました。人口や環境の違い、人工内耳や手話への考え方、様々ではありますが、本県教員は真剣に学ばなければならないと感じています。

○0歳～2歳対象の遊び方、接し方がどうしたらいいかわからないこともありました。松崎先生のお話を聞いたので、良かったです。

○早い段階から、日本手話による日本語の獲得に尽力されている団体があることを知り、当県でもこのような活動団体があるといいと思った。

○研究報告は初めて聞いたときは大きな感動がありました。年々、報告時間が短くなり、これまでの報告内容を踏まえていないと理解できないようになっていきました。数値が蓄積されるのは大変良いことですが、グラフばかりであまり興味が持てませんでした。後半は専門家のご意見（質問に対する）が勉強になりました。特に酒井先生の、言語学習に臨界期がないこと、第1, 2言語というくりには当てはまらないことが分かったことが嬉しかったです。中島さんのSODAに関するお話も、武居先生のご感想と同じく、20年後を想定して考えることの視点をいただきました。

○残念ながら、今回zoom参加出来ませんでした。また機会があればと思います。事前配信再視聴は、1度しか見れなかったのでとても嬉しかったです。手話学習させて頂いたし、取り組みがよく分かりました。全国にあれば……と思いますね。

○年齢を重ねてからでも、充分手話を身につける事が可能との事で、勇気付けられました。

○言語は脳科学的に順番や年齢に関係なく習得できること、そのためには、自然と言語を学べる環境づくりが大切なことを知れて、とても有意義でした。コメッ

コのような活動が広がって行けばよいと思います。今日のシンポジウムを参考にして、私にできることを少しずつでもやっていきたいと思いました。

○ろう・難聴者にとって手話、そして手話のある環境がとても大切だということを改めて感じました。

○20年ぶりに聴覚障害のある子どもたちの事や手話に関する内容のシンポジウムに参加しました。私の知識がアップデートされてなかったので今回知れた事がたくさんあり多くのことを学ぶことができました。手話ばんぱんの内容やその効果などをもっと知りたいなと思いました。

○手話言語を早期に身につけることが日本語の習得にも良い影響を与えることを、こめっこに通うお子さま方のデータの積み重ねによって証明できるのではないかと期待しています。来年も楽しみにしています。

○今回は都合で事前配信しか見ることができず残念でした。次回はシンポジウムに参加できたらうれしいです。

○地元の手話サークルに所属しています聴者です。教育フォーラムに参加した際、生後、聴覚障がい判明するも、医者や先生たちから「手話は必要ない」と言われたら、親もそう思わされてしまう。ということを知りました。聞こえの程度に差があり、少しでも聴力が残っていれば、それを生かすべく補聴器や人工内耳の手術はしても、手話は日本語獲得の妨げになるからマイナスであるという考えです。9割が聞こえる親から生まれるろう児の子育てにおいて、検査をした病院の医師や、教育者から言われたら、親もそう思ってしまうのも無理はないと思います。私は学生時代に英語を専攻していたというのもあり、今年のシンポジウムに参加する前から、バイリンガル以上でも母語がしっかりしていればアイデンティティの確立、情緒の健全な発達に何ら問題ないという考えを持っていました。今回の研究発表の中で、幼児の表現力(発語)がぐっと伸びる時期は違えど、聴児もろう児も同じように成長していくのだなと感じました。聴児は1歳前後で話しはじめますが、ろう児の方が8カ月頃とむしろ早くに物の名前や自分の気持ちを手話で表現できるのはとても良いことだと思いました。自身の子育ての時に知っていれば、ベビーサインに取り組んでいたでしょうし、ダウン症の聴児が声で話すのは難しいが、手話を教えたなら気持ちを表現するようになった。という話を聞いたことがあり、手話は聴覚障がい者のみならず、音声ではないけれど言語のひとつとして有益なコミュニケーションツールであるという考

えがますます強くなりました。また次回も参加したいです。

○こめっこの日々の活動が、幼少期の心身の発達、認知力、コミュニケーションさらに、脳機能の発達へと外見からは見て取れない分野の成長過程を学べ、大切な場であることを再認識しました。また、ソーダ、コーダの将来を見据えた取り組みについて、これからの活動時に心掛ける為の貴重な報告でした。

○コメッコの活動や利用者の思い、最新の研究成果が分かって大変良かった。

○ご参加家族の話にもありましたが、病院できこえないとわかった時に、どの家族もこめっこ等へ紹介してもらえると良いなと思いました。

○今回も大変勉強になりました。当日の運営、準備等、こめっこスタッフの皆様をはじめ、こめっこに集う子ども・ご家族の皆様、話題提供いただいた皆様に心より感謝申し上げます。新しい年、この1年の皆様のますますのご発展とご健康を衷心より祈念いたします。

○各分野からのご講演は、大変勉強になりました。人は他者とのコミュニケーションを通して、自分の世界を構築していくという社会構成主義の考えを踏まえると、どのような言語であれ、他者とのコミュニケーションは重要であると思います。人は他者に何かを伝えるのは、ただ単に事実を伝えることが目的というわけではありません。コミュニケーションが取れている」というのはどのような状態を言うのか、「人は何のために他者とコミュニケーションをとるのか」。今後も、今日のシンポジウムを通して考えたことを相談支援、手話通訳を行っていきたいと思います。

○事前配信は見れましたが、2月10日は急用では見れなかったなので、再配信か報告書がでるのを期待します。

○いつも活動の様子や先生方のお話を聞いて元気を貰ったり刺激を頂き、活かにさせて頂いております。

あとがき

日本手話ネイティブのスタッフたちの語りは、「こめっこ」に通う子どもたちの視線を釘付けにします。それは、0歳台から顕著です。聴児が年齢に応じた語りで上手に伝えてもらって理解することを、同じように、ろうスタッフから上手に手話で伝えてもらって理解します。「わかった！」ときの表情の輝きは、きこえない分だけ、大きいようにさえ感じます。

「こめっこ」を訪れ、幼児たちの理解力、会話力、積極的な姿を目の当たりにして、かつて手話に消極的だった教育の中で子どもを育てたお母さん方や指導した先生方が驚かれます。小学生になった子どもたちが、流暢な手話で説明される内容をすうっと目から吸収していく姿を見ると、リラックスして学び生き得ることの喜びを覚えます。そうした体験を基盤にして、たくさんの困難を乗り越え、健康な心を保って努力していけるのだと思います。きこえない人にとっての手話は、日本語を身につける上でも強みとなり、圧倒的な聴者社会で遅く生活していく原動力となることを、子どもたちの成長と家族の笑顔が確信させてくれます。

聴覚活用のあり方や発声の有無に関係なく、目で生きることの保障がろう・難聴者の幸福(well-being)における要です。そこを私たちのエネルギー源として、今を生き、これからを生きるきこえない子どもたちのために、「手話言語を獲得・習得する子どもの力」を証明するための本研究プロジェクトを、希望をもって続けていきたいと思えます。日本財団からの研究助成に、改めて感謝申し上げます。

大阪府の手話言語条例は、手話の力が評価される社会を目指しています。今後も、実践と研究がバランスよく結びつく活動を、大阪府と連携しながら、関連機関の方々のご協力を得て展開してまいります。

「こめっこ」は間もなく満七歳になります。「こめっこ」と同年度に誕生した子どもたちが、この春“卒こめ”式に臨み、4月からピカピカの小学1年生になって、「もあこめ」の仲間になります。それぞれのきこえをもって、それぞれの環境の中で、手話を獲得・習得して育つことの手を、私たちに新たな気づきと学びをもたらしてくれることを心から期待しています。

2024年3月末日

大阪府手話言語条例評価部会長
「こめっこ」スーパーバイザー
河崎佳子(神戸大学)

この冊子は、令和5年度日本財団の助成を受けて作成しました。

